

自分とは何か
芥川龍之介の世界

はじめに

さて、今回の『自分とは何か 芥川龍之介の世界』という作品は、人気の高い「自分とは何か、その他」と「芥川龍之介の世界」の、この「二つの作品」を一つに統合したものであるが、まず、最初の「自分とは何か」では、デカルトの「われ思う、ゆえに我あり」を厳密に読み解き、ほんとうの自分とは何かを徹底的に解明しているとともに、「小林秀雄とランボー」では、なぜ、ランボーをあれほど熱っぽく語ったのか？ その「真意」の根本的な考察であり、そして、「中原中也の思い出」では、圧倒的な「人気を得た」、中原中也の「ものの見方」が、再び、登場するとともに、有名な「汚れちまった悲しみに」についての考察にもなっています。――一方、「芥川龍之介の世界」では、誰もがよく知っている「羅生門、杜子春、蜘蛛の糸、藪の中」に「トロッコ」をつけ加えたものであり、この最も有名な「四つの作品」と「トロッコ」という作品の一体どこがどのように魅力的なのか？ その「本文」にできるだけ寄り添った「内容考察」になっているとともに、とくに「藪の中」では、いわゆる三人の供述のくい違いの「謎解き」から、まさに事件の「真相」の解明になっていますので、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和元年六月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

一、 自分とは何か

二、 小林秀雄とランボー

三、 中原中也の思い出

※ 参考文献

目次

芥川龍之介の世界

「羅生門」

- 一、冒頭の文章
- 二、下人の置かれた状況
- 三、楼の内を覗いて見ると…
- 四、一人の老婆を見つける
- 五、老婆の前に躍り出る
- 六、老婆の言葉
- 七、下人の反応
- 八、老婆と下人
- 九、老婆の論理
- 十、諸刃の剣

「杜子春」

- 一、若者と仙人
- 二、蛾眉山の魔性たち
- 三、新たな生活

(参考文献)

- 一、若者と老人との出会い
- 二、大金持ちになった杜子春は…
- 三、仙人になりたいと…
- 四、蛾眉山の魔性たち
- 五、魂は、地獄へと…
- 六、新たな生活

「蜘蛛の糸」

- 一、お釈迦様の想い
- 二、地獄からの脱出
- 三、再び、地獄へと

「藪の中」

- 一、木樵りの物語
- 二、旅法師の物語

- 三、 放免ほうめんの物語
- 四、 媼おうなの物語
- 五、 多襄丸たじょうまるの自供
- 六、 清水寺に来れる女の懺悔ざんげ
- 七、 巫女みこの口を借りたる死霊の物語
- 八、 事件の真相

芥川龍之介の世界

トロッコ

- 一、 冒頭の文章
- 二、 良平と二人の子供
- 三、 若い二人の土工どこう
- 四、 海の見える所
- 五、 藁屋根わらぢの茶店
- 六、 二件目の茶店
- 七、 衝撃の一言
- 八、 良平の逆走
- 九、 彼の家うちへ
- 十、 その後の良平

※ 参考文献

自分とは何か
その他

目次

一、 自分とは何か

二、 小林秀雄とランボー

三、 中原中也の思い出

※ 参考文献

自分とは何か

自分とは何か

例えば、デカルトは、疑わしいものは、すべて疑ってみた結果、どうしても疑うことができないものとして、それは、「今、現にこうしてあれこれ疑っている自分だけは疑うことはできない」という、極めて有名な「方法的懐疑」のいわば究極の地点にまで到達することになるわけだ。それが、有名な「われ思う、ゆえにわれあり」という言葉になるかと思う。そして、この「われ思う、ゆえにわれあり」という言葉は、例えば、「自分とは何か」という問いに対して、「自分」（つまりわれ）とは、すなわち、ああでもないこうでもない絶えず思ったり考えたりしている「思惟主体」のことであり、そして、ああでもないこうでもない絶えず思ったり考えたりしている「思惟主体」こそは、まさに「自分」（或いは自分自身）であるという確信を得るわけである。そして、ああでもないこうでもない絶えず思ったり考えたりしている「思惟主体」とは、プラトンの有名な「魂の三区画」から言えば、いわゆる「理知的部分」こそは、まさにああでもないこうでもない絶えず思ったり考えたりしている「思惟主体」そのものであり、それゆえ、「自分」（或いは自分自身）とは、すなわち、「思惟主体」のことであり、それは、「知性＋理性＋母体のようなもの」からなり立っている「理知的部分」に他ならないということである。

例えば、自分というものを一般的に定義する場合には、自分とは、まず「身体と精神(魂)」からなり立っている存在である。そして、他人から見れば、「自分の存在」とは、何よりも「身体的存在」であり、それゆえ、一般に「相手の身体」こそ、まさに「その人自身」であるという印象を与えるものである。しかし、当人(本人)にしてみれば、確かに「自分の身体」は、「自分」という存在に間違いはないが、しかし、「自分自身」（つまり「本当の自分」）とは、ああでもないこうでもない絶えず思ったり考えたりしている自分(つまり「思惟主体」)こそ、まさに「自分自身」(本当の自分)であるという認識を持つているものである。だからこそ、自分の「身体的特徴」だけを見て、あの人は、ああだこうだと言われた場合、いや、本当の自分は、そうではなく、むしろこうなんだと、強く反論することにもなるわけである。そして、自分に関して、ああだこうだと言われた時に、ああ、なるほど、と思ったり、いや、そうではないと、思ったりする主体こそ、まさに「その人自身」ということになるのだろう。それに比べて、自分の身体というのは、間違いなく、自分のものではあるが、なかなか自分の思い通りにはならないものである。例えば、もっと綺麗になりたいとか、もっとやせたいとか、また、もっと背が高くなりたいとか、その他、そのようにあれこれ思っても、なかなか自分の思い通りにはならないものである。それはともかく、そのように自分の身体に対して、ああであってほしい、こうであってほしいと、あれこれ注文を出している主体こそ、まさに「その人自身」ということになるのだろう。すなわち、「自分自身」(本当の自分)というものは、「精神」(魂)の方にこそ、存在することになるかと思う。もし、「自分自身」(本当の自分)というものが、身体の方にこそ、存在するとすれば、長年の修行の末に、両手足を失ったと言われる「達磨」には、(もちろん、伝説であるが)、すでに「自分自身」(本当の自分)は、完全な形ではもう存在しないことになってしまっただろう。しかし、実際は、たとえ両手足を失ったとしても、それで「自分という意識というもの」は欠けたりはしないだろう。それゆえ、「自分自身」(本当の自分)というものは、「精神」(魂)の方にこそ、存在することになるかと思

う。そして、プラトンは、われわれ人間の「魂」を「欲望的部分、気概（激情）的部分、そして、理知的部分」の、この三つに分けたということである。

そして、多くの人たちが、「自分自身」（本当の自分）は、いわゆる「本能的部分」にこそ、存在すると考えているかと思う。確かに、そういう感じを与えるものである。例えば、下等な動物たちは、まさに「本能的部分」に支配されて生きているものであり、それゆえ、下等な動物たちの「自分」とは、すなわち、その動物の「本能的部分」にこそ存在することになるのだろう。それに間違いはない。ただ「本能的部分」に全面的に支配されて生きている動物には、いわゆる「自分という意識」は持てないことになる。つまり、「本能的部分」に支配される割合が多くなればなるほど、その動物の行動は、まさに本能のまま（つまり無意識で）行動をしていることになるからである。一方、大脳の発達した「哺乳類」ともなれば、それなりの「知力」を持っているので、あれこれの判断ができるようになるかと思う。しかし、その判断も、基本的には「本能的部分」に強く支配されているものであり、人間のような本格的な「思考（思索）活動」などは、できないものである。

例えば、動物の場合、何かものを食べたいという欲求が生じてきた場合には、とにかく（或いは基本的には）、身近にあつて、簡単に捕まえることのできるものを食べていることになるのだろう。しかし、われわれ人間の場合には、動物たちとは違って、身近にあるものをただ黙って食べているのではなく、ああでもない、こうでもない、あれこれその人なりの注文をつけたものを食べているのだろう。つまり、「何かものを食べたいという欲求（つまり食欲）」そのものは、われわれ人間の場合でも、また、ほかの動物たちの場合でも、基本的には全く同じものであり、いわゆる「本能的部分」から生じてくるものであるが、しかし、こういう調理でこういうものが食べたいという、その人なりの思い（欲求）は、むしろその人の「理知的部分」から生じて来るものである。すなわち、「本当の自分」（或いは自分自身）というのは、どちらかと言えば、やはり、その人の「理知的部分」の方にこそ、存在することになるのだろう。

つまり、われわれ人間には「二つの源泉」があり、その一つは、「本能（欲望）的部分」を源泉とするものであり、それは、ほかの動物たちにもすべて共通したものである。一方、われわれ人間には、いわゆる「人間へと進化」してくる過程で生じて来た、もう一つの源泉を持っているわけである。それが、すなわち、「理知的部分」を源泉とするものであり、その「理知的部分」こそは、まさにああでもないこうでもないと思ったり考えたりしている主体でもあるわけだ。そして、この「二つの源泉」、一つは、「本能（欲望）的部分」であり、そして、もう一つは、「理知的部分」であるが、そのどちらかの方にこそ、まさに「本当の自分」（或いは「自分自身」）が深く眠っていることになるだろう。

例えば、われわれ人間の「心の中」には、実に様々な「欲望や感情」などが絶えず現われたり消えたりしているものであり、それゆえ、そのような様々な「欲望や感情」などに振りまわされている自分こそ、まさに「自分自身」（本当の自分）であると思ひ込みやすいものである。しかし、ここでよく考えてもらいたいと思うことは、確かに、われわれ人間の「心の中」には、実に様々な「欲望や感情」などが絶えず現われたり、消えたりして、例えば、ああしたいとかこうしたいとか、あれがほしいとかこれがほしいとか、また、誰々が好きだとか嫌いだとか、誰かをうらやましいと思ったり憎らしいと思ったりしているのと同時に、もう一方では、そのように自分の「心の中」に現われた実に様々な「欲

望や感情」などに対して、例えば、いや、そんなことはできないとか、いつまでもそんなつまらないことにこだわっていてどうするんだなどと、絶えず「チェック」を入れている。「もう一人の自分」が間違いないはずである。つまり、様々な「欲望や感情」などに振りまわされている自分と、そのような自分に絶えず「チェック」を入れている「もう一人の自分」とがいて、前者が、いわば「本能（欲望）的部分」であり、そして、後者が、いわゆる「理知的部分」ということになるのである。

それでは、そのどちらに本当の「自分自身」（いわば真我）は、内在することになるのだろうか。もちろん、そのどちらも本当の「自分」に間違いはないが、しかし、「自分をまさに自分たらしめているもの」は、どちらかと言えば、それは、やはり「理知的部分」のほうではないかと思う。というのも、「本能（欲望）的部分」そのものは、ただ、もうああしたいとかこうしたいとか、あるいはあれがほしいとかこれがほしいとか言った、いわば「盲目的な欲求主体（或いは感情主体）」なのである。例えば、お金がほしいとか、セックスがほしいとか、また、車がほしいとか、豪邸に住みたいとか、その他、そのような衝動にかられた時に、もうどのような方法でも、手に入れたと思うわけである。それが、まさに「本能（欲望）的部分」である。しかし、その時に、「もう一人の自分」の方から、「いや、お金は欲しいが、盗みはよくないとか、セックスはしたいが、無理やりはよくないとか、その他」、そのような様々な「チェック」が入ることになるかと思う。それによつてこそ、その人は、「人間らしい行動」ができるようになるわけである。つまり、われわれ人間の「理知的部分」こそは、まさにわれわれ人間をして「人間らしい言動」（或いは「その人らしい言動」）をさせている主体なのであり、その「理知的部分」のなかにこそ、いわゆる「自分自身」（本当の自分）が内在していることになるのである。

もつと分かりやすく言えば、誰でも、お金はほしいと思うし、セックスはしたいと思うわけである。それゆえ、そのような基本的な欲求だけを持って、まさにその人自身（本当の自分）であるとすれば、誰も彼もがほとんど同じ欲求を持っているので、いわゆる「個性」などはどこにもなくなってしまふのである。それゆえ、むしろ、ある人の「心の中に」、「お金がほしいとか、セックスがしたいとか」いう様々な欲求が生じてきた時に（それは、誰の心にも生じて来るものであるが）、そのような時に、その人がその欲求に対して、どのように「対応・対処」していくかに、むしろ「その人自身」（つまり個性）がはっきりと表れてくるものである。何度も言うように、「誰の心にも「食欲、性欲、物欲、金銭欲、その他」の基本的な欲求（欲望）は、生じて来るものであり、それ自体にそれほど個人差はないのである。むしろ、その時に、その「欲求（欲望）」をどのようにして満たそうかと、あれこれ思考をめぐらし行動していくところにこそ、まさにその人自身の「特徴（つまり個性）」が、はっきりと表れるものである。そして、その人があれこれ思考をめぐらした結果、あれにしようとか、これにしようとか言った判断を下すのは、言うまでもなく、その人の「理知的部分」の領域になるわけである。すなわち、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などを創り出しているのは、まさに「理知的部分」であり、また、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等を行なっているのも、まさにその人の「理知的部分」である。つまり、「理知的部分」こそは、その人をして「その人らしい行動」をさせている主体なのである。もつと言え、われわれ人間から、「理知的部分」を取り除いてしまえば、われわれ人間も、

ほかの動物たちと基本的にはまったく変わらない存在になってしまふことである。それゆえ、われわれ人間の「理的部分」こそは、まさにわれわれ人間をして、「人間らしい言動」(或いは「その人らしい言動」)をさせている主体なのである。そして、その「理的部分」の中にこそ、まさに「自分を自分たらしめている本来の自分」が内在していることにもなるということである。

それでは、どうすれば、本来の「自分自身」(いわば真我)にめぐり逢うことができ得るのだろうか？ 例えば、誰でも、自分とは、一体、どういう人間だろうか、あれこれ自分なりに思いをめぐらしては、自分とは、大体、こういう性格や特徴を持った人間である、という自己認識を持っているかと思う。しかし、それは、自分であれこれ自覚できる自分のことであり、自分でも自覚できないもつと深奥にある「自分自身」(それこそが真我である)が、その「真我」にどうすればめぐり逢うことができるのか。これは、意外と難しい問題ではあるが、しかし、その一つの方法としては、例えば、孤独ひとりぼんやりとも、想いに耽つているような時には、様々な「欲望や感情」などはうすれている状態であり、そのような時には、本来の「自分自身」(つまり「純粹自己」)となつて生きていることになるかと思う。また、何か「研究活動」や「創作活動」などに深く溶け入っているような時にも、様々な「欲望や感情」などから解放されて、より密度の高い、それだけ自身身になりきつて生きている状態になるとともに、いわゆる「理的部分」に全面的に支配されて、何らかの「研究活動」や「創作活動」などに時間の経過を忘れて深く溶け入っているような時にこそ、まさに「精神の飛翔」というようなものは、生じやすくなり、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密にとらえることにもなるわけである。そして、そのようなことを何年も積み重ねながら、最終的には真に「内的成長」を遂げることによってこそ、その人は、ほんとうの意味での、まさに真の「自己」(つまり真我)にめぐり逢えることにもなるのだろう。

ちなみに、仏教の「考え方」に従えば、すべてのものは、絶えず変化しているものであり、それゆえ、「自我」(或いは自己)などは、どこにも存在しないのだということになるのかも知れない。もちろん、それは、それで正しい「考え方」ではあるが、ただ、それでは、例えば、ソクラテスの「なんじ自身を知れ」という言葉も、また、いわゆる「自己認識」という言葉も、まったく意味を失ってしまうものであり、それゆえ、一般的には「自我」(或いは自己)というものを前提として考えを進めてもよいものであり、それをデカルト自身の言葉で言えば、いわゆる「われ思う、ゆえにわれあり」であり、その「思う主体」こそは、まさに「われ(つまり自分)」に他ならないということである。

最後に、もう一度、再確認しておきたいと思うが、デカルトは、疑わしいものは、すべて疑つていき、そして、最終的にどうしても疑え得ないものとして、それは、「今、現にこうしてあれこれ疑っている自分だけは疑うことができない」ということで、いわゆる「われ思う、ゆえにわれあり」ということになるわけだが、それは、いったいどういうことかと言えば、それは、ソクラテスが実際に行なっていたこととも共通するものであり、一般に、そうだと思われているものも、実はそうではなく、それではこうなのかと、次から次へと考えや思いなどを新たにしながら、疑わしいものを徹底的に疑っていくうちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまつて、もう何がなんだか自分

でもよく分からないような世界に深く陥ってしまふ、そういう、いわゆる「虚無の世界」のどん底まで行ったということである。そして、その「虚無の世界」のどん底とは、あらゆるものの「意味や価値」などが消えてしまふような世界であるとともに、見る自分と見られる自分との間に何もなくなってしまう、また、問う自分とそれに答える自分自身との間に何もなくなり、終にはお互いがさし向かいになっている状態であり、それは、疑わしいものをすべて徹底的に排除したら、終には問う自分とそれに答える自分自身だけになってしまひ、その間には何もなくなつてしまつたということである。それが、すなわち、「われ思う、ゆえにわれあり」という最終到達地点であるとともに、問う自分が意識的な「自我」（いわば「氷山の一角」）であるとすれば、それに答える自分自身とは、まさにもつとその深奥にある「思惟母体そのもの」（いわば海中の「巨大な氷山」）ということになるかと思ふ。そして、この地点、つまり、問う自分とそれに答える自分自身との間に何もなくなり、終にはお互いがさし向かいになっている状態であるが、そこまで行けば、やがて、お互いが「一体」となる、いわゆる「内的成長」の一つの到達点にまで辿り着くことができ得るとともに、その「地点」こそは、まさに眞の「自分」（つまり真我）にめぐり逢える地点でもあるということである。

*

*

さて、もう一度、「自分とは何か」について、考え直してみたいと思うが、まず、われわれ人間というのは、いわゆる「身体的部分」と「精神的部分」からなり立っているものである。それに間違ひはない。そして、われわれ人間の「身体的部分」というのは、われわれ人間の「五感」によつて、まさに「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知る」ことのでき得るものであり、それゆえ、その人が本来望むだけ「より詳しく知ること」のでき得るものである。一方、われわれ人間の「精神的部分」というのは、自分で自分の「精神的部分」をより詳しく知ること、ある程度は可能であるとしても、しかし、他人が他人の「精神的部分」をより詳しく知ること、極めて難しいことになるかと思ふ。

それでは、われわれ人間の「精神的部分」というのは、一体、どのような構造になつているのかと敢えて問えば、それは、次のようなものになるかと思ふ。——まず、われわれ人間の「精神的部分」、つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）では、実に様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などが絶えず現われたり消えたりしているものであるが、その「精神的部分」、つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）を敢えて大きく「三つ」に分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々を生じる、様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」として、この世に生まれて今日まで生きてきた、その「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などの膨大な量の蓄積（蓄え）と、もう一つは、まさに親から受け継いだ「遺伝子」等があるということである。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的な「姿・形」やその人の表面的な「言動」）などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めて見ているようなところがあるかと思ふが、それは、なぜかと問えば、それは、他人の「表面的な現象」（つまりその人の表面的

な「姿・形」^{すがたかたち}やその人の表面的な「言動」などは、われわれ人間の「五感」（つまり見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知ること）などを通して、それなりにはつきりととらえることができるからであり、一方、他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういうふうになっているかなどは、誰にも分かりようがないものであり、せいぜい「表面的部分」（その時々^{とき}に生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」）などを知る程度であり、もつと奥深くにある「中間的部分」や「深層的部分」などは、本人が、うそ偽りなく、正直に告白しない限りは、なかなかとらえにくいものになるということである。

つまり、われわれ人間の「頭の中」（或いは「心の中」）には、その人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などが深く眠っていると、その「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが自然と生み出されては、その人というものをまさに形成（形づくって）いるものであり、一方、われわれ人間というのは、他人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などのそのすべてを知りようもないものであり、それゆえ、その一人一人の他人の「頭の中」（或いは「心の中」）が、いったいどういうふうになっているかなどは、誰にも分かりようのない、まさに「ブラッ、ク、ボックス」状態であり、それゆえ、その人が、何を思い、何を考えているかなどは、厳密には何ひとつ分からないということになるのだろう。

さて、自分というのは、まさに「身体的部分」と「精神的部分」からなり立っている存在であり、その「身体的部分」というのは、われわれ人間の「五感」によって、誰でも容易に「見聞き嗅ぎ味ひ触れ感じ知ること」のでき得るものであるが、一方の「精神的部分」というのは、まさに「表面的部分」と「中間的部分」それに「深層的部分」からなり立ち、その中でも、この世に生まれて今日まで生きてきた、その人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などの膨大な量の蓄積（蓄え）と、もう一つは、まさに親から受け継いだ「遺伝子」等こそは、まさにその人の「深層的部分」そのものであり、そこからこそ、その人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが自然と生み出されては、その人というものをまさに形成（形づくって）いるものであり、それゆえ、その「深層的部分」こそは、まさにその人の「根源」^{ねげん}そのものであるとともに、そこにこそ、その人をその人たらしめている、まさに「源泉」^{げんねん}そのものがあるということである。

*

*

小林秀雄とランボー

小林秀雄とランボー

小林秀雄は、なぜ「ランボー」をあれほど熱く語ったのか？ この問題は、一般にはどうでもよい問題かも知れないが、それでも、なかなか興味深い内容を内に宿しているので、まず、彼自身の言葉を『ランボオⅢ』から引用し、それから少し考えてみたいと思う。

「……僕が、はじめてランボオに、出くわしたのは、廿三歳の春であった。その時、僕は、神田をぶらぶら歩いていて、と書いてもよい。向うからやって来た見知らぬ男が、いきなり僕を叩きのめしたのである。僕には、何んの準備もなかった。ある本屋の店頭で、偶然見付けた『地獄の季節』の見すばらしい豆本に、どんなに烈しい爆薬が仕掛けられていたか、僕は夢にも考えてはいなかった。（中略）、そして、豆本は見事に炸裂し、僕は、数年の間、ランボオという事件の渦中にあつた。それは確かに事件であつた様に思われる。文学とは他人にとつて何んであれ、少なくとも、自分にとつては、或る思想、或る観念、いや一つの言葉さえ現実の事件である。と、はじめて教えてくれたのは、ランボオだった様にも思われる。……」（中略）

当時、ボオドレエルの『悪の華』が、僕の心を一杯にしていた。と言うよりも、この比類なく精巧に仕上げられた球体のなかに、僕は虫の様に閉じ込められていた、と言つた方がいい。その頃、詩を発表し始めていた福富太郎から、テキストをもらったのであるが、それをぼろぼろにする事が、当時の僕の読書の一切であつた。僕は、自分に詩を書く能力があるとも、また、詩について何ら明らかな観念を持っていたわけでもない。ただ『悪の華』という辛辣な憂鬱な世界には、裸にされたあらゆる人間劇が圧縮されている様に見え、それで僕には充分だったのである。

確かに、それは空前の見ものであつたが、やがて、精緻な体系の俘囚となる息苦しさというものを思い知らねばならなかつた。実際この不思議な球体には、入口も出口もなかつた。——「猫つかぶりの読者よ、私の仲間よ、兄弟よ」——魔法の様な声で呼び込まれたのは、どんな隙間からだったかわからなかつたが、作者に引摺られ、引廻されて、果てまで来ると、彼が「死」に呼び掛ける声をする。「船長、時刻だ。碇をあげよう」、しかし、老船長は、決して碇をあげはしなかつた。その代り「猫つかぶりの読者よ」と又静かに始める様に思われた。僕は、ドオムの内面に、ぎっしりと張り詰められた色とりどりの壁画を仰ぎ、天井のあの辺りに、どうかして風穴を開けたいと希つた。すると、丁度その辺りに、本物の空よりもっと美しい空が描かれているのに気付いた。「旅への誘い」の音楽が鳴り渡り、その出発禁止の美しい旋律は、詩の不信者の胸を抉つた。そういう時だ、ランボオが現れたのは。球体は砕けて散つた。僕は出発する事が出来た。何処へ——断つて置くが、僕は、過去を努めて再建してみたまでだ。

*

*

さて、引用が長くなつたが、しかし、これは、実に見事な文章であり、当時、まだ二十三歳前後であつた小林秀雄の「内的状態」が、あたかも透けて見えてくるような文章である。——例えば、「……僕が、はじめてランボオに、出くわしたのは、廿三歳の春であつた。その時、僕は、神田をぶらぶら歩いていて、と書いてもよい」という文章があるが、これは、実際に神田の古本屋街をぶらぶら歩いていてという意味だけに留まるものではない。

い。もっと広い意味では、この若い時期には、いわゆる古今東西の「数多くの書物」などを読み耽っていたということである。つまり、この若い時期には、自分でももう全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」に襲われて、もう手あたり次第に数多くの書物を読みあさるような「精神状態」であった、ということの意味している。それでは、なぜこの若い時期には、自分でももう全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」に襲われるのだろうか？

それは、「精神的にも肉体的にもまさに成長期」にあたっているからである。そして、肉体がどんどん成長するためには、様々な栄養価の高い「食料」などをどんどん摂取することが、必要不可欠であるのと全く同じように、その人の「心の中」に生じてきた「自我」（自己）が、真に成長するためには、栄養価の高い高質な「知的食料」などをどんどん摂取することが、どうしても必要不可欠になって来るからである。それゆえ、なぜ、この若い時期に、自分でももう全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」に襲われるのかと言えば、それは、その人の「心の中」にはつきりと目覚めてきた「自我」（自己）が、真に成長することを望んでいることから生じる、まさに「精神的空腹感」なのである。そして、それは、様々な真に優れた高質な「書物」などを深く読み耽ることによって、その人の「内的世界」というものは、自分でもはつきりと自覚できるほど激しく「変化」（成長）していくことになるわけである。そして、毎日が「読書三昧」のような生活を送っていると、やがて、次のような不可解な「精神状態」が生じて来ることもなるのである。

それは、今までは、主に外に向けていた目を、逆に、内に向けてることが多くなることで、孤独ぼんやりと「物思い」に耽ったり、あれこれ「自問自答」をすることが多くなるかと思う。そして、そのように目を内に深く向けて、「思惟界」で多くの時間を過ごすようになるのと、今度は、その目を外に向けて、「外界」を見た時に、なぜか見るものすべてが「幻」のように感じられ、実在感がうすれるような感じにもなるかと思う。また、昼間の「太陽の光」が、なぜか今までより眩しく感じられ、それゆえ、昼間、外に出ることが、とかく億劫になるとともに、逆に、夜の「星明かりや月明かり」などがちようどよく感じられ、それゆえ、暗くなってから外出するようなことが多くなるかと思う。もちろん、この時期は、いろいろな「書物」を深く読んだり、また、文学や芸術などの「創作活動」に夢中になったり、或いは、学問などで人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを愛し求めて、本格的な「思考（思索）活動」を何年も積み重ねている状態であるとともに、一方では、底知れぬ「孤独感」や「虚無感」（ニヒリズム）やその他などに襲われたり、あるいは何をすることも億劫で、非常に気だるい「倦怠感」に襲われることも多くなるかと思う。

それは、ボオドレエルの『悪の華』に出てくる言葉を借りれば、「……地上を好んで廢墟（虚無）と化し、欠伸の中に、世界を嘔む。これぞ、倦怠。——眼に思はずも涙を湛へ、長き煙管（思索）を燻らせて、断頭台（死）の夢を見る。読者よ、君はこれを知る、この微妙なる怪物を……」ということになるわけだ。そして、それこそは、まさに「虚無の世界」であるとともに、精神状態は、まさに「神経衰弱」状態にあったということである。そして、二十三歳前後のまだ若い小林秀雄という人は、まさにこの「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）にどっぷりと身を置いていたということが、何よりも大事なことになるかと思う。それは、「……当時、ボオドレエルの『悪の華』が、僕の心を一杯にしていた。と言うよりも、この比類なく精巧に仕上げられた球体のなかに、僕は虫の様に閉じ込められていた、と言った方がいい。その頃、詩を発表し始めていた福富太郎から、テキストをもらったの

であるが、それをぼろぼろにする事が、当時の僕の読書の一切であった。……」と。

しかし、やがて、「……確かに、それは空前の見ものであったが、やがて、精緻な体系の俘囚となる息苦しさというものを思い知らねばならなかった。……」ということになるわけだ。つまり、小林秀雄は、ボオドレエルの『悪の華』という作品の球体のなかに虫のように閉じ込められていたわけだが、それと全く同時進行的に、一方では、いわゆる「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）にどつぷりと身を置いていて、前述のような「精神的混乱」などを経験していたということである。そして、その虫のように閉じ込められていた『悪の華』からだけではなく、もう一方の「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）からも何とか抜け出したいという思いが強くなり、そこで、「……僕は、ドオムの内面に、ぎつしりと張り詰められた色とりどりの壁画を仰ぎ、天井のあの辺りに、どうかして風穴を開けたいと希った。すると、丁度その辺りに、本物の空よりもっと美しい空が描かれているのに気付いた。『旅への誘い』の音楽が鳴り渡り、その出發禁止の美しい旋律は、詩の不信者の胸を抉った」ということになるわけだ。それでは、ここに出てくる、「……すると、丁度その辺りに、本物の空よりもっと美しい空が描かれているのに気付いた。『旅への誘い』の音楽が鳴り渡り、その出發禁止の美しい旋律は、詩の不信者の胸を抉った」というのは、一体、どういう意味なのか？ まず、「本物の空よりもっと美しい空が描かれているのに気付いた」というのは、一言で言えば、「作品（つまり観念によって創り上げられた人工的な美しさ）」ということであり、そして、「旅への誘い」の音楽が鳴り渡るとは、一つは、再び、最初に戻るということであるとともに、もう一つは、「自殺への誘い」の音楽が、小林秀雄の「心の中」で鳴り渡ったということでもあるのだろう。それは、『Xへの手紙』という著作のなかでも、「……言うまでもなく僕は自殺のまわりをうろついていた。このような世紀に生れ、夢みる事の速やかな若年期に、一っぺんも自殺をはかった事のないような人は、よほど幸福な月日の下に生れた人じゃないかと俺は思う。俺は今までに自殺をはかった経験が二度ある、一度は退屈のために、一度は女のために……」ということになるかと思う。つまり、その当時の小林秀雄にとって、この底知れぬ「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）から抜け出すための一歩を踏み出すとは、すなわち、「自ら命を絶つ」（つまり「自殺を図る」こと）以外に、いかなる方法もないと思ひ込むような「心的状態」でもあったのだろう。そして、「……そういう時だ、ランボオが現れたのは。球体は砕けて散った。僕は出發する事が出来た。何処へ——断って置くが、僕は、過去を努めて再建してみただ」ということになるわけである。

さて、小林秀雄が、「ランボオ」にばったりとめぐり逢ったのは、二十三歳の春であった。その当時は、ボオドレエルの『悪の華』によって、その作品の「球体」のなかに虫の様に閉じ込められていたという。そして、その入口も出口もないような「球体のなか」（それはまた「虚無の世界」でもあるわけだが、そのなか）に虫の様に閉じ込められていた時にも、かなり危険な「精神的混乱状態」はあっただろうが、しかし、それは、まだ中期段階の「虚無の世界」ということになるのだろう。ところが、ランボオの『地獄の季節』にばったりとめぐり逢い、それを深く読み耽ることによって、それまでの精神的混乱のかなり危険な状態であった中期段階の「虚無の世界」から、さらに精神的混乱の最も危険な後期段階の「虚無の世界」のどん底まで突き進むような結果になってしまった。それは、彼自身の言葉を借りれば、「……或る全く新しい名付け様もない眩暈が来た。その中で、社会も人間も

観念も感情も見る見るうちに崩れて行く」ような世界である。それは、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまつて、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥つてしまつたとともに、一方では、そのような極めて危険な「精神的混乱」のなかで、人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などを孤独うっとりとして観て取っている（つまり「観照」している）時期でもあり、しかも、それらは、どれもこれもみな美しいものであり、また、美しいと感じられるものであり、それゆえ、もう目も眩むほどの極めて密度の高い「美的世界」（「美の大海原」）を孤独深くさまよっているような「心的状態」でもあるわけである。そして、そのような「虚無の世界」のどん底から、やがて「心の眼」が開ける、いわゆる「内的成長」の一つの到達点へと向かつて行くことにもなるのだろう。……

それはともかく、小林秀雄は、なぜ「ランボオ」をあれほど熱っぽく語つたのか？ それはもちろん、ランボオの「作品」そのものが真に優れていたということになるのだろうが、それと同時に、もう一つの大きな理由としては、小林秀雄は、ランボオによって、いわゆる「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）のどん底にまで突き落とされたとともに、そのランボオによってこそ、やがて、真に「内的成長」を遂げることができたからではないかと思う。そして、小林秀雄は、やがて二十七歳の時に、いわゆる『様々な意匠』で文壇に登場することになるが、その時には、すでに「内的成長」を遂げていたので、その最初の『様々な意匠』の作品の時から、すでに真に「叡知」が働いている「文章（内容）」ともなり得たのではないだろうか。

*

*

最後に、もう一度、その要点だけを再確認しておきたいと思う。まず、小林秀雄がランボオとめぐり逢つたのは、二十三歳の春であった。その当時、小林秀雄は、ボオドレエルの『悪の華』を深く読み耽つていて、その比類なく精巧に仕上げられた球体のなかに、虫のように閉じ込められていたという。それは、言葉を換えれば、まさに「虚無の世界」（「神経衰弱」状態）にどつぷりと身を置いていたということでもあるわけだ。しかし、やがて、「……精緻な体系の俘囚となる息苦しさというものを思い知らされ、（中略）、天井のあの辺りに、どうかして風穴を開けたいと希う」ようになってきた。それは、何とかして『悪の華』（或いは「虚無の世界」）から抜け出したいと、心の底からそう願うようになったということである。しかし、そのように何とかして『悪の華』（或いは「虚無の世界」）から抜け出したいと、心の底からそう願つても、一体、どうすれば、その『悪の華』（或いは「虚無の世界」）から抜け出すことができるのか？ また、そもそも『悪の華』（或いは「虚無の世界」）から抜け出すということ自体、可能なことなのか？ 小林秀雄自身、その答えをまだよく知らなかったに違いない。それゆえ、その一つの方法として、いわゆる「自殺」ということを考えたかも知れない。というのも、この「虚無の世界」にどつぷりと身を置いて様々な「精神的混乱」に深く悩まされていると、ふと「自殺を思う」という時期でもあり、それは、まさに「……地上を好んで廢墟（虚無）と化し、欠伸の中に、世界を嘔む。これぞ、倦怠。——眼に思はずも涙を湛へ、長き煙管（思索）を燻らせて、断頭台（死）の夢を見る。読者よ、君はこれを知る。……」という時期にあたっているからである。「……そういう時だ、ランボオが現れたのは。球体は砕けて散った。僕は出発することが出来

た。何処へ——断って置くが、僕は、過去を努めて再建してみたまでだ。」ということになるわけだ。つまり、何とかして、『悪の華』(或いは「虚無の世界」)から抜け出したいと、心の底からそう願いながらも、その方法がよく分からず、あてどもなく彷徨っている時に、まさに「虫のように閉じ込められていた球体」を見事に打ち砕いてくれる内容を持った、いわゆるランボオの『地獄の季節』と、文字通り、「運命的な出逢い」をしたということである。

それゆえ、もし、小林秀雄が、三〇歳以降にランボオとめぐり逢っていたら、恐らく、あれほど熱っぽく語ることはなかっただろう。なぜなら、三〇歳以降では、すでにランボオの『地獄の季節』の内容と彼の「心の状態」とは、すでに違ったものになっているからである。つまり、ボオドレエルの『悪の華』を深く読み耽っていた時には、まさにその「内容」と当時の小林秀雄の「心の状態」とは、まさに一つに重なり合うほどまったく同じ「虚無の世界」にどっぷりと身を置いていたということである。やがて、その「虚無の世界」から何とかして抜け出したいと、心の底からそう願うようになった時に、まさにその「心からの要求にぴったりと合った内容を持った本(つまり、ランボオの『地獄の季節』)にばったりとめぐり逢うことによつて、その「虚無の世界」のまさにどん底にまでつき落とされたとともに、やがて、真に「内的成長」を遂げることができたということである。だからこそ、まだ若い小林秀雄にとつて、ランボオの『地獄の季節』とのめぐり逢いは、ただ単に「内容の優れた本」にめぐり逢ったというだけではなく、まさに「一大内の事件」ともなり得たわけである。それは、一般に、文学などは、所詮絵空事に過ぎないと思われるているなかで、「……文学とは他人にとつて何んであれ、少なくとも、自分にとつては、或る思想、或る観念、いや一つの言葉さえ現実の事件である。と、はじめて教えてくれたのは、ランボオだった様にも思われる」ということになるわけだ。つまり、ランボオの『地獄の季節』とばったりとめぐり逢うことによつてこそ、いわゆるボオドレエルの『悪の華』の「虚無の世界」よりもう一步先に進んだ、「虚無の世界」のどん底まで突き落とされたとともに、やがて、真に「内的成長」を遂げることができたからこそ、あれほどランボオについて、熱っぽく語る最大の要因ともなり得たのだろう。そして、そのランボオの『地獄の季節』とのめぐり逢いこそは、あれこれ読んで、「ああ、面白かった、楽しかった」というような月並な「絵空事の文学」とのめぐり逢いなどでは決してなく、自分の「内的世界」を根底から劇的に変革させる結果となった、まさに文字通りの「運命的な出逢い」ともなり得たわけである。だからこそ、あれほど熱っぽく語ったのだろう。——以上、そして、もう一度、最初の引用文の「文章」から丁寧に読んでもらえれば、ここまでの説明の意味合いが、はつきりと理解してもらえらるだろうと思う。

*

*

さて、小林秀雄は、『ランボオⅠ』で、ランボオを熱っぽく語り、また、『ランボオⅡ』では、その熱は、次第にうすれ、そして、『ランボオⅢ』では、ランボオを冷徹に総括しているかと思う。ちなみに、小林秀雄が『ランボオⅠ』を書いたのは、二十四歳の時であり、一方、『ランボオⅡ』を書いたのは、それから四年後の二十八歳の時であった。

つまり、小林秀雄自身、その「本文」のなかで、「……僕は、数年の間、ランボオという事件の渦中にあつた」と言っている。この「数年の間」という言葉を軽く読み流してはいけない。なぜなら、「長年の間」ではなくて、まさにこの「数年の間」に、小林秀雄の

「心の中」が大きく変化したということであり、それは、ランボオの『地獄の季節』とばったりとめぐり逢うことよって、ボオドレエルの『悪の華』の「虚無の世界」よりも、一歩先に進んだ「虚無の世界」のどん底まで突き進んだとともに、やがて、真に「内的成長」を遂げることもなったからであろう。……

そして、小林秀雄は、二十七歳の時に、いわゆる『様々なる意匠』で文壇に登場することになるが、その時には、すでに「内的成長」を遂げていたということになるのかも知れない。だからこそ、その最初の『様々なる意匠』の作品の時から、すでに真に「叡知」が働いている「文章（内容）」ともなり得たのではないだろうか。

*

*

中原中也の思い出

例えば、小林秀雄の『中原中也の思い出』という作品のなかに、次のような興味深い文章があるので、それを少し引用してみたいと思う。それは、「……晩春の暮方、二人は石に腰掛け、海棠の散るのを黙って見ていた。花びらは死んだ様な空気の中を、まっ直ぐに間断なく、落ちていた。樹蔭の地面は薄桃色にべっとり染まっていた。あれは散るのじやない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めていない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めていない」というところであるとともに、それが興味深いのは、次のような理由からである。——つまり、われわれ人間が外界の「対象を見る」場合には、どうしても「こちら側に自分がいて、向こう側に見える対象がある」という「相対的な関係」になりやすい。そして、われわれ人間は、その見える対象をできるだけ詳しく「観察」（分析）しながら、その理解をより深めていこうとするのが一般的な見方になるかと思う。しかし、そのような「見方」では、どうしてもその対象を「そのままそっくり理解する」ことは、なかなか出来にくいわけである。

ところが、中原中也の「見方」は、それとはまったく違って、自分と対象とが「相対する」のではなく、むしろどこまでも対象の中に深く溶け込んで、終には対象と「一体化」し、そして、自ら「海棠の木」となって、その「内面（内的世界）」を徹底的に生きてみるという「見方」なのである。それは、有名なベルグソンの「直観」という見方であり、対象を「外から見る」のではなく、むしろ「内から観る」という見方である。そして、小林秀雄は、若い頃からベルグソンの著作を愛読していたので、この「見方」をよく知っていたはずである。だからこそ、中原中也の、「……あれは散るのじやない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めていない」という言葉や、葉を聞いて、小林秀雄は、「……何んという注意と努力、私はそんな事を何故だかしきりに考えていた。驚くべき美術、危険な誘惑だ、俺達にはもう駄目だが、若い男や女は、どんな飛んでもない考えか、愚行を挑発されるだろう。……」という下りのところである。それでは、この文章の一体どこがどのように「興味深い」のかと言えば、それは、次のようなところである。つまり、「……あれは散るのじやない、散らしているのだ、一とひら一とひら散らすのに、屹度順序も速度も決めていない」というところである。一とひら一とひら散らすのには、違くない、何んという注意と努力、私はそんな事を何故だかしきりに考えていた。驚くべき美術、危険な誘惑だ、俺達にはもう駄目だが、若い男や女は、どんな飛んでもない考えか、愚行を挑発されるだろう。……」という言葉になるわけである。それでは、なぜ、「驚くべき美術、危険な誘惑だ」ということになるのか？ それは、対象の中にどこまでも深く溶け込んで、一種の没我的状態になって、その対象を「内から観る」という見方、それこそ、「芸術的直観を生む見方」であるが、そのような「見方」を長く続けることは、われわれ人間の精神にとっては、極めて苦痛であるとともに、極めて危険なことでもあるわけである。だからこそ、「……花びらの運動は果しなく、見入っている切りがなく、私は、急に厭な気持ちになって来た。我慢が出来なくなってきた。その時、黙って見ていた中原が、突然『もういいよ、帰ろうよ』と言った。私はハッとして立上り、動揺する心の中で忙し気に言葉を求めた。『お前は、相変らずの千里眼だよ』と私は吐き出す様に応じた。彼は、いつもする道化した様な笑いをしてみせた。……」という文章が続いていくことになるわけである。

それでは、「……私はハッとして立上り、動揺する心の中で忙し気に言葉を求めた」というのは、一体、どういうことを意味するのか？ それは、次のようなことではないかと思う。つまり、その理由の一つとしては、どこまでも対象の中に深く溶け込んで、その対象を「内から観ている状態」であったが、そのような「心の状態」を長く続けることが苦痛になってきたということであり、また、なぜ、「動揺する心の中で忙し気に言葉を求めた」のかと言え、それは、「没我的な精神状態から早くふつうの精神状態に戻そうとするため」と、もう一つの「大きな理由」(こちらのほうが遙かに大きな理由である)が、中原中也に自分の「心の中」までも見透かされているのじゃないかという思い(つまり動揺)からということになるのだろう。そして、「……お前は、相変らずの千里眼だよ」と言ったのは、中原中也の「ものの見方、とらえ方、感じ方」などが、まさに「どこまでも対象の中に深く溶け込んで、その対象を『内から観る』という見方である」からである」とともに、自分の「心の中」までも同じような方法で見透かされているのじゃないかという思いからである。それは、「……花びらの運動は果しなく、見入っていると切りがなく、私は、急に厭な気持ちになって来た。我慢が出来なくなってきた」。そのような自分の「心の中」をまさに察知したかのように、「……その時、黙って見ていた中原が、突然『もういいよ、帰ろうよ』といった」からであると同時に、それだけではなく、中原中也に対する自分の「考えや思い」までも同じような方法で見透かされているのではないかと思っただろう。それは、絶え間なく散る海棠の花びらを黙って見入っているうちに、小林秀雄の「心の中」にふと「中原中也の死」という「想い(イメージ)」が浮かんできたとしても何も不思議なことではないだろう。だからこそ、「……私はハッとして立上り、動揺する心の中で忙し気に言葉を求めた」ということにもなるわけだ。

ちなみに、「……俺達にはもう駄目だが、若い男や女は、どんな飛んでもない考えか、愚行を挑発されるだろう」という言葉の説明が残っているが、それは、次のようになるかと思う。つまり、若い人というのは、ちよつとした言葉にも影響を受けやすいものであるが、それがより魅力的な言葉や考え方であれば、なおさらものに影響を受けてしまい、思慮分別もなく一気に暴走や愚行に走ってしまう傾向があるということである。そして、その中の「愚行」という言葉の一つとしては、例えば、「自殺を図る」ということもあるのかも知れない。それはともかく、小林秀雄の「心の中」にふと「中原中也の死」という「想い(イメージ)」が浮かんできたことは、ほとんど間違いなことだろう。そして、まさに「……その時、黙って見ていた中原が、突然『もういいよ、帰ろうよ』といった」のを聞いて、「……私はハッとして立上り、動揺する心の中で忙し気に言葉を求めた」のも、まさに自分の「心の中」にふと浮かんできた「中原中也の死」という「想い(イメージ)」を、中原中也に見透かされたに違いないと思ったからだろう。だからこそ、「……私はハッとして立上り、動揺する心の中で忙し気に言葉を求める」ことにもなるわけだ。そして、「お前は、相変らずの千里眼だよ」と私は吐き出す様に応じた。その理由も、中原中也の「ものの見方、とらえ方、感じ方」などが、まさに「どこまでも対象の中に深く溶け込んで、その対象を『内から観る』という見方である」からであるとともに、自分の「心の中」までも同じような方法で間違いなく見透かされているに違いないという思い(つまり動揺)からなのである。そして、そのような「ものの見方、とらえ方、感じ方」こそは、まさに人間や様々な物事の「本質、真実、真理、源泉、その他」などをどこまでも厳密に

とらえることができ得る、まさに「直知・直観」を生む見方でもあるわけである。そして、そのような「見方」を中原中也は、恐らく、「……自然と生まれながらに持ち合わせていた」ことに、小林秀雄は、少なからず驚いたということになるのだろう。

*

*

さて、本文に戻ると、中原が鎌倉に移り住んだのは、死ぬ年の冬(二月)であった。前年(十一月)、子供をなくし、発狂状態に陥った事を、私は知人から聞いていたが、どんな具合に恢復し、どんな事情で鎌倉に来るようになったのか知らなかった。久しく殆ど絶交状態にあった彼は、突然現れたのである。私と彼との関係は、一種の悪縁であったと思っっている。中原と会って間もなく、私は彼の情人に惚れ、三人の協力の下に(人間は憎み合う事によっても協力する)、奇怪な三角関係が起き上り、やがて彼女と私は同棲した。この忌わしい出来事が、私と中原との間を目茶目茶にした。言うまでもなく、中原に関する思い出は、この所を中心としなければならぬのだが、悔恨の穴は、あんまり深く暗いので、私は告白という才能も思い出すという創作も信じる気になれない。——中原は、女が盗まれた時、突然として僕は「口惜しい男」に変わった、と書いてあるだけであった。

*

*

例えば、夏目漱石の『こころ』という作品は、非常に有名であるが、その「作品」のなかで、いわゆる「一人の女性」(お嬢さん)をめぐる「二人の親友」(先生とK)との「三角関係」が出てくるが、それと全く同じように、まさに「一人の女性」(長谷川泰子)をめぐる「二人の親友」(小林秀雄と中原中也)との「三角関係」が発生したということである。そして、「女性」(長谷川泰子)は、結局は「小林秀雄」を選んで、同棲中であった「中原中也」から離れたということである。これは、「女性」(長谷川泰子)の選択であり、ある意味では「中原中也」にとってもどうしようもないことである。

一方、夏目漱石の『こころ』という作品の場合、いわゆる「一人の女性」(お嬢さん)は、Kが自分に切ない「恋心」を寄せていることは全く知らなかったが、たとえ知っていたとしても、「一人の女性」(お嬢さん)は、迷うことなく、「先生」を選んでいたのであり、それゆえ、この「三角関係」は、「先生」がお嬢さんを手に入れ、そして、「K」は、やがて、「自殺」を遂行するという結果になってしまうのである。

そして、「作者」(夏目漱石)は、この「作品」の中で非常に有名な「恋は、罪、悪である」と言っている。それは、一体、なぜなのかと言えば、それは、次のようなことである。——つまり、人を本気で愛すれば、必ず、誰かが傷つくことになる。人を傷つけずにはおかないものだからである。誰もが「罪の意識」(或いは「良心の呵責」というものを、多かれ少なかれ、背負うことになる。だからこそ、「恋(恋愛)は罪悪である」とともに、人間の「罪」(悪業)というものを誰もが嫌が上でも「思い知る」ことになるのである。

それをもっと掘れば、例えば、友達関係、同居関係、恋人関係、夫婦関係、愛人関係、その他、すべて同じことである。つまり、「男女」(或いは「同性」)同士が、本気で相手と深く「関わる」(或いは「愛する」)ことになれば、必ず、お互いの「利己的自我(エゴ)」と利己的自我(エゴ)とが本気でぶつかり合うことになる。そして、お互いの関係が「うまくいっている」時には、まさに「楽しい、うれしい、幸せ、その他」という「喜びの感情」を味わうことができ得るかも知れないが、一方、お互いの関係が「うまくいかなかった」時には、逆に、「不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨

念、その他」の感情に変わってしまうのである。つまり、本気で相手と深く「関わる」ということは、まさにそういうことであり、しかも、それが「男女の関係」であれば、それだけより「どろどろとした生々しいもの」になっていくのである。

例えば、それは、友達関係、恋人関係、夫婦関係、愛人関係、その他、すべて同じことであるが、つまり、「男女」（或いは「同性」）同士が、本気で相手と深く「関わる」（或いは「愛する」）ことになれば、ほかの異性と親しく話をしているような場面などに出つくわすと、その人の「心の中」では、押さえ難いほどの「嫉妬心」や「不平・不満」その他の「負の感情」に襲われてしまうものである。——それは、誰の「心の中」でも全く同じことであり、それは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、相手の「愛情」が「他の対象」へと向かうことを「恐れている」のである。それでは、なぜ、それを「恐れる」のだろうか？ それは、相手の「愛情」が自分に向かっているからこそ、まさに「楽しい、うれしい、幸せ、その他」という「喜びの感情」を味わうことができるのであり、逆に、相手の「愛情」が自分以外の「他の対象」へと向かってしまえば、今まで得ていたそのような様々な「喜びの感情」を味わうことができなくなってしまうと共に、今度は、逆に、実に様々な「不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、その他」の、まさに「負の感情」に変わってしまうからである。

*

*

さて、「……中原に最後に会ったのは、狂死する数日前であった。彼は黙って、庭から書斎の縁先きに這入って来た。黄ばんだ顔色と、子供っぽい身体に着た子供っぽいセルの鼠色、それから手首と足首に巻いた薄汚れた繻帯ほうたい、それを私は忘れる事が出来ない」とある。ちなみに、一九三七年（昭和十二年）九月に、中原中也是、『在りし日の歌』の原稿を清書して、小林秀雄に託している。そして、その年の十月二十二日に、中原中也是、結核性脳膜炎を発症して、満三十歳の若さでこの世を去っているのである。

*

*

汚れちまった悲しみに

今日も小雪の降りかかる

汚れちまった悲しみに

今日も風さへ吹きすぎる

中原の心の中には、実に深い悲しみがあって、それは彼自身の手にも余るものであったと私は思っている。彼の驚くべき詩人たる天資も、これを手なずけるに足りなかった。（中略）、言い様のない悲しみが果てしなくあった。私はそんな風に思う。彼はこの不安をよく知っていた。それが彼の本質的な抒情詩の全骨格をなす。彼は、自己を防御する術すべをまるで知らなかった。世間を渡るとは、一種の自己隠蔽術いんぺいに他ならないのだが、彼には自分の一番秘密なものを人々に分かちたい欲求だけが強かった。（中略）、人々の談笑の中に、「悲しい男」が現れ、双方が傷ついた。善意ある人々の心に嫌悪が生れ、彼の優しい魂の中に怒りが生じた。彼は一人になり、救いを悔恨のうちに求める。汚れちまった悲しみに……これが、彼の変わらぬ詩の動機だ。終わりのない畳句畳句だとある。

*

*

さて、われわれ人間の、いわゆる「人間形成」というものは、誰でもそうであるように、

一つは、「遺伝的要素」と、もう一つは、その「環境的要素」(つまり「生い立ち」)から極めて大きな影響を受けて形成されるものである。それゆえ、中原中也も決して例外であるはずはなく、中原中也がいかに中原中也らしい「人間形成」をするためには、一つは、「遺伝的要素」と、もう一つは、その「環境的要素」(つまり「生い立ち」)から極めて大きな影響を受けているということである。そして、「遺伝的要素」としては、中原中也の弟によると、「……農から出て立志した父の『荒い血』と封建の臣として淘汰された母方の『静かな血』の混血から成るもの」とある。一方、「環境的要素」(つまり「生い立ち」)のほうは、中原中也の「全過去」(それは中原中也の「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」)などから、自ずと中原中也なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが形成されることになるのである。

そして、中原中也の場合、その「環境的要素」(つまり「生い立ち」)のどのようなところが、どのように作用して、中原中也のような人間になったのかは、中原中也の研究者ではないので厳密には知らないが、小林秀雄の見方によると、「……中原の心の中には、実に深い悲しみがあつて、それは彼自身の手にも余るものであつたと私は思っている」ということである。ただ、ここで面白いと思うのは、小林秀雄は、「……世間を渡るとは、一種の自己隠蔽術に他ならない」と言っているところである。それは、一体、どのような「意味合い」になるのかと言え、それは、次のようなことである。つまり、「ほんとうの自分」(特に他人に「知られたくないようなこと」)は、なるべく隠して、他人と関わろうとするのが、まさに「処世術」(つまりは「世渡り」)だと言っているのである。

例えば、太宰治は、自分の「人間恐怖」を隠すために、有名な「道化」を演じるようになったと告白している。そして、『斜陽』のなかでも、「……僕が早熟を装って見せたら、人々は僕を、早熟だと噂した。僕が、なまけものの振りをして見せたら、人々は僕を、なまけものだと言った。僕が小説を書けない振りをして見せたら、人々は僕を、書けないのだと噂した。僕が嘘つきの振りをして見せたら、人々は僕を、嘘つきだと噂した。僕が金持ちの振りをして見せたら、人々は僕を、金持ちだと噂した。僕が冷淡を装って見せたら、人々は僕を、冷淡なやつだと噂した。けれども、僕が本当に苦しくて、思わず呻いた時、人々は僕を、苦しい振りを装っていると噂した。どうも、くいちがう」とある。

*

*

これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、われわれ人間というのは、その人の「表面的な現象」(つまりその人の表面的な「姿・形」すがたかたち)やその人の表面的な「言動」などを見聞きしては、この人は、こういう人、あの人は、ああいう人と、勝手に決めてかかっているところがあるが、そのような傾向がはつきりあるからこそ、われわれ人間というのは、どうしても「外的事実」というものを、より重視するようになる。結局は、それによって、自分というものを少しでもよく見せようとするにもなるわけである。——つまり、「外的事実」というのは、その人の「身体的特徴」(容姿・容貌)などをはじめ、外に現われる様々な言動、例えば、仕事、生活、趣味、娯楽、遊び、その他等で、その時々表れる、その人の「顔の表情、しぐさ、言葉や行動、その他」、それらに加えて、その人の「……生い立ち、年齢、学歴、職歴、生活状況、時代的背景、その他」などである。

一方、「内的事実」というのは、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)に生じ

て来る様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などであるが、それを大きく三つに分けてみると、一つは、「表面的部分」として、その時々を生じる様々な「思いや考えあるいは欲望や感情、その他」などがあり、一つは、「中間的部分」として、永続して持ち続けている様々な「思いや考えあるいは欲望や感情」などがあり、そして、もう一つは、「深層的部分」として、今日まで生きてきたその「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」などの膨大な量の蓄積（蓄え）と遺伝子等があるかと思う。

さて、われわれ人間というのは、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ているのであり、その人の「内的事実」が、いったいどういうものであるかは、よく分からないものである。それゆえ、われわれ人間は、どうしてもその人の様々な「外的事実」を見ては、それをもとにして、その人に関してあれこれ判断し、評価しているということである。

一方、その人自身というのは、逆に、その人の「内的事実」を生きているということであり、それゆえ、「外的事実」と「内的事実」との間には、当然のことながら、多かれ少なかれ、ズレがあるということである。

*

*

そして、太宰治という人は、出来るだけ人とうまく関わろうとして道化を演じて、自嘲的になり、そのために心身ともにすり減らしてしまう。一方、中原中也という人は、逆に、人との関係をわざと壊し傷つけ合うように関わり、その結果、自分も深く傷つき孤立し、そして、そのような人との関わり方しかできない自分を「悔恨」（後悔）しながらも、すべての「救い」を「詩作」の中に求めたということである。それを小林秀雄は、次のように（実に見事に）表現している。つまり、「……人々の談笑の中に、『悲しい男』が現れ、双方が傷ついた。善意ある人々の心に嫌悪が生れ、彼の優しい魂の中に怒りが生じた。彼は一人になり、救いを悔恨のうちに求める。汚れちまった悲しみに……これが、彼の変わらぬ詩の動機だ。終わりのない畳句だ」と言っている。

つまり、人々が楽しく「談笑」（おしゃべり）をしている所に、「悲しい男」（いわば「心に傷を持った男」）が現われ、わざと傷つけ合うように関わり、双方が傷ついた。善意ある人々の心に（中原中也に対する）嫌悪が生れ、一方、彼の優しい「魂の中」に怒りが生じた。そして、彼は一人になり（つまり孤独）になり、「詩作」だけが中原中也の唯一の「救い」（或いは「心の拠り所」となるのである。——つまり、「汚れちまった悲しみ」というのは、すなわち、「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」のことであり、それが、まさに「汚れちまった悲しみ」であり、それを「源泉」として、中原中也の「詩」が生み出されて来るのである。

汚れちまった悲しみに

今日も小雪の降りかかる

汚れちまった悲しみに

今日も風さえ吹きすぎる

汚れちまった悲しみは

たとえば狐の革裘（かわごろも）

汚れちまった悲しみは

小雪のかかってちぢこまる

汚れっちまった悲しみは

なにのぞむなくねがうなく

汚れっちまった悲しみは

倦怠(けだい)のうちに死を夢(ゆめ)む

汚れっちまった悲しみに

いたいたしくも怖気(おじけ)づき

汚れっちまった悲しみに

なすところもなく日は暮れる……

まず、「汚れちまった悲しみ」とは、まさに「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶(想い出)」のことであるが、その上に、今日も「小雪」の降りかかる。この「小雪」というのは、いわば「いやなこと・傷つくこと」などであり、今日も「小雪」(いわば「いやなこと・傷つくこと」)などが降りかかる。そして、今日も「風」さて吹きすぎるとあるが、この「風」は、恐らく、一つは、自分の「心の中」に吹き抜ける空しい「虚無の風」であるとともに、もう一つは、恐らく、(中原中也に対する)他人の「噂」(風評)でもあり、しかも、その「噂」(風評)は、言うまでもなく、それは、良い「噂」(風評)などではなく、むしろ悪い「噂」(風評)などが巷(ちまた)に吹き過ぎるといふこともあるのだろう。

次に、「汚れちまった悲しみに」に、それは、「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶(想い出)」のことであるが、その「一つの例」としては、例えば、まさに「狐の革裘」があるといふことである。——例えば、人間をだます動物には、有名な「狸や狐」その他がいるが、狸は、どちらかと言えば、オスのイメージが強く、一方、狐は、どちらかと言えば、メスのイメージが強いかと思う。つまり、この「狐の革裘」というのは、いわば「長谷川泰子」(もつと広い意味では三人の「三角関係」)のことであるが、それが、まさに「汚れちまった悲しみ」、つまり、「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶(想い出)」の中の、一つの「実例」になるといふことである。そして、「……小雪のかかってちぢこまる」とあるが、これは、「小雪」(いわば「いやなこと・傷つくこと」)などが、自分に降りかかって来て、まさに「ちぢこまる」(つまり「身も心も萎縮する」というようなことである)。

次の「……汚れっちまった悲しみは、なにのぞむなくねがうなく、汚れっちまった悲しみの『悪の華』の中に出てくる、「……地上を好んで廃墟(虚無の意味や価値のないもの)と化し、欠伸の中に、世界を嘔吐。これぞ、倦怠。——眼に思はずも涙を湛へ、長き煙管を燻らせて(ああでもないこうでもない)と長き思索を巡らして)、断頭台(死)の夢を見る。読者よ、君はこれを知る。……」という内容とどこか共鳴するところがあるのかも知れない。つまり、「虚無の世界」に深く沈んでいる「心的状態」でもあるのである。

最後は、「汚れちまった悲しみに」に、それは、「……人を傷つけ、そして、自分も傷つ

いてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」のことであるが、その「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」に痛々しくも怖気づいてしまい、そして、また、「汚れちまった悲しみ」に、それは、「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」のことであるが、その「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」に対して、どうする術（方法）もなく日は暮れる（月日は流れるばかり）である。そして、この「汚れちまった悲しみ」（それは「……人を傷つけ、そして、自分も傷ついてしまった実に様々な過去の記憶（想い出）」）を「源泉」として、中原中也の「詩」が生み出されて来るということである。

*

*

「参考文献」

※底本「方法序説」デカルト・落合太郎訳（「岩波文庫」）

※底本「考えるヒント4」小林秀雄著（「新潮文庫」）

芥川龍之介の世界
完全版（トロッコ付）

目次

芥川龍之介の世界

「羅生門」

- 一、冒頭の文章
- 二、下人の置かれた状況
- 三、楼の内を覗いて見ると…
- 四、一人の老婆を見つける
- 五、老婆の前に躍り出る
- 六、老婆の言葉
- 七、下人の反応
- 八、老婆と下人
- 九、老婆の論理
- 十、諸刃の剣

「杜子春」

- 一、若者と仙人
- 二、蛾眉山の魔性たち
- 三、新たな生活

(参考文献)

- 一、若者と老人との出会い
- 二、大金持ちになった杜子春は…
- 三、仙人になりたいと…
- 四、蛾眉山の魔性たち
- 五、魂は、地獄へと…
- 六、新たな生活

「蜘蛛の糸」

- 一、お釈迦様の想い
- 二、地獄からの脱出
- 三、再び、地獄へと

「藪の中」

- 一、木樵りの物語
- 二、旅法師の物語

- 三、 放免ほうめんの物語
- 四、 媼おうなの物語
- 五、 多襄丸たじょうまるの自供
- 六、 清水寺に来れる女の懺悔ざんげ
- 七、 巫女みこの口を借りたる死霊の物語
- 八、 事件の真相

芥川龍之介の世界

トロッコ

- 一、 冒頭の文章
- 二、 良平と二人の子供
- 三、 若い二人の土工どこう
- 四、 海の見える所
- 五、 藁屋根わらの茶店
- 六、 二件目の茶店
- 七、 衝撃の一言
- 八、 良平の逆走
- 九、 彼の家うちへ
- 十、 その後の良平

※ 参考文献

羅生門

羅生門

例えば、芥川龍之介の数多くの「作品」の中でも、世界的にもよく知られている「作品名」の一つと言えば、それは、やはり映画でお馴染みの『羅生門』ということになるかと思うが、ただ映画の『羅生門』というのは、内容的には『藪の中』の作品が描かれているものであり、それでは、実際の『羅生門』という作品は、一体、どのような「内容のもの」になるのかと問えば、それは、まさに次のようなものになるのである。

一、冒頭の文章

ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗の剥げた、大きな石柱に、蟋蟀（この蟋蟀は今日の蟋蟀で季節は秋になる）が一匹とまつている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかに、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかに誰もいない。（それほどさびれていた。）

何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云う災がつづいて起った。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に売っていたと云う事である。洛中（京域内）がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄てて行くと云う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしな事になってしまったのである。

その代りまた鴉がどこからか、たくさん集って来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鷓尾（名古屋城の金鯱のような飾り）のまわりを啼きながら、飛びまわっている。ことに門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたようにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。——もつとも今日は、刻限が遅いせいか（暮方や雨で）、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きな面炮を気にしながら、（だとすれば年齢的にはまだ若い下人か？）、ぼんやり、雨のふるのを眺めていた。（本文）

*

*

それでは、この作品の「内容」を順を追って見ていきたいと思います。それが、次のような有名な「冒頭」（つまり「書き出し」）から始まるものである。つまり、「……ある日の暮方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。広い門の下には、この男のほかに誰もいない。（中略）、何故かと云うと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とか云う災がつづいて起った。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、それを路ばたにつみ重ねて、薪の料に売っていたと云う事である。洛中（京域内）がその始末であるから、羅生門の修理などは、

元より誰も捨てて顧る者がなかった。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てて行くと言う習慣さえ出来た。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがって、この門の近所へは足ぶみをしない事になってしまったのである」とある。しかも、「……昼間から夕暮、数多くの鳥たちが集まって、門の上にある死体の肉を、啄みに来るのである」ということである。

さて、ここまでの「状況」説明を読むだけでも、これからどういことが起こっても、何も不思議なことではないという、ほとんど「無法状態」に近い状態にあるということである。それでは、この「設定」は、一体、何を意味するのかと問えば、それは、われわれ人間というのは、誰でも何らかの「道徳観や倫理観」などを持ち合わせているかと思うが、しかし、それも「衣食住足りて、初めて礼節を知る」ということであり、もし、生きるための最低限の「衣食住」さへも欠落してしまえば、つまり、このままでは、飢えて死ぬか、凍えて死ぬしかない、というような状況にまで追い込まれた時に、なお「道徳観や倫理観」などが健全に機能するものなのかどうかの「大問題」を提示しているのである。——そして、登場人物の下人も、まさに「この問題」で悩んでいたのである。というのも、実は、四五日前に暇を出され、それゆえ、行くところもなく、途方に暮れていたのである。このままでは、どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでいいるではない。選んでいたら、結局、飢死するばかりである。それゆえ、手段を選ばないということは（頭の中では）「肯定」しながらも、（つまり、盗人になるしかないと思いつつも）、それを「実行」できずにいたという展開になるのである。それが次の「本文」である。

二、下人の置かれた状況

作者はさつき、「……下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと言う当てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ帰る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた」と云うよりも「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれている」と云う方が、適当である。その上、今日の空模様も少からず、この平安朝の下人の *Sentimentalisme* に影響した。申の刻下り（午後四時過ぎ）からふり出した雨は、いまだに上るけしきがない。そこで、下人は、何をおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云う音をあつめて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支えている。——どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいいるではない。選んでいれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまえばかりである。選ばないとすれば——下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。

しかしこの「すれば」は、いつまでたっても、結局「すれば」であった。下人は、手段を選ばないという事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「盗人になるよりほかに仕方がない」と云う事を、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいた（つまり「実行できずにいた」）のである。

下人は、大きな嚏（くしゃみ）をして、それから、大儀そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまっていた蟋蟀も、もうどこかへ行ってしまった。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧れのない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思っただけである。すると、幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗った梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死にばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。（本文）

*

*

さて、下人は、何をおいても差当り明日の暮しをどうにかしようとして——云わばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。——つまり、下人は、これからどうしたらよいかと、とりとめもなく考えをめぐらしていたのである。そして、その「考え」の「具体的な内容」が次のようなものであり、それは、「……どうにもならない事を、どうにかするためには、手段を選んでいゝではない」ということである。この文章の「意味合い」は、「……このままでは、飢えて死ぬか、凍えて死ぬしかない。飢えて死なない、凍えて死なないためには、もう手段などを選んでいゝ余裕（時間）などない」のだ。もし、「……（手段などを）選んでいゝれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。そうして、この門の上へ持つて来て、犬のように棄てられてしまふばかり」である。それゆえ、もう一方の「手段を」選ばない」とすれば、「……下人の考えは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した」とある。その「意味合い」は、「……下人の考えは、何度も同じ道（ところ）を低徊した（行ったり来たりと考えをめぐらした）揚句に、やつとこの局所（いわば結論）へ逢着（到着）した」のである。それは、結局、「……盗人になるしかない」という結論である。

しかし、「……この『すれば』は、いつまでたっても、結局『すれば』であった」とある。この文章の「意味合い」は、「……盗みをすれば、餓死せずすむ。それはわかり過ぎるほどわかっているが、しかし、いつまでたっても、結局『すれば』（盗みをすれば、餓死せずすむと考えるばかりであり）、実際にそれが「実行」できずにいたのである。それが、次の「文章」であり、「……下人は、手段を選ばないという事を（頭の中では）肯定しながらも、この『すれば』のかたをつけるために、当然、その後に来る可き「……盗人になるよりほかに仕方がない」と云う事を、彼の何らかの「道徳観や倫理観」などから、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいた（つまり「実行できずにいた」）のである。

下人は、大きな嚏（くしゃみ）をして、それから、大儀そうに立上った。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しいほどの寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。（この雨風では、自然外での野宿はできない）。丹塗の柱にとまっ

ていた蟋蟀も、もうどこかへ行ってしまった。(これは、ふと気がつけば、さっきいた蟋蟀も、夕闇とともに、もうどこかへ行ってしまったという時間の推移である。)

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまわりを見まわした。雨風の患のない、人目にかかる惧れない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思つたからである。——つまり、下人は、(外の野宿はできないので)、門のまわりを見まわした。それは、「……雨風の患のない、人目にかかる惧れない、一晚楽にねられそうな所があれば、そこでもかくも、夜を明かそうと思つたから」である。すると、「……幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄(これは「柄に鮫皮をかけない木地のままのもの」)の太刀が鞘走らない(太刀が自然に鞘から抜け出ない)ように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた」と展開するのである。

三、上の楼の内を覗いて見ると……

それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺っていた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしている。短い鬚の中に、赤く膿を持った面皰のある頬である。下人は、始めから、この上にいる者は、死人ばかりだと高を括っていた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其処此処と動かしているらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をとぼしているからは、どうせただの者ではない。

下人は、守宮のように足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。そうして体を出来るだけ、平にしながら、頸を出来るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範囲が、思つたより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を握ねて造つた人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくるがっていた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に唾の如く黙っていた。(本文)

* *

さて、下人は、守宮のように足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這うようにして上りつめた。(これは、何よりも感づかれないようにと、細心の注意を払つて、一番上の段まで上りつめたのである)。そうして体を出来るだけ、平にしながら、頸を出るだけ、前へ出して、恐る恐る、楼の内を(どうなつてゐるか)覗いて見た。

見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の

光の及ぶ範囲が、思ったより狭いので、数は幾つともわからない。ただ、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるという事である。勿論、中には女も男もまじっているらしい。そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だと云う事実さえ疑われるほど、土を捏ねて造った人形のように、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にくるがっていた、とある。

この部分は、書いてある通りであり、「……楼の内を覗いて見た様子をできるだけ具体的に描写しているところであり」、大事なものは、この次からの「文章」である。

四、下人は、一人の老婆を見つける

下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ。——下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲っている人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であろう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。すると老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行った。そうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た。

——いや、この老婆に対すると云っては、語弊があるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、餓死をするか盗人になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢いよく燃え上り出していたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。勿論、下人は、さつきまで自分が、盗人になる気でいた事などは、とうに忘れていたのである。(本文)

*

*

さて、「……下人は、それらの死骸の腐爛した臭気に思わず、鼻を掩った。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れていた。ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしまったからだ」とある。——まず、「ある強い感情」とは、一体、何かと問えば、それは、「強い恐怖と好奇心」であり、その「強い恐怖と好奇心」が、ほとんどことごとくこの「男の嗅覚」を奪ってしまったのである。それでは、その「強い恐怖と好奇心」の感情は、一体、何から生じて来たのかと問えば、それは、下人の「眼」

が「あるもの」を見たからであり、それは、「……下人の眼は、その時、はじめてその死骸の中に蹲っている（一人の）人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持って、その死骸の一つの顔を覗きこむように眺めていた。髪の毛の長い所を見ると（この長い髪は大事であり）、多分女の死骸であろう」とある。

下人は、「……六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時（しばらく）は呼吸をするのさえ忘れていた」とある。まず、「……六分の恐怖と四分の好奇心」とあるが、例えば、「恐怖心」が「100%」であったならば、それは、もうただただ「恐怖心」で一杯になって、その場にも居られず、怖くて怖くてさっさと逃げ出していたかも知れない、つまり、非常に強い「六分の恐怖（心）」はあったが、それと同時に、「四分の好奇心」も同時にあり、その「四分の好奇心」によって、本来ならば、怖くて怖くて逃げ出していたかも知れない「その場」（その現場）に残って、下人は、「……老婆はここで一体何をしているのだろうか、それが知りたくなった」ということである。これが、やがて、下人の、「……何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」という言葉になり、また、「……己は検非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと言うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさえすればいいのだ」という、下人の「言葉」にもなっていくのである。

*

*

さて、旧記（『今昔物語集』）の記者の語（言葉）を借りれば、「頭身の毛も太る」ように感じたのである。この「頭身の毛も太る」ように感じたとは、「……頭の毛も全身の毛もすべて太った」ように感じたのであり、いわば「……身の毛もよだつ以上の恐怖」を、下人は感じたのである。すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の尻をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜きはじめた。髪は手に従って抜けるらしい。

その髪の毛が、一本ずつ抜けるのに従って、下人の心からは、恐怖が少しずつ消えて行ったとある。——つまり、最初は、老婆は一体何をしているのだろうか、それこそ、ぞつとすると恐ろしかったが、しかし、女の死骸の「髪の毛」を一本ずつ抜いている姿を見て、それほど異常で、「恐怖」なことではないと確認できたのである。だからこそ、下人の心からは、「……恐怖が少しずつ消えて行った」のである。そして、「……下人の心から恐怖が少しずつ消えて行く」につれて、今度は、それと同時に、「……この老婆に対するはげしい憎悪が、少しずつ動いて来た」とある。——それは、下人の「頭の中」（或いは「心の中」）から「……恐怖が少しずつ消えて行く」につれて、本来の「人間らしい心」（それは本来の健全な「知性や理性」の働き）が戻って来て、まさに「……死人の髪の毛を抜くという事が、それだけで既に許すべからざる悪に見えてきた」ということである。

そして、「……いや、この老婆に対すると云っては、語弊があるかも知れない。むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである」とある。——これは、下人の「頭の中」（或いは「心の中」）から「……恐怖が少しずつ消えて行く」につれて、本来の「人間らしい心」（それは本来の健全な「知性や理性」の働き）が戻って来たからであり、それゆえ、「……この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考えていた、

餓死をするか盗人になるかと云う問題を、改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、餓死を選んだ事であろう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のように、勢いよく燃え上り出していたのである」となるのである。

下人には、「……勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった。従って、合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であつた。勿論、下人は、さっきまで自分が、（このままでは、飢えて死ぬか、凍えて死ぬしかない、というような状況にまで追い込まれた時の思考では）、盗人になる気でいた事なぞは、とうに忘れていたのである」と続くのである。

五、下人は、老婆の前に躍り出る

そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云うまでもない。——老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれたように、飛び上った。「……おのれ、どこへ行く」。下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行こうとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭じ倒した。丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。「……何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」と云いながら、

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその目の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出そうになるほど、見開いて、唾のように執拗く黙っている。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残つたのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである。

そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云つた。「……己は檢非違使の序の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしようかと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさえすればいいのだ」と。

すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守つた。眶の赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになつた唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖つた喉仏の動いているのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わつて来た。「……この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしよと思つたのじゃ」。——下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い抜け毛を

持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。(本文)

*

*

さて、そこで、下人は、両足に力を入れて、いきなり梯子から上へ飛び上った。そうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよった。老婆が驚いたのは言うまでもない。(これは、まさかこのような場所に人がやって来るなどは想像も出来なかつたからであり)、——老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも弾かれたように、飛び上った。(それほどびっくりにしたということである)。「……おのれ、どこへ行く」。下人は、老婆が死骸につまずきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、こう罵った。老婆は、それでも下人をつきのけて行くとする。下人はまた、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、しばらく、無言のまま、つかみ合った。(これは、目に見える「二人の活劇」場面であるが)、しかし勝敗は、はじめからわかっている。下人はとうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ扭じ倒した。丁度、鶏の脚のような、骨と皮ばかりの腕である。(それでは、なぜ老婆を無理にそこへ扭じ倒したのか？ それは、一つは、「憎悪の心」からであり、そして、もう一つは、次のことがげせひとも聞きたかつたからである。それは、「……何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」とあるが、——これこそは、下人の「四分の好奇心」のまさに「言語化」であり、それは、「……ここで、一体、何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」と言うのは、まさにその「理由」がげせひとも知りたかつたということである。

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を払って、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は黙っている。両手をわなわなふるわせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が眶の外へ出そうになるほど、見開いて、唾のように執拗く(執拗に)黙っている。(これは、唾の人は、言いたいことがあつても、言葉が思うように出て来ない。それと同じように、老婆も、言いたいことがたとえあつても、(恐怖心その他で)、言葉が思うように出て来ないほどの精神状態であつたのである)。これを見ると、「……下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識しました。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである」とある。

さて、この文章の「意味合い」であるが、それは、次のようなことである。つまり、「……(老婆の)両手をわなわな震わせて、肩で息を切りながら、眼は、眼球が眶の外へ出そうになるほど見開いて、唾のように執拗く(執拗に)黙っている」その姿を見て、「……下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した」とある。——これは、「……老婆を生かすも、殺すも、また、何をしようが、すべては『自分』次第であり」、まさにその「全権を握って、完全なる支配下に置いている」という意識が生じることによって、お互いの「上下関係」は決定的となり、そうなるのと、今度は、相手を見下ろす「心の余裕と優越感」とともに、相手を赦す「心の余裕と優越感」までも生じてきて、その下人の「心の中」にあつた敵対する「憎悪の心」も、何時の間にか冷めてしまったのである。それが、つまり、「……そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった。後に残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである」

となるのである。

そこで、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔らげてこう云った。「……己は檢非違使の庁の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさえすればいいのだ」とある。——これは、まさに下人の「四分の好奇心」を具体的に「言語化」（言葉）にしたものであるが、——すると、老婆は、見開いていた眼を、一層大きくして、じつとその下人の顔を見守った。眶の赤くなつた、肉食鳥のような、鋭い眼で見たのである。（これは「下人の言葉が信頼できるものかどうか確かめたのである）。それから、皺で、ほとんど、鼻と一つになつた唇を、何か物でも噛んでいるように動かした。細い喉で、尖つた喉仏の動いているのが見える。（それほど異常に「痩せ細っている喉元」であり）、その時、その喉から、鴉の啼くような声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝わつて来た。「……この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしようと思うたのじゃ」と云う。

*

*

例えば、平安時代は、特に「女性の長い黒髪」は、まさに「美（美しさ）の象徴」であり、有名な「十二単に長い黒髪」は、本来、自分の「美しい黒髪」であるが、時には、結び目の処からの「つけ毛」の場合もあり、また、当時の様々な「髪型」を結う場合にも、髪を付け足すこともあれば、また、ただ被るだけのすでに出来上がった「髪型」（鬢）の場合も当然あるのである。それは、古今東西を問わず、いつの時代のどこの国でも、人間の「髪の毛」の需要は常にあるのであり、それゆえ、人間の「髪の毛」がいろいろ「売買」されることはいつの時代にもあるのである。

*

*

さて、下人は、「……老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た」とある。——これは、一体、どのような「心理」かと問えば、それは、次のようなことである。つまり、自分の「予想」（或いは「期待」）が外れて、かえって「腹が立つ」という「心理」に近く、例えば、人肉を食べていたということであれば、それは、下人の「予想」を遙かに超えて、かえって「驚愕する」（或いは「恐怖心」）に襲われたかも知れない。つまり、われわれ人間というのは、自分の「予想」以下だと、「なあんだ」と、がっかりする気持ちになりやすく、一方、自分の「予想」以上だと、必ず、「驚く」という心理になるが、自分の「予想」通りや「予想」に近いと、やっばりなという気持ちとともに、何かつまらないような気持ちにも襲われるものである。それが、まさに「……平凡なのに失望し、失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た」となるのである。つまり、下人には「四分の好奇心」（つまり「何らかの期待」）があつたのに、その「……期待が裏切られてしまい、失望すると同時に、また前の憎悪が、冷やかな侮蔑と一緒に、心の中へ入つて来た」という、元の「心の状態」に戻つてしまつたのである。

六、老婆の言葉

すると、その気色が、先方へも通じたのであろう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭か

ら奪った長い抜け毛を持ったなり、墓のつぶやくような声で、口ごもりながら、こんな事を云った。「……成程な、死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じやが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかつて死なんんだら、今でも売りに往つていた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず菜料に買つていたそう。わしは、この女のした事が悪いとは思つていぬ。せねば、餓死をするのじやて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじやて、仕方がなくする事じやわいの。じやて、その仕方がない事を、よく知つていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるのである」。老婆は、大体こんな意味の事を云つたとある。(本文)

七、下人の反応

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面砲を気にしながら、聞いていたのである。しかし、これを聞いてる中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと云う事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。

「きつと、そうか」。老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面砲から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくようにこう云つた。「……では、己が引剥をしようと思ひまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ」。——下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。そうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。……下人の行方は、誰も知らない。(本文・完)

さて、下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさえながら、冷然として、この話を聞いていた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面砲を気にしながら、聞いてるのである。——まず、ここまでの内容で気になるのは、「……右の手では、赤く頬に膿を持った大きな面砲を気にしながら、聞いてるのである」とあり、この下人

は、この「赤く頬に膿を持った大きな面炮」をよほど気にしていて、この年若い老婆にさえ見られることを恐れている。だとすれば、この「大きな面炮」がこの下人の一つの「コンプレックス」（劣等感）になっているのだろうか？ また、なぜ、「作者」（それは「芥川龍之介」という人は、このような描写をつけ加えたのだろうか？ 例えば、この下人は、まだ年も若く、それゆえ、顔に「大きな面炮」一つでも、それが気になって気になつてしようがないという、そういういわば人間としてはまだ「未熟な精神状態」の人間であるという「性格付け」になっているのか？ この辺はよく分からないが、下人は、老婆の話を「……聞いている中に、下人の心には、ある勇気が生まれて来た」とある。それは、さつき門の下で、この男には欠けていた勇気である。そうして、またさつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕えた時の勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気である。（もちろん、この勇気は、「悪を憎む心」≪勇気≫ではなく、むしろ「盗み」≪悪を実行する≫勇気である）。下人は、餓死をするか盗人になるかに、迷わなかったばかりではない。その時のこの男の心もちから云えば、餓死などと言ふ事は、ほとんど、考える事さえ出来ないほど、意識の外に追い出されていた。（これは、老婆の「論理」がよほど下人の心に納得が入ったということである。）

「きつと、そうか」。老婆の話が完ると、下人は嘲るような声で念を押した。そうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面炮から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくようにこう云つた。「……では、己が引剥をしようと思ひまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ」。——下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとつた。それから、足にしがみつきこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎとつた檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。（これは「老婆の論理」を下人もそのまま実践したのである。）しばらく、死んだように倒れていた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくような、うめくような声を立てながら、まだ燃えている火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。そうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜（これは「世の中」の暗さでもある）があるばかりである。……下人の行方は、誰も知らない。

八、老婆と下人

さて、雨風を凌いで、一晩寝られるところはと思つていたところ、「……幸い門の上の楼へ上る、幅の広い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がいたにしても、どうせ死人ばかりである」と思つて、階段を二三段上つて見ると、上では誰かが火をとぼして、しかもその火を其処此処と動かしているらしい。見ると、楼の内には、幾つかの死骸があり、それは、裸の死骸や着物を着た死骸、男も女も混じつていて、死骸の腐乱した臭気も漂つていたが、その死骸の中に、蹲つている一人の人間を見つかる。それは、「……檜皮色の着物を着た、背の低い、瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆であり、右の手に火をとぼした松の木片を持つて、人の顔を覗きこむように眺めていた。……」とある。この老婆は、一体、何をしているのかと問えば、それは、女性の死骸の「髪の毛」を一本ずつ抜いていたのである。それを見た下人は、その「行為」に激しい「憎悪」（つまり「悪を憎む

心」に襲われて、太刀に手をかけ、いきなり老婆の前へと躍り出た。老婆は、驚いて逃げ惑うが、やがて老婆の腕をつかんで、そこにねじ倒した。そして、「……何をしていた。云え。云わぬと、これだぞよ」と、老婆をつき離し、鞘から太刀を抜いて、老婆の目の前につきつける。しかし、老婆は、わなわたと震えるばかりで答えようとはしない。

それを見ていた下人は、今までの「憎悪の心」は、次第に冷めて、「……残ったのは、ただ、ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかりである」とある。これは、一体、どのような「心理」と問えば、それは、次のようなことである。つまり、「……下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されていると云う事を意識した。そうしてこの意識は、今までけわしく燃えていた憎悪の心を、いつの間にか冷ましてしまった」とある。——つまり、これは、老婆を生かすも、殺すも、また、何をしようが、すべては「自分」次第であり、まさにその「全権」握って、完全なる支配下に置いている」という意識が生じることによって、お互いの「上下関係」は決定的となり、そうなると、今度は、相手を見下ろす「心の余裕と優越感」とともに、相手を赦す「心の余裕と優越感」までも生じてきて、その下人の「心の中」にあつた敵対する「憎悪の心」も、何時の間にか冷めてしまったということである。——つまり、われわれ人間の、いわゆる敵対する「憎悪の心」というのは、まだお互いの「雌雄が決していないからこそ生じる心理」であり、それゆえ、まさにお互いの「雌雄が決してしまえば、やがてはうすれていく心理」でもあるのである。

例えば、柔道でも、空手でも、或いは、レスリングでも、ボクシングでも、その他、どのような競技であれ、相手と戦っている時には、まだ、「雌雄は決していない状態」であり、それゆえ、この時には、相手への「敵対の気持ち」は、極めて強いものがあるが、しかし、一たび、「……雌雄が決してしまえば、相手への「敵対の気持ち」は、うすれ、お互い「握手」をして、別れること」にもなるのである。

その場合、勝った方は、まさに「……ある仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足とがあるばかり」という気持ちになる一方、負けた方は、もちろん、「……くやしい気持ちとともに、しかし、まあ、仕方がないかという気持ち」に少なくともその瞬間はそう思うしかないのである。つまり、お互いの「敵対の気持ち」というのは、まさに「……雌雄が決してしまえば、やがてはうすれていくもの」であり、特に勝った方は、そういう傾向がより強く、一方、負けた方は、やがて「リベンジ」という意識が生じて来るかも知れないが、しかし、負けた瞬間は、もうどうにでもしろ、という気持ちになるしかない。つまり、勝った方は、まさに「全権」（つまり「全支配権」）を握ることになる一方、負けた方は、いやでも、それに従うしかない。——例えば、戦争などで「捕虜」になった時に、その場で殺されるのか、ひどい目に遇うのか、それとも、助かるのかは、すべて「相手」次第ということになるのである。

やがて、下人は、老婆を見下しながら、少し声を柔げてこう云った。「……己は検非違使の序の役人などではない。今し方この門の下を通りかかった旅の者だ。だからお前に縄をかけて、どうしようと云うような事はない。ただ、今時分この門の上で、何をして居ただか、それを己に話しさえすればいいのだ」と云う。すると、老婆は、「……この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にしようと思うたのじゃ」と答える。「……下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。そして、また、前の憎悪が生じてきた」とある。

これは、自分の「予想」(或いは「期待」)が外れて、かえって「腹が立つ」という「心理」に近く、例えば、人肉を食べていたということであれば、それは、下人の「予想」を遙かに超えて、かえって「驚愕する」(或いは「恐怖心」)に襲われたかも知れない。つまり、われわれ人間というのは、自分の「予想」以下だと、「なあんだ」と、がっかりする気持ちになりやすく、一方、自分の「予想」以上だと、必ず、「驚く」という心理になるが、自分の「予想」通りや「予想」に近いと、やっぱりなという気持ちとともに、何かつまらないような気持ちにも襲われるものである。むろん、これらは、すべて「自分」(主観)が基準であり、それゆえ、厳密な「客観的な評価」とは、全く違うものである。

九、老婆の論理

さて、老婆は、次のようなことも云う。「……成程な。死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したものを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往っていた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず材料に買っていたそう。わしは、この女のした事が悪いとは思うていぬ。せねば、餓死するのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのでいた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるである」とある。

これは、非常に「面白い内容」であるので、その一つ一つを順に見てみたいと思う。まず、「……成程な。死人の髪の毛を抜くと云う事は、何ぼう悪い事かも知れぬ」とある。つまり、老婆は、人間として「悪い事」をしているという「自覚」(倫理観)は、はっきりと持ち合わせているのである。次に、「……じゃが、ここにいる死人どもは、皆、そのくらいな事を、されてもいい人間ばかりだぞよ」とある。これは、善い人間に「悪いこと」をするよりも、悪い人間に「悪いこと」をする方が、遙かに「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)などをそれほど受けずに済むということである。それに加えて、われわれ人間にとって、この世(俗世)で生き抜くということは、あるいは、現に生きているということは、何もかも「きれいな事」だけで済むはずがなく、多かれ少なかれ、誰でも「いいことも悪いこと」もしているということである。ましてや「社会環境」が「悪化」すれば、なおさらのことである。そして、その実例として、「……わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりずつに切って干したものを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。疫病にかかって死ななんだら、今でも売りに往っていた事である。それもよ、この女の売る干魚は、味がよいと云うて、太刀帯どもが、欠かさず材料に買っていたそう」とある。

これは、まさに「詐欺」行為であるが、しかし、例えば、どのような商売であれ、多かれ少なかれ、消費者をうまくだまして、利益を少しでも上げようという傾向はあるのである。あとは、その「程度」問題であり、明らかに「犯罪行為」(つまり「刑法」)などに触れて、訴えられた者だけが、現実には罰せられているだけであり、あとの人たちは、うやむやになっているだけである。つまり、表面化しない「犯罪行為」などは、山ほどあると

いうことである。

それはともかく、老婆は、次のような結論を出すのである。「……わしは、この女のした事が悪いとは思っていない。せねば、餓死するのじゃて、仕方がなくした事である。されば、今また、わしのしていた事も悪い事とは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死をするのじゃて、仕方がなくする事じゃわいの。じゃて、その仕方がない事を、よく知っていたこの女は、大方わしにする事も大目に見てくれるであろ」とある。——つまり、「生きる」ためには、「餓死しない」ためには、そうせざるを得ない。つまり、仕方がないことである、という結論である。この「結論」は、生きるための最低限の「衣食住」が保証されて、初めて、人間らしい「道徳観や倫理観」なども健全に機能するのであり、一方、生きるための最低限の「衣食住」さへも欠落してしまえば、つまり、このままでは、飢えて死ぬか、凍えて死ぬしかない、というような状況にまで追い込まれた時には、人間らしい「道徳観や倫理観」などは、健全に機能し難いということである。だからと言って、「盗みや人殺し」などをそのまま「黙認する」わけにもいかない。それゆえ、「国や社会」（或いは「地方自治体」）などでは、生きるための最低限の「衣食住」などを保証する、まさに「社会保障」というものがあり、その一つに、例えば、「生活保護」、その他というようなものもあるのである。それゆえ、この老婆にも、生きるための最低限の「衣食住」などを保証してやれば、わざわざ女性の死骸の「髪の毛」を一本ずつ抜くというような、そのようなことをする必要もなくなるということである。

十、諸刃の剣

一方、下人は、「……せねば、餓死するのじゃて、仕方がなくしたことである」という、この老婆の話聞き、逆に、或る「勇氣」（それは「盗みをする勇氣」が生じて来て、「きつと、そうか」と、下人は嘲るような声で念を押し、そして、「……では、己が引剝をしよう」と恨むまいな。己もそうしなければ、餓死する体なのだ」と云って、「……すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。それから、足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。下人は、剥ぎとった檜皮色の着物をわきにかかえて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。しばらく、死んだように倒れていた老婆は、やがて梯子の口まで、這って行った。そして、門の下を覗きこんだ。外には、ただ、黒洞々たる夜があるばかりである。下人の行方は、誰も知らない」というところで終わっている。

*

*

この「部分」は、老婆の「論理」に基づいて、下人も、全く「同じこと」（つまり「盗み」を行なったということである。それでは、なぜ、下人は、老婆の着ていた「檜皮色の着物」を剥ぎとったのだろうか？ というのも、どこかで売れるほどの「品物」であったのか？ それとも、自分が着るためのものであったのか？ たとえどちらの「理由」であっても、なぜ、残酷にも「剥ぎとった」のだろうか？ ここにこそ、「作者」（つまり「芥川龍之介」）の言わんとする「思いや考え」などがはつきりとあるのであり、それは、次のようなことである。

つまり、老婆の考える「論理」には、確かに「一理」（つまり「成る程」という論理）はある。しかし、老婆の「論理」というのは、まさに「諸刃の剣」なのである。その「証

「抛」に、実際、老婆も下人に着物を剥ぎとられ、丸裸になっているのである。——つまり、仕方なく、人を殺す、仕方なく、ものを盗む。それは、「する側」の論理に過ぎない。「される側」は、それではたまったものではない。——つまり、「作者」(それは「芥川龍之介」)であるが、彼は、この老婆の「論理」は、間違っていると言いたいのである。

*

*

例えば、人間社会が若しも「無法状態」になれば、それは、まさに「万人の万人による戦い」になってしまいうだろう。それは、自分が他人に対して何をしようと全くの自由であるが、同時に、他人も自分に対して何をしようと全くの自由であり、それゆえ、自分が他人を殺したり、他人の物を盗むことはすべて自由であるとともに、一方、他人も自分を殺したり、自分の物を盗むこともすべて自由になってしまいうのである。それでは、一時たりとも安心して生活できないだろう。そこで、お互いよく「話し合っ」て、何らかの「約束」(つまり「契約を結ぶ」)ことによつて、お互いの「財産や身の安全」などを図ろうとすることになるが、それが、すなわち、「社会契約説」であり、それを巨大な「国家」の手にゆだねるということである。そして、若しも誰かがその「約束」(つまり「契約」)を破った時には、その「被害」を受けた人たちに代わつて、巨大な「国家」が、その「犯罪者」たちを罰することになるのが、まさに「裁判制度」というものになるのである。

もちろん、「裁判制度」によつて、この世の実に様々な人間の「罪や犯罪」などがすべて裁かれるわけではない。むしろ「何一つ根本的な解決にはならない」のである。なぜなら、例えば、「刑事裁判」というのは、結局は、いわば「外的制裁」に過ぎないからである。それでは、誰がわれわれ人間の「罪や犯罪」などを裁くのだろうか？ それは、例えば、「神」や「仏」なのだろうか？ もちろん、それは、誰でもない、最終的には、まさに「自分自身」なのである。——つまり、「裁判」による「刑罰」というのは、まさに「外的制裁」に過ぎないのに対して、一方、「内なる神」(それは、われわれ人間の「理知的部分」の最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろうもの)による「制裁」(いわば「良心の呵責」)こそは、まさに「内的制裁」であり、その「内的制裁」によつてこそ、われわれ人間の、自分が犯した「罪や犯罪」などは、最終的に裁かれているということである。それゆえ、老婆も下人も、たとえ「そうせざるを得ない状況」であつたとしても、最終的には「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)などによつて、まさに「内なる神」(それは、われわれ人間の「理知的部分」の最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろうもの)による「内的制裁」を受けざるを得ないということである。

むしろ、一方では、「国や社会」(或いは「地方自治体」)などによつて、生きるための最低限の「衣食住」などを保証する、まさに「社会保障」というものが必要不可欠になつて来るということであり、先の「老婆」にも、生きるための最低限の「衣食住」などを保証してやれば、わざわざ女性の死骸の「髪の毛」を一本ずつ抜くというような、そういうことをする必要もなくなるのである。しかし、若しもそれができないという「社会状況」であれば、「老婆」は、まさに強い者が弱い者を「支配(搾取)」して、容赦なく踏みつけるという「弱肉強食」の世界を生き続けるしかないのである。

*

*

杜^と
子^し
春^{ゆん}

杜子春

例えば、芥川龍之介の『杜子春』という作品も、非常によく知られている作品かと思うが、その「本文」は、次のようなものである。それは、「……或春の日暮です。唐の都の洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。若者は名は杜子春といって、元は金持の息子でしたが、今は財産を費い尽して、その日の暮しにも困る位、儚な身分になっているのです。その杜子春は相変らず、門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めていました」。するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇の老人がありました。その老人は、「……お前は何を考えているのだ」と聞くと、杜子春は、「……私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と答える。すると、「……では、おれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」と。そこで、杜子春は、云われた通りにすると、一日の内に、洛陽の都でも唯一人という大金持になったのです。……

さて、大金持になった杜子春は、すぐに立派な家を買って、玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な暮らしを始めました。しかし、そのような贅沢な日々は、三年で、再び、一文無しになつてしまいました。そこで、再び、洛陽の西の門の壁に身を凭せて、ぼんやり空を眺めていると、また、どこからやって来たか、片目眇の老人が、「……お前は何を考えているのだ」と聞くので、「……私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と。すると、「……では、おれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立って、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」と。——しかし、それも、三年で費い尽してしまう。また、杜子春は、同じ門の壁に身を凭せて、ぼんやり空を眺めていると、例の老人がやって来て、同じように、「……今度は、その腹に当る所を……」と云うが、杜子春は、「……いや、お金はもう入らないのです」。「……何、贅沢に飽きたのじゃありません。人間というものに愛想がつかたのです」と。「……人間は皆薄情です。私が大金持になった時には、世辞も追従もしますけれど、一旦貧乏になつて御覧なさい。柔しい顔さえもして見せはしません」と言う。そこで、杜子春は、「……私はあなたの弟子になつて、仙術の修行をしたいと思うのです。あなたは道德の高い仙人でしょう。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を教えてください」と。それに対して、老人は、「……いかにもおれは峨眉山に棲んでいる、鉄冠子という仙人だ。始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好きそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやろう」と。ここまでは、いわば「前半部分」になるかと思う。

一、若者と仙人

さて、この「作品」は、一体、どのような「作品」と問えば、それは、次のようなものである。まず、登場人物は、若い「杜子春」と老人の「仙人」との二人だけである。そして、若い「杜子春」というのは、一体、どのような存在かと言えば、それは、まさに「俗世間」にまみれている人間の「代表」のような存在である。つまり、われわれ人間という

のは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされている存在であり、それは、例えば、「……食欲、性欲、物欲、金銭欲、出世（社会的地位）欲、支配欲、独占欲、名誉欲、名声欲、その他」、実に様々な「欲望（欲求）」があり、そして、それらの「欲望（欲求）」が思うように満たされれば、それなりの満足感を得、一方、思うように満たされなければ、逆に、「……不平、不満、嫌悪、怒り、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」などの感情に振りまわされてしまうものである。しかも、われわれ人間の実に様々な「欲望や感情」などがすべて満たされるはずもないので、それは、われわれ人間というのは、一方を得れば、また、一方を失うようにできているからである。例えば、杜子春のように、たとえ「巨万の富」を得たとしても、それによって得られるものと、もう一方では、それによっても得られないものがあり、それは、一般的には、いわゆる「四苦」（つまり「生・病・老・死」）などは、どうにもならないものであるとともに、また、いわゆる「人の心」というものも、少しも自分の「思い通り」にはならないものである。——例えば、その人がたとえ「従順に従っている」としても、その人の「心の中」ではない。つまり「何を思い、何を考えているか」などは、全く分からないものである。そして、杜子春は、それを人間の「薄情さ」と呼んでいるが、われわれ人間は、絶えずそういうものに振りまわされて生きていくということである。

一方、年老いた「仙人」というのは、一体、どのような存在かと問えば、それは、まさに「俗世」から解脱している人間の「代表」のような存在である。そして、この「仙人」は、本来であれば、「どうしたのだ？」と聞くところを、最初から、「……お前は何を考えているのだ」と質問をしている。それは、この「仙人」の最大の関心事は、「……杜子春が、今、何を考えているのか？」ということであったということである。それは、つまり、「……始めお前の顔を見た時、どこか物わかりが好きそうだったから、二度まで大金持にしてやったのだ」と言っている。つまり、杜子春を見た時に、「……この若者は、どこか見どころがある。この若者なら、自分の弟子にしてもよいかも知れない」と思ったということである。つまり、「……この若者は、やがて人間に愛想をつかして、必ず、私に弟子入りしてくるだろうと、そう見越していた」ということである。

二、蛾眉山の魔性たち

さて、後半部分は、「……鉄冠子は、そこにあった青竹を一本拾い上げると、口の中に呪文を唱えながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乗るように跨りました。すると、竹杖は忽ち竜のように、勢いよく大空へ舞い上って、晴れ渡った春の夕空を蛾眉山の方向へ飛んで行きました」。そして、その蛾眉山の断崖の大きな一枚岩の上に座ることになるが、仙人は、「……お前は、ここに座って、おれの帰るのを待っているが好い。多分おれがいなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たといどんなことが起ろうと、決して声を出すのではないぞ。天地が裂けても、黙っているのだぞ」と云いつけて、飛んで行きました。——そして、最初に現れるのが、いわゆる「猛虎と大きな白蛇」であり、杜子春は、「……そこにいるのは何者だ。黙っていると、命はないぞ」と云われても、ただ黙っていると、猛虎と白蛇は、杜子春めがけて同時に襲いかかって来るが、消えてしまう。次は、空一面が黒雲に覆われ、大きな雷鳴などが轟き渡

るが、じっと我慢していると、やがて消えてしまう。そして、今度は、武装した神将が現われ、「……返事をしないか。返事をしないと、約束通り命はとってやるぞ」と喚き、杜子春は、三又の戟で突き殺されてしまい、ついに息が絶えてしまうのである。

さて、ここまでの「内容」は、次のようなことになるかと思う。——つまり、われわれ人間にとつて、なぜ、「虎や蛇或いは雷鳴や神将」などが怖いと思うのかと問えば、それは、まさに自分の「生命」が危険にさらされる可能性が高いからである。それゆえ、「怖い」という思いに襲われるわけだが、その「怖い」という感情というのは、本来、すべて「自己防衛的な反応」であり、それは、まさに「自己愛」から生じるものであり、それは、それでよいのである。しかし、一方、その「自己愛」こそは、まさに「利己的自我」(つまり「エゴ」)の「源泉」そのものでもあり、そして、その「利己的自我」(つまり「エゴ」)こそは、この世(俗世)の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲にむさぼろうとしている「張本人」(本体)でもあるということである。それゆえ、その「利己的自我」(つまり「エゴ」)が思うようにコントロールできずに、それに際限なく振りまわされてしまうと、実に様々な「揉め事や犯罪」などを起こすことにもなるということである。つまり、「利己的自我」(つまり「エゴ」というのは、一方では、自分の「身」を守っているものではあるが、一方では、自分を苦しめている「張本人」(本体)でもあるということである。だからこそ、宗教においては、その「利己的自我」(つまり「エゴ」)をできるだけ弱めるような「考え方」になっているということである。

さて、死んでしまった杜子春の「肉体」からは、まさに「魂」が抜け出し、その「魂」は、いわゆる「地獄」へと墮ちてしまう。そして、そこには名高い「閻魔王」がいるが、その閻魔王は、「……何のために、蛾眉山の上へ座っていた。速に返答しなければ、地獄の呵責に遇わてくれるぞ」と居丈高に罵る。もちろん、杜子春は、それにもじつと黙っていたために、あらゆる「地獄の責苦」に遇うことになる。ここまでは、自分さえ我慢していれば、それで済む問題である。しかし、最後は、とうとう「姿は馬」ではあるが、その顔は「父母」という「瘦せた馬」が二頭連れて来られ、徹底的に「地獄の責苦」を与えられることになるのである。それを見ていた杜子春は、ついに耐えきれずに、「お母さん」と一言叫んでしまうのである。——そうすると、杜子春は、再び、夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり(一人)佇んでいるのでした。

三、新たな生活

さて、仙人は、「……とても仙人にはなれはすまい」と聞くと、「……いくら仙人になれた所が、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」と返答する。それに対して、仙人は、次のようなことを言う。

つまり、「……もしお前が黙っていたら、お前は即座にお前の命を絶ってしまおうと思っていたのだ」とある。これは、一体、どういうことなのか? それは、次のようなことである。つまり、「仙人」というのは、いわゆる「人でなし」(つまり「人間でなくなる」ということではない。それゆえ、両親が実に様々な「地獄の責苦」などを受けているのを見ていながら、その人の「心」が少しを動かないとすれば、それは、まさに「人でなし」(つまり「人間ではない」ということになってしまいうだろう。それでは、「仙人」とは、

一体、どのような存在になるのかと問えば、それは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に追い求めることから離れて、山深く、実に様々な「修行」などを何年も何十年も積み重ねることによって、何か特殊な「能力」などを身につけることになるとともに、いわゆるこの世や人間の本質などを鋭く見抜く「慧眼」などを兼ね備えた存在になるということである。そして、仙人は、「……お前はもう仙人になりたいという望も持っていないまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」と質問をする。それに対して、杜子春は、「……何になっても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と答えるのである。これは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。

つまり、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に追い求めながら、まさに「満足感や幸せ感」などを得ようとするのが、まさに「俗世の人たち」であるとすれば、もう一方の、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などへの執着を捨てて、むしろ「欲」から開放されることによって、逆に、心の「平穏や充実感」（つまり「内的充実感」）などを得ようとするのが、まさに「修行僧や仙人或いは仏陀（如来）」ということになるのだろう。そして、主人公の杜子春は、結果として、仙人にはなれなかったが、しかし、これからは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲に追い求めるのではなく、むしろ、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などへの執着から離れて、いわば心の「平穏や充実感」などが得られるような「生き方」がしたいということである。そこで、いわば「ホームレスの杜子春」に対しては、仙人は、次のようなことを言うのである。——それは、「……おお、幸、今思い出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行って住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と。

*

*

さて、これらは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。つまり、作者（芥川龍之介）の「考え方」というのは、一方の極の「大金持ち」、それは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などをどこまでも貪欲に追い求めてやまないような人たちと、もう一方の極の「仙人」、それは、この世（俗世）の実に様々な「欲望や感情」などへの執着をすべて捨てて、ただひたすら心の「平穏や充実感」などを得ようとしているような人たち、つまり、一方の極の「大金持ち」と、もう一方の極の「仙人」という、この「両極端」を避けた、いわば「中庸」、こそは、まさに「われわれ人間にとつて、最も幸せなことである」という「考え方」に立っているのである。

*

*

杜子春（参考文献）

一、若者と老人との出会い

或春の日暮です。唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者が
ありました。若者は名を杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費い尽し
て、その日の暮しにも困る位、憐な身分になっています。

何しろその頃洛陽といえ、天下に並ぶものがない、繁昌を極めた都ですから、往来
にはまだしつきりなく、人や車が通っていました。門一ぱいに当っている、油のような夕
日の光の中に、老人のかぶった紗の帽子や、土耳其の女の金の耳環や、白馬に飾った色糸
の手綱が、絶えず流れて行く容子は、まるで画のような美しさです。

しかし杜子春は相変らず、門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めていました。空
には、もう細い月が、うらうらと靡いた霞の中に、まるで爪の痕かと思う程、かすかに
白く浮んでいるのです。「……日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行っても、
泊めてくれる所はなさそうだし——こんな思いをして生きている位なら、一そ川へでも身
を投げて、死んでしまった方がましかも知れない」。

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思いめぐらしていたのです。
するとどこからやって来たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇の老人があります。そ
れが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、じつと杜子春の顔を見ながら、「……お
前は何を考えているのだ」と、横柄に声をかけました。「……私ですか。私は今夜寝る所
もないので、どうしたものかと考えているのです」。

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思わず正直な答をしまし
た。「……そうか。それは可哀そうだな」、老人は暫く何事か考えているようでしたが、
やがて、往来にさしている夕日の光を指さしながら、「……ではおれがよいことを一つ教
えてやろう。今この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中
に掘って見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」、「……ほんと
うですか」と、杜子春は驚いて、伏せていた眼を挙げました。ところが更に不思議なこと
には、あの老人はどこへ行ったか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見当りません。
その代り空の月の色は前よりも猶白くなって、休まない往来の人通りの上には、もう気の
早い蝙蝠が二三匹ひらひら舞っていました。（本文）

二、大金持ちになった杜子春は……

杜子春は一日の内に、洛陽の都でも唯一人という大金持になりました。あの老人の言葉
通り、夕日に影を映して見て、その頭に当る所を、夜中にそつと掘って見たら、大きな車
にも余る位、黄金が一山出て来たのです。

大金持になった杜子春は、すぐに立派な家を買って、玄宗皇帝にも負けない位、贅沢な
暮しを始めました。蘭陵の酒を買わせるやら、桂州の竜眼肉をとりよせるやら、日
に四度色の変る牡丹を庭に植えさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼いにするやら、玉を
集めるやら、錦を縫わせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子を誂えるやら、

その贅沢を一々書いていては、いつになってもこの話がおしまいにならない位です。

するとこういう噂を聞いて、今までは路で行き合っても、挨拶さえしなかった友だちなどが、朝夕遊びにやつて来ました。それも一日毎に数が増して、半年ばかり経つ内には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ来ないものは、一人もない位になってしまったのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛なことは、中々口には尽されません。極かいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から来た葡萄酒を汲んで、天竺生れの魔法使が刀を呑んで見せる芸に見とれていると、そのまわりには二十人の女たちが、十人は翡翠の蓮の花を、十人は瑪瑙の牡丹の花を、いずれも髪に飾りながら、笛や琴を節面白く奏しているという景色なのです。(これは、山ほどあるお金の具体的な使い道の実例であるとともに、その大金持ちのところへと実に数多くの人たちが集まって来たということである。)

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅沢家の杜子春も、一年二年と経つ内には、だんだん貧乏になりました。そうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通ってさえ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになって見ると、広い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸そうという家は、一軒もなくなっていました。いや、宿を貸すどころか、今では腕に一杯の水も、恵んでくれるものはないのです。(例えば、杜子春という人間に心惹かれて集まったのであれば別であるが、いわば金に心惹かれて集まってきた人たちであれば、その金がなくなれば、自然と離れていくのは当然のことである。)

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立っていました。するとやはり昔のように、片目眇の老人が、どこからか姿を現して、「……お前は何を考えているのだ」と、声をかけるではありませんか。杜子春は老人の顔を見ると、恥しそうに下を向いたまま、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切そうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じように、「……私は今夜寝る所もないので、どうしたものかと考えているのです」と、恐る恐る返事をしました。「……そうか。それは可哀そうだな。ではおれが好きなことを一つ教えてやろう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映ったら、その胸に当る所を、夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だから」。老人はこう言つたと思うと、今度もまた人ごみの中へ、掻き消すように隠れてしまいました。(もちろん、このようなことを繰り返すのには、老人にははつきりとした思惑があるからである。)

杜子春はその翌日から、忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相変らず、仕放題な贅沢をし始めました。庭に咲いている牡丹の花、その中に眠っている白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から来た魔法使——すべてが昔の通りなのです。(相変わらず、杜子春という人は、この俗世の実に様々な「欲望や感情」などを貪欲にむさぼることに取り憑かれていて、自分の人生を顧みるということが全くない状態にあるのです。)ですから車に一ぱいにあつた、あの夥しい黄金も、又三年ばかり経つ内には、すっかりなくなつてしまいました。(本文)

三、仙人になりたいと……

さて、「……お前は何を考えているのだ」と、片目眇すがめの老人は、三度杜子春の前へ来て、同じことを問いかけました。勿論もちろん彼はその時も、洛陽らくやうの西の門の下に、ほそぼそと霞かすみを破やぶっている三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇たまたんでいたのです。「……私ですか。私は今夜寝る所もないので、どうしようかと思つて居るのです」「……そうか。それは可哀あはれそうだな。ではおれが好いことを教えてやろう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映うつつたら、その腹に当る所を、夜中に掘ほつて見るが好い。きつと車に一ぱいの——」と、老人がここまで言いかけると、杜子春は急に手を挙げて、その言葉を遮さへりました。

「……いや、お金はもういらぬのです」「……金はもういらぬか？ ははあ、では贅ぜい沢たくをするにはとうとう飽あきてしまったと見えるな」と、老人は審いしそうな眼まなこつきをしながら、じつと杜子春の顔を見つめました。「……何、贅ぜい沢たくに飽あきたのじゃありません。人間にんげんというものに愛あい想そうがつきたのです」、杜子春は不平ふへいそうな顔をしながら、突慳つげん貪どんにこう言いいました。「……それは面白いな。どうして又人間に愛あい想そうが尽つきたのだ？」と聞くと、「……人間は皆薄情はくじやうです。私が大金持たいきんぢになった時には、世辞せじも追従ついでもしますけれど、一旦貧乏ひんぱふになつて御覽ごらんなさい。柔やさしい顔かほさえもして見せはしません。そんなことを考えると、たといもう一度大金持たいきんぢになったところが、何にもならないような気がするのです」。

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑い出でしました。（これは、自分の思し惑わく通つうりになつて来たからである）。「……そうか。いや、お前は若い者に似合にわず、感心かんしんに物のわかる男だ。ではこれからは貧乏ひんぱふをしても、安らかに暮くして行くつもりか」と聞くと、杜子春はちよいとためらいました。が、すぐに思い切きつた眼まなこを挙げると、訴うえるように老人の顔を見ながら、「……それも今の私には出来ません。ですから私はあなたの弟子でしになつて、仙術せんじゆつの修業しゆぎやうをしたいと思しうのです。いいえ、隠ひしてはいけません。あなたは道徳だうとくの高い仙人せんじんでしょう。仙人せんじんでなければ、一夜ひとよの内に私わたしを天下第一てん地下の大金持たいきんぢにすることは出来ない筈はずです。どうか私の先生せんせいになつて、不思議ふしぎな仙術せんじゆつを教おえて下さい」と云うのであつた。（つまり、老人の思し惑わくとは、「……この若者わかしよは、どこか見みどころがある。この若者わかしよなら、自分の弟子でしにしてもよいかも知れない」と思しつたということである。）

老人は眉まゆをひそめたまま、暫しばらくは黙もくつて、何事なにことか考かん考かんしているようでしたが、やがて又につこり笑わらいながら、「……いかにもおれは峨眉山がひざんに棲すんでいる、鉄冠子てつかんしという仙人だ。始めお前の顔かほを見た時とき、どこか物ものわかりが好すきさうだつたから、二度にどまで大金持たいきんぢにしてやつたのだが、それ程ほど仙人せんじんになりたければ、おれの弟子でしにとり立ててやろう」と、快ねがく願がを容ゆるれてくれました。杜子春は喜よろこんだの、喜よろこばないのではありません。老人の言葉ことばがまだ終はらない内に、彼は大地ちがひに額ぬかをつけて、何なに度も鉄冠子てつかんしに御時宜おじぎをしました。「……いや、そう御礼ごれいなどは言いつて貰もらうまい。いくらおれの弟子でしにしたところが、立派りつぱな仙人せんじんになれるかなれないかは、お前次第おまへしだいで決きまることだからな。——が、ともかくもまずおれと一ひとしよに、峨眉山がひざんの奥おくへ来て見るが好すい。おお、幸さいわい、ここに竹杖たけづえが一本落おちている。では早速さつそくこれへ乗のつて、一ひと飛びに空そらを渡わたるとしよう」と云うのであつた。

鉄冠子てつかんしはそこにあつた青竹あおたけを一本拾ひろい上げると、口くちの中に咒文じゆもんを唱となえながら、杜子春と一ひとしよにその竹たけへ、馬うまにでも乗のるようように跨またりました。すると不思議ふしぎではありませんか。竹杖たけづえは忽たちち童どうのように、勢いきおい大空おほそらへ舞まい上あつて、晴はれ渡わたつた春はるの夕空ゆふぞらを峨眉山がひざんの方角かたがしへ飛とんで行いきました。——杜子春は胆きもをつぶしながら、恐おそる恐おそる下したを見下みしました。が、下したには唯青ただあおい山々やまが夕明ゆふあかりの底そこに見みえるばかりで、あの洛陽らくやうの都みやこの西にしの門かどは、（とうに霞かすみに紛まれ

れたのでしよう)どこを探しても見当りません。その内に鉄冠子は、白い鬢の毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱い出しました。(これは、大空を自由に飛びまわる、その「心の高揚《喜び》」から、自然と自分の「好きな歌」を高らかに唱い出したということになるのだろう。)

朝に北海に遊び、暮には蒼梧。

袖裏の青蛇、胆気粗なり。

三たび岳陽に入れども、人識らず。

朗吟して、飛過す洞庭湖。(本文)

四、蛾眉山の魔性たち

さて、二人を乗せた青竹は、間もなく蛾眉山へ舞い下りました。そこは深い谷に臨んだ、幅の広い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光っていました。元より人跡の絶えた山ですから、あたりはしんと静まり返って、やつと耳にはいるものは、後の絶壁に生えている、曲りくねった一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に来ると、鉄冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、「……おれはこれから天上へ行って、西王母に御眼にかかって来るから、お前はその間に坐って、おれの帰るのを待っているが好い。多分おれがいなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかそうとするだろうが、たとえどんなことが起ろうとも、決して声を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだど覚悟をしる。好いか。天地が裂けても、黙っているのだぞ」と云いました。「……大丈夫です。決して声なぞは出しません。命がなくなっても、黙っています」と答えると、「……そうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行って来るから」と云い、老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨って、夜目(夜間にも物を見る目)にも削ったような山々の空へ、一文字に消えてしまいました。

*

*

これはもちろん、杜子春一人だけを残し、蛾眉山の様々な魔性たちの「試練」を受けさせて、それに耐えられるかどうか(つまり「仙人になれるかどうか」)を見ようとしているのである。

猛虎と白蛇の出現

杜子春はたった一人、岩の上に坐ったまま、静に星を眺めていました。するとかれこれ半時ばかり経って、深山の夜気が肌寒く薄い着物に透り出した頃、突然空中に声があつて、「……そこにいるのは何者だ」と、叱りつけるではありませんか。しかし杜子春は仙人の教通り、何とも返事をしませんでした。

ところが又暫くすると、やはり同じ声が響いて、「……返事をしないと立ちどころに、命はないものと覚悟しろ」と、いかめしく嚇しつけるのです。杜子春は勿論黙ってしまし

た。——と、どこから登って来たか、爛々と眼を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上に躍り上って、杜子春の姿を睨みながら、一声高く哮りました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ揺れたと思うと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇が一匹、炎のような舌を吐いて、見る見る近くへ下りて来るのです。(この「猛虎と白蛇」の組み合わせは、実に「映像的にも美しい」場面になるかと思う。)

杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐っていました。虎と蛇とは、一つ餌食を狙って、互に隙でも窺うのか、暫くは睨合いの体でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に吞まれるか、杜子春の命は瞬く内に、なくなってしまうと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さっきの通りこうこうと枝を鳴らしているばかりなのです。杜子春はほっと一息しながら、今度はどんなことが起るか、心待ちに待っていました。

黒雲と天雷の出現

すると一陣の風が吹き起つて、墨のような黒雲が一面にあたりをどさずや否や、うす紫の稲妻がやにわに闇を二つに裂いて、凄しく雷が鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しよに瀑のような雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天変の中に、恐れ気もなく坐っていました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稲妻の光、——暫くはさすがの峨眉山も、覆るかと思つた位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟いたと思うと、空に渦巻いた黒雲の中から、真っ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。(この場面も映像的に壮大で自然の驚異に充ちた場面になるかと思う。)

杜子春は思わず耳を抑えて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡つて、向うに聳えた山々の上にも、茶碗ほどの北斗の星が、やはりきらきら輝いています。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じように、鉄冠子の留守をつけこんだ、魔性の悪戯に違いありません。杜子春は漸く安心して、額の冷汗を拭いながら、又岩の上に坐り直しました。

武装した神将の出現

が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐っている前へ、金の鎧を着下した、身の丈三丈もあるという、厳かな神将が現れました。神将は手に三叉の戟を持っていました。いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼を噴らせて叱りつけるのを聞けば、「……こら、その方は一体何物だ。この峨眉山という山は、天地開闢の昔から、おれが住居をしている所だぞ。それも憚らずたった一人、ここへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかったら、一刻も早く返答しろ」と云うのです。(これは、いわば聖地になぜ不法侵入して来たかと問い詰めているのである。)しかし杜子春は老人の言葉通り、黙然と口を噤んでいました。「……返事をしないか。——しないな。好し。しなれば、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷属たちが、その方をずたずたに斬ってしまうぞ」。——神将は戟を高く挙げて、向うの山の空を招きま

した。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無数の神兵が、雲の如く空に充滿ちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしているのです。(つまり、「十二神将」にはそれぞれ無数の「神兵」がいるのだから、それは、各「神将」にそれぞれ七千、総計八万四千の眷属夜叉を率いているのである。)

この景色を見た杜子春は、思わずあつと叫びそうにしましたが、すぐに又鉄冠子の言葉を思い出して、一生懸命に黙っていました。神将は彼が恐れないのを見ると、怒ったの怒らないのではありません。「……この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとつてやるぞ」と、神将はこう喚くが早い、三叉の戟を閃かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。そうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑いながら、どこともなく消えてしまいました。勿論この時はもう無数の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しよに、夢のように消え失せた後だったので。

北斗の星は又寒そうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に変わらず、こうこうと枝を鳴らしています。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向けにそこへ倒れていました。(本文)

*

*

さて、この場面は、猛虎や白蛇或いは黒雲や天雷の場合とは違って、神将は、三叉の戟を閃かせて、(実際)一突きに杜子春を突き殺してしまふ。すると、今度は、その「肉体」から「魂」だけが抜け出して、やがて、地獄へと落ちていくという新たな「試練」《展開》へと向かつて行くわけだが、これを「ゲーム」に喩えて言えば、易しい場面からより難しい場面へと次から次へと「ステージ」をクリアしながら、果たして最後まで辿り着けるかどうか、そして、最後まで辿り着ければ、正式な「弟子」となって、そこから「仙人」へと向かう新たな長い、「修行の道」が開けるといふことになるのか、そのような展開へと向かうのである。

五、魂は、地獄へと……

杜子春の体は岩の上へ、仰向けに(上向きで)倒れていましたが、杜子春の魂は、静に体から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、闇穴道という道があつて、そこは年中暗い空に、氷のような冷たい風がぴゅうぴゅう吹き荒んでいります。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木の葉のように、空を漂って行きましたが、やがて森羅殿という額の懸った立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にはいた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまわりを取り捲いて、階(階段)の前へ引き据えました。階(階段)の上には一人の王様が、まっ黒な袍に金の冠をかぶつて、いかめしくあたりを睨んでいます。これは兼ねて噂に聞いた、閻魔大王に違いありません。杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへ跪いていました。「……(こら、その方は何の為に、峨眉山の上へ坐っていた?)」

閻魔大王の声は雷のように、階(階段)の上から響きました。杜子春は早速その間に答えようと思ひましたが、ふと又思ひ出したのは、「決して口を利くな」という鉄冠子の戒めの言葉です。そこで唯頭を垂れたまま、唾のように黙っていました。すると閻魔大王

は、持っていた鉄の笏を挙げて、顔中の鬚を逆立てながら、「……その方はここをどこだ
と思う？」速に返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、地獄の呵責に遇わせて
くれるぞ」と、威丈高に罵りました。

が、杜子春は相変らず唇一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの
方を向いて、荒々しく何か言いつけると、鬼どもは一度に畏って、忽ち杜子春を引き
立てながら、森羅殿の空へ舞い上りました。

地獄には誰でも知っている通り、剣の山や血の池の外にも、焦熱地獄という焰の谷や
極寒地獄という氷の海が、真暗な空の下に並んでいます。鬼どもはそういう地獄の中へ、
代る代る杜子春を抛りこみました。ですから杜子春は無残にも、剣に胸を貫かれるやら、
焰に顔を焼かれるやら、舌を抜かれるやら、皮を剥がれるやら、鉄の杵に撞かれるやら、
油の鍋に煮られるやら、毒蛇に脳味噌を吸われるやら、熊鷹に眼を食われるやら、――そ
の苦しみを数え立てていては、到底際限がない位、あらゆる責苦に遇わされたのです。そ
れでも杜子春は我慢強く、じつと歯を食いしばったまま、一言も口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、呆れ返ってしまったのでしよう。もう一度夜のような空を
飛んで、森羅殿の前へ帰って来ると、さっきの通り杜子春を階（階段）の下に引き据え
ながら、御殿の上の閻魔大王に、「……この罪人はどうしても、ものを言う気色がござい
ません」と、口を揃えて言上しました。（恐らく、ここまで耐えた人間は珍しいのだろう。）

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れていましたが、やがて何か思いついたと見え
て、「……この男の父母は、畜生道に落ちて居る筈だから、早速ここへ引き立てて来い」
と、一匹の鬼に言いつけました。（これは、今までどこまで耐え忍んだ人間は殆ど居なかつたので、さすがの閻魔大王も眉をひそめて、暫く思案に暮れることになったのだろう。）

鬼は忽ち風に乗って、地獄の空へ舞い上りました。と思うと、又星が流れるように、二
匹の獸を駆り立てながら、さつと森羅殿の前へ下りて来ました。その獸を見た杜子春は、
驚いたの驚かないのではありません。なぜかといえは、それは二匹とも、形は見すばらし
い痩せ馬でしたが、顔は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。「……こら、そ
の方は何のために、峨眉山の上に坐っていたか、まっすぐに白状しなければ、今度はその
方の父母に痛い思いをさせてやるぞ」と云う。（これが結果として、杜子春にとっての「最
大の試練」になって行くのである。）

杜子春はこう嚇されても、やはり返答をしませんでした。「……この不孝者めが。その
方は父母が苦しんでも、その方さえ都合が好ければ、好いと思っっているのだな」、閻魔大
王は森羅殿も崩れる程、凄じい声で喚きました。「……打て。鬼ども。その二匹の畜生を、
肉も骨も打ち砕いてしまえ」と。鬼どもは一斉に「はっ」と答えながら、鉄の鞭をとって
立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練未積なく打ちのめしました。鞭はりゅうりゆ
うと風を切つて、所嫌わず雨のように、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、――畜生にな
った父母は、苦しうに身を悶えて、眼には血の涙を浮べたまま、見てもいられない程嘶
き立てました。「……どうだ。まだその方は白状しないか」と、閻魔大王は鬼どもに、暫
く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬も、
肉は裂け骨は砕けて、息も絶え絶えに階（階段）の前へ、倒れ伏していたのです。

杜子春は必死になって、鉄冠子の言葉を思い出しながら、緊く眼をつぶっていました。
するとその時彼の耳には、殆声とはいえない位、かすかな声が伝わって来ました。「…

…心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言いたくないことは黙って御出で」と。それは確に懐しい、母親の声に違いありません。杜子春は思わず、眼をあきました。そうして馬の一匹が、力なく地上に倒れたまま、悲しそうに彼の顔へ、じつと眼をやつてゐるのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思いやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さえも見せないのです。大金持になれば御世辞を言い、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何という有難い志でしょう。何という健気な決心でしょう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶようにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん」と一声を叫びました。……… (本文)

*

*

さて、この「お母さん」には杜子春の「万感の思い」が込められているとともに、この「お母さん」という言葉が発すること、杜子春の「頭の中」(或いは「心の中」)には、再び、本来の「人間らしい心」が甦つてきて、杜子春は、初めて「自分の人生」(それは人間としての「生き方」)というものを根本から問い直し考え直す「切っ掛け」(チャンス)を得たのである。そのように仕向けたのは、誰でもない「老人」(仙人)ではあるが、その「老人」(仙人)は、杜子春を自分の「弟子」にしてもよいと思っていたが、しかし、「……どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい」と言っている。これは、「……いくらおれの弟子にしたところが、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだからな」ともある。——つまり、「……杜子春を自分の『弟子』にしてもよい」というのは、いわば仙人へのほんの「入り口」に過ぎず、一方、「……立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第で決まることだから」と言うのは、立派な「仙人」になるためには、それこそ何十年という極めて「厳しい修行」の毎日の積み重ねがどうしても必要不可欠になるとともに、たとえ「仙人」になれたとしても、例えば、峨眉山のような人里離れた奥深い山奥に一人住むような生活が、果たして、その人にとって真に人間としての「幸せ」になるのかどうかという問題も残るのである。——つまり、一方の「大金持ち」、一方の「仙人」というのは、どちらも「極端」になり過ぎているのであり、人間の「幸せ」というのは、むしろ「中庸」(これは「両端を極め尽くして、中庸を生きる」)にこそあるというのが、いわば「作者」(つまり「芥川龍之介」)の「考え方」になるかと思う。

六、新たな生活

その声に気がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでいたのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「……どうだな。おれの弟子になったところが、とても仙人にはなれはすまい」と、片目眇の老人は微笑を含みながら言いました。「……なれませんが、しかし私
はなれなかったことも、反って嬉しい気がするのです」。

杜子春はまだ眼に涙を浮べたまま、思わず老人の手を握りました。「……いくら仙人に

なれたところが、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けている父母を見ては、黙っている訳には行きません」と云う。

「……もしお前が黙っていたら——」と鉄冠子は急に厳な顔になって、じっと杜子春を見つめました。「……もしお前が黙っていたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまおうと思っていたのだ。——お前はもう仙人になりたいという望も持っていない。大金持になることは、元より愛想が付きた筈だ。ではお前はこれから後、何になったら好いと思うな」と聞くと、「……何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と、杜子春の声には今までにない晴れ晴れした調子が罩っていました。「……その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇わないから」と、

鉄冠子はこう言う内に、もう歩き出していましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、(いわば「ホームレスの杜子春」に対して)、「……おお、幸、今思い出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と、さも愉快そうにつけ加えました。(完)

*

*

蜘蛛の糸

蜘蛛の糸

例えば、芥川龍之介の『蜘蛛の糸』という作品は、非常によく知られている作品であり、しかも、極めて短い作品で、二、三十分もあれば、誰でも読めてしまうほどでありながら、いわば「一つの世界」（或いは「一つの物語」）を創り出しているという点に於いては、まさに「優れた作品」の一つということになるのかも知れない。……

さて、その「本文」であるが、それは、次のような非常に「美しい文章」から始まるものである。それは、「……或る日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、独りでぶらぶら御歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、その真ん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽は丁度朝なのでございましょう……」とある。

これは、やはり「美しい文章」であり、いかにも蓮の花咲く「極楽」のゆつたりとした、霏、困気の満ち溢れた感じがよく出ている文章になるかと思う。さて、その次は、「……やがて御釈迦様はその池のふちに御佇みになつて、水の面を蔽っている蓮の葉の間から、ふと下の容子を御覧になりました。この極楽の蓮池の下は、丁度地獄の底に当つて居りますから、水晶のような水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、丁度覗き眼鏡を見るように、はつきりと見えるのでございます」とある。この部分も、非常に「美しい描写」であり、その蓮池の透き徹つた水晶のような「水の中の様子」がはつきりと目の前に見えて来るような感じである。そして、「……するとその地獄の底に、犍陀多と云う男が一人、ほかの罪人と一しよに蠢いている姿が、御眼に止りました。この犍陀多と云う男は、人を殺したり家に火を付けたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊でございますが、それでもたつた一つ、善い事を致した覚えがございます。と申しますのは、ある時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路はたを這つて行くのが見えました。そこで犍陀多は早速足を挙げて、踏み殺そうと致しましたが、『いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無闇にとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ』と、こう急に思い返して、とうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやったからでございます」。

さて、「引用文」が長くなつたが、それは、一体、なぜかと問えば、それは、「本文」を直接読んで、その「文章」を深く味わつてもらいたいからである。つまり、「文章の美しさ」を感じてもらいたいということである。すなわち、「読書」とは、一体、何なのか、という「根本問題」に対して、それは、ただ単に「表面的な意味内容」が分かれば、それでもう十分ということではなく、むしろ、一つは、「文章」そのものの「美しさ」を感じてもらいたいということであり、また、一つは、文字通り、文章の「一字一句」をできるだけ「丁寧かつ厳密」に深く読んでは、その真の「意味合い」を厳密に読み取ってもらいたいということである。そして、もう一つは、古今東西の真に優れた「作者の魂」とめぐり逢つては、その真に優れた「作者の魂」とできるだけ深く交わることによって、最終的には、その作者の「魂の鼓動」（つまりは「魂の声」）をできるだけ厳密に聴き分けてもらいたいとともに、もう一つは、自分自身、真に「内的成長」することによって、最終的には、「……自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう『精神の自立』した一人の人間になつてもらいたい」ということでもあるのです。もちろん、「作品」を気楽に楽しむことも、大事なことではあるが……。

一、お釈迦様の想い

さて、『蜘蛛の糸』の「話」に戻りたいと思うが、それは、「……御釈迦様は地獄の容子を御覧になりながら、この犍陀多には蜘蛛を助けた事があるのを御思い出しになりました。そうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら、この男を地獄から救い出してやろうと御考えになりました。幸い、側を見ますと、翡翠のような色をした蓮の葉の上に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい銀色の糸をかけて居ります。御釈迦様はその蜘蛛の糸をそつと御手に御取りになって、玉のような白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ、まっすぐにそれを御下しなさいました」と続くのである。

まず、ここまでの「本文」は、いわゆる「極楽の世界」の描写であり、ある朝、お釈迦様は、白い花咲く蓮池のそばをお散歩されている時に、その池のふちに御佇みになり、たまたま蓮池の蓮の葉の間の、その透き徹った水晶のような「水の中の様子」をご覧になってみると、そこは、まさに「地獄の世界」の三途の河や針の山の景色、その他の様子が、まるで覗き眼鏡で見えるように、はっきりと見えてきて、しかも、その地獄の底で、犍陀多という男の、ほかの罪人と一しよに蠢いている姿が、お釈迦様の「お眼に止った」ということである。——しかも、その犍陀多という男は、人を殺したり、また、家に火をつけたりの大泥棒であったが、ただ一つだけ「善い事」をしたことがあり、それは、林の中を歩いている時に、たまたま路ばたを蜘蛛が一匹這って行くのを見た時、すぐに踏み殺そうと思ったが、いや、待て、可哀想だと思いついて、思い止まり、その「生命」を助けたことがあったという、そのことを思い出した、お釈迦様は、その「善い事」をしたことの報いとして、いわゆる銀色の「蜘蛛の糸」を地獄の底へと一本垂らして、地獄の底にいる犍陀多という男を救い出してやろうとお思いになったことである。もちろん、このような「内容」から、まさに『蜘蛛の糸』という「題名」になったことである。

ただ、不思議に思うことは、たった「一匹の蜘蛛」を助けただけで、どうしてお釈迦様は、極悪人の「犍陀多」という男を地獄から救い出してやろうとお思いになったのだろうか？ それは、たった「一匹の蜘蛛」であつても、その一般には取るにならぬと思われている「蜘蛛の生命」というものを、まさに「尊し」と思う心があるとすれば、そこにはまだ「改心（更正）する可能性」が僅かでも残されていることであり、それゆえ、お釈迦様は、その極悪人の「犍陀多」という男に、たった一度だけ、まさに地獄から抜け出す「チャンス」をお与えになったということである。しかし、それは、決して容易なことではなく、地獄の底から極楽まで上つていくには、まさに気が遠くなるほどの「距離と本人の努力」とが必要不可欠になって来るということである。

二、地獄からの脱出

それでは、次の「本文」であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……こちらは地獄の底の血の海で、ほかの罪人と一しよに、浮いたら沈んだりしている犍陀多でございます。何しろどちらを見ても、まっ暗で、たまにそのくら暗からぼんやり浮き上つているものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、そ

の心細さと云つたらごさいません。その上あたりは墓の中のようにしんと静まり返つて、たまに聞えるものと云つては、ただ罪人がつく微な嘆息ばかりでございませぬ。これはここへ落ちて来るほどの人間は、もうさまさまな地獄の責苦に疲れて、泣声を出す力さえなくなつてるのでございませぬ。ですからさすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかかった蛙のように、唯もがいてばかり居りました。

ところがある時の事でございませぬ。何気なく犍陀多が頭を挙げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした暗の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛の糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一すじ細く光りながら、するすると自分の上へ垂れて参るでございませぬか。犍陀多はこれを見ると、思わず手を拍つて喜びました。この糸に縋りついて、どこまでものぼつて行けば、きっと地獄からぬけ出せるに相違ございませぬ。いや、うまく行くと、極楽へはいる事さえも出来ませぬ。そうすれば、もう針の山へ追いつげられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もある筈はございませぬ。

こう思いましたから犍陀多は、早速その蜘蛛の糸を両手でしつかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。元より大泥坊の事でございませぬから、こう云う事には昔から、慣れ切つてるのでございませぬ。——しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございませぬから、いくら焦つて見た所で、容易に上へは出られませぬ。ややしばらくのぼる中に、とうとう犍陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へはのぼれなくなつてしまいました」とある。

*

*

さて、ここまでの犍陀多は、ただひたすら上へ上へとぼろうとただひたすら一生懸命に努力をしている状態であり、このような状態を最後まで続けていたら、或いは、地獄から抜け出て、さらには極楽へも入ることができ得たかも知れませぬ。しかし、犍陀多は、何気なく下を見てしまったのである。そして、自分は、地獄の底からは遙かに上の方にいることに気づくのである。すると、ここへ来てから何年にも出した事のない声で、「しめた。しめた」と笑うのであった。——この時、犍陀多の「心の中」には、再び、極悪人だった頃の、それは、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされていた頃の、まさに「自我な心」が甦つてしまつたのである。そして、遙か下の方を見ると、「……教限もない罪人たちが、自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のように、やはり上へ上へ一心によじのぼつて来るではございませぬか。犍陀多はこれを見ると、驚いたのと恐いので、暫くは唯、大きな口を開いたまま、眼ばかり動かして居りました。自分一人でさえ断れそうな、この細い蜘蛛の糸が、どうしてあれだけの人数の重みに堪える事が出来ませぬ。もし万一途中で断れたと致しましたら、折角ここへまでのぼつて来たこの肝腎な自分までも、元の地獄へ逆落しに落ちてしまわなければなりません。そんな事があつたら、大変でございませぬ。が、そう云う中にも、罪人たちは何百となく何千となく、まっ暗な血の池の底から、うようよと這い上つて、細く光っている蜘蛛の糸を、一列になりながら、せつせとのぼつて参ります。今の中にどうかしななければ、糸はまん中から二つに断れて、落ちてしまうのに違いありません」。そのような不安と焦りから、終に、犍陀多は、大きな声を出して、「……こら、罪人ども。この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たちは一体誰に尋いて、のぼつて来た。下りろ。下りろ」と喚いてしまうのである。それは、まさに「言つてはいけない言葉を言つてしまつた」ということである。「……その途端でございませぬ。今

まで何ともなかった蜘蛛の糸が、急に犍陀多のぶら下がっている所から、ぷつりと音を立てて断れては、まっさかさまに落ちてしまい、後にはただ極楽の蜘蛛の糸が、きらきらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れているばかりでした」とある。

三、再び、地獄へと

さて、犍陀多は、再び、地獄の底へと落ちてしまいました。それは、誰のせいでもない、それは、彼自身の「心」（つまりは「自我な心」）のせいなのです。お釈迦様は、極悪人の犍陀多という男の「心の中」にも、いわゆる「善き心」があることを観て取りました。だからこそ、お釈迦様は、たった一度だけ、まさに地獄から抜け出せる「チャンス」をお与えになったのです。それは、これほどの「極悪人」でも、その「善き心」に導かれて、自ら自分を「救い出す」ことが、果たしてでき得るだろうか、むしろ「お試し」になったのでございます。——最初、犍陀多は、この「地獄の底」から抜け出したい一心から、ただひたすら上へ上へのぼろうとただひたすら一生懸命に努力をしている状態であり、そのような状態を最後まで続けていたら、或いは、地獄から抜け出て、さらには極楽へも入ることができ得たかも知れません。お釈迦様は、むしろ「それを期待した」のではありません。なぜなら、誰の心にも「善き心」は、生まれながらに持ち合わせているからです。ところが、われわれ人間というのは、俗世間に忙しくまみれているうちに、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、本来の「善き心」（それは「無色透明な心」）は、実に様々に「変形」（変色）してしまい、本来の「自分自身」（つまり「善き心」）を見失っている状態にあるのです。それゆえ、その実に様々に「変形」（変色）してしまつた「自分の心」を、もう一度、いわゆる本来の「善き心」（それは「無色透明な心」）へと戻してやることこそ、まさに「極楽への道」にほかならないのである。

さて、「本文」の最後は、「……お釈迦様は極楽の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじっと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のように沈んでしましますと、悲しそうな御顔をなさりながら、またぶらぶら御歩きになり始めました。自分ばかり地獄からぬけ出そうとする、犍陀多の無慈悲な心が、そうしてその心相当な罰をうけて、元の地獄へ落ちてしまったのが、御釈迦様の御眼から見ると、浅間しく思召されたのでございましょう。——しかし極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません。その玉のような白い花の、その真ん中にある金色の蕊からは、何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居ります。極楽ももう午に近くなつたのでございましょう」。

一寸の

蓮の池への

蜘蛛の糸

藪やぶ
の
中

藪の中

例えば、芥川龍之介の数多くの作品の中には、映画でもよく知られている『藪の中』という極めて短い「短編小説」があるが、その「本文」は、次のようなものである。

一、検非違使に問われたる木樵りの物語

さようでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違いございません。わたしは今朝いつもの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があったのでございます。あつた処でございませうか？ それは山科の駅路からは、四五町ほど隔たつて居りましょう。竹の中に痩せ杉の交つた、人氣のない所でございます。

死骸は縹の水干に、都風のさび鳥帽子をかぶつたまま、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまわりの竹の落葉は、蘇芳（くすんだ赤）に滲みたようでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾いて居つたようでございます。おまけにそこには、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないように、べつたり食いついて居りましたっけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございません。ただその側の杉の根がたに、縄が一筋落ちて居りました。それから、——そうそう、縄のほかにも榎が一つございまして。死骸のまわりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きっとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません。何、馬はいなかつたか？ あそこは一体馬などは、入れない所でございます。何しろ馬の通う路とは、藪一つ隔たつて居りますから。（本文）

*

*

まず、最初に、「検非違使」という言葉が出て来るが、これは、平安初期から置かれ、京中の「非法・非違」を檢察し、今の「警察官と裁判官」とを兼ねたような存在であり、その権限は、極めて強大であつたとある。それゆえ、ここでは、いわば「取り調べ官」ということでよいのではないかと思う。そして、最初は、その「検非違使に問われたる木樵りの物語」という書き出しになっているが、それを「今日風」に表現すれば、いわば「死体の第一発見者（木樵り）の証言」ということであり、それを「要約」すると、次のようになるかと思う。つまり、「……あの死骸を見つけたのは、わたしに違いございません。わたしは今朝いつもの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。死骸は縹の水干に、都風のさび鳥帽子をかぶつたまま、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございます」とある。（この「胸もとの突き傷」は大事であり、死因は、胸を「一突き」されたからであり、決して「太刀で斬られた」からではないのである。）

次に、太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございません。死骸のまわりにあつたものは、杉の根がたに縄が一筋と榎が一つ落ちて居りました。が、「……草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きっとあの男は殺される前に、よほど手痛い働きでも致したのに違いございません」とある。これは、いかにも二人（男同士）が太刀で争つたように見せてはいるが、実は、そうではなく、可能性があるのは、一つは、盗人

(多襄丸)が「侍」を無理やり組み伏せて縛り付けた時か、そして、もう一つは、「……男は杉の根に縛られていて。——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐から出してたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈しい女は、一人も見つかりません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹を突かれたでしょう。いや、それは身を躲したところが、無二無三(がむしやら)に斬り立てられる内には、どんな怪我也仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀を打ち落しました」という時か、恐らく、この時に、お互い激しく争つて、「……草や竹の落葉は、一面に踏み荒された状態になつた」のではないかと思う。

また、「……馬はいなかつたか？ あそこは馬など入れない所でございます」と答えている。もちろん、この木樵りの証言に「うそ」は一つもないのであり、その場で見たままをそのまま素直に語っているものである。

二、検非違使に問われたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございますよう。場所は関山から山科へ、参ろうと云う途中でございます。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は傘子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのはただ菰重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確か法師髪の馬のようでございます。丈でございますか？ 丈は四寸もございましたか？ ——何しろ沙門(修行僧)の事でございますから、その辺ははっきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携えて居りました。殊に黒い塗り箆へ、二十あまり征矢をさしたのは、ただ今でもはっきり覚えて居ります。

あの男がかようなうとは、夢にも思わずに居りましたが、真に人間の命なぞは、如露亦如電(人の命は露の如く儚く、稲妻の如く一瞬のうちに消え去る)に違いございません。やれやれ、何とも申しようのない、気の毒な事を致しました。(本文)

さて、次は、「検非違使に問われたる旅法師の物語」であるが、それを「要約」すると、次のようになるかと思う。つまり、「……あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。あの男は馬に乗った女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました。女は傘子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。馬は月毛の、——確か法師髪の馬のようでございますが、何しろ沙門(修行僧)の事でございますから、確かなことはわかりません。また、男は、太刀も帯びて居れば、弓矢も携えて居りました。殊に黒い塗り箆へ、二十あまり征矢をさしたのは、今でもはっきり覚えて居ります」と証言をしている。もちろん、この証言にも「うそ」は全くなく、すべてほんとうのことである。

三、検非違使に問われたる放免の物語

わたしが搦め取った男でございますか？ これは確かに多襄丸と云う、名高い盗人でございます。もつともわたしが搦め取った時には、馬から落ちたのでございませう、栗田口

の石橋の上に、うんうん呻って居りました。時刻でございませうか？時刻は昨夜の初更頃でございませう。いづぞやわたしが捉え損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。ただ今はそのほかにも御覧の通り、弓矢の類さえ携えて居ります。さようでございませうか？あの死骸の男が持っていたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違いございませう。革を巻いた弓、黒塗りの籠、鷹の羽の征矢が十七本、——これは皆、あの男が持っていたものでございませう。はい。馬もおつしやる通り、法師髪の月毛でございませう。その畜生に落とされるとは、何かの因縁に違いございませう。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いたまま、路ばたの青芒を食って居りました。この多襄丸と云うやつは、浴中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございませう。昨年の秋鳥部寺の賓頭盧の後の山に、物詣でに来たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されていたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乗っていた女も、こいつがあつた男を殺したとなれば、どこへどうしたかわかりませう。差出がましゅうございませうが、それも御詮議下さいませう。(本文)

さて、次は、「検非違使に問われたる放免の物語」であるが、その本文を「要約」すると、それは、「……わたしが搦め取った男でございませうか？これは確かに多襄丸と云う、名高い盗人であり、浴中に徘徊する盗人の中でも、女好きなやつでございませう。そして、わたしが搦め取った時には、馬から落ちたのでございませう。栗田口の石橋の上に、うんうん呻って居りました。携えていたものは、自分の太刀、革を巻いた弓、黒塗りの籠、鷹の羽の征矢が十七本、あの男(侍)が持っていたものでございませう」と答えている。これにも「うそ」は全くないのである。(ただ、気になるのは、最初、征矢は二十本あったはずだが、十七本になっている。また、侍の「太刀」も持ち逃げしたはずだが、役人に搦め取られた時には、それを携えてはいなかった。だとすれば、恐らく、売り飛ばして(当面の間の)金に換えたということになるのだらう。)

四、検非違使に問われたる姫の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございませう。が、都のものではございませう。若狭の国府の侍でございませう。名は金沢の武弘、年は二十六歳でございませう。いえ、優しい気立でございませうから、遺恨なぞ受ける筈はございませう。

娘でございませうか？娘の名は真砂、年は十九歳でございませう。これは男にも劣らぬくらい、勝気な女でございませうが、まだ一度も武弘のほかに、男を持った事はございませう。顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございませう。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立ったのでございませうが、こんな事になりますとは、何と云う因果でございませう。しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめませう。でも、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願いでございませうから、たとい草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいませう。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございませう。婿ばかりか、娘までも……(跡は泣き入りて言葉なし)(本文)

*

*

さて、今度は、「検非違使に問われたる姫の物語」であるが、それは、「……はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものではございません。若狭の国府の侍でございます。名は金沢の武広、年は二十六歳でございます。優しい氣立でございますから、遺恨など受ける筈がございません。娘でございますか？ 娘の名前は真砂、年は十九歳でございます。これは男に劣らぬくらい、勝気な女でございますが、まだ一度も武広のほかには、男を持った事はございません。顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございます。武広は昨日娘と一しよに、若狭へ旅立ったのでございます。……」とある。ここまでは、すべてほんとうのことである。

それは、なぜかと問えば、それは、「媼」を除いて、ほかの人たちは、被害者（死者）とは直接、何らの「利害損得関係」（或いは「愛憎関係」）などの全く絡んではない「第三者」（つまり百%「赤の他人」）だからである。それゆえ、「うそ」を附く理由が基本的には「全くない」ということである。

五、多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されませぬ。その上わたしもこうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思う瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはそのためもあつたのでしよう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のように見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思っているように、大した事ではありません。どうせ女を奪うとなれば、必ず、男は殺されるのです。ただわたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとおためごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きている、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりませぬ。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。いや、その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです。が、あの山科の駅路（駅や宿のある街道）では、とてもそんな事は出来ませぬ。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある。この古塚を発いて見たら、鏡や太刀が沢山出た、わたしは誰も知らないように、山の陰の藪の中へ、そう云う物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に売り渡したい、——と云う話をしたのです。男はいつかわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。欲と云うものは恐しいではありませんか？ それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けていたのです。

わたしは藪の前へ来ると、宝はこの中に埋めてある、見に来てくれと云いました。男は欲に渴いていますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つていると云うのです。またあの藪の茂っているのを見ては、そう云うのも無理はありません。わたしはこれも実を云えば、思う壺にはまったのですから、女一人を残したまま、男と藪の中へはいりました。

藪はしばらくの間は竹ばかりです。が、半町（一町は約一〇九尺）ほど行った処に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これほど都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、もつともらしい嘘をつきました。男はわたしにそう云われると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が並んでいる、——わたしはそこへ来るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いているだけに、力は相当にあつたようですが、不意を打たれてはたまりません。たちまち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまいました。縄ですか？ 縄は盗人の有難さに、いつ堀を越えるかわかりませんから、ちゃんと腰につけていたのです。勿論声を出させないためにも、竹の落葉を頬張られば、ほかに面倒はありません。

わたしは男を片付けてしまうと、今度はまた女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に来てくれと云いに行きました。これも凶星に当たったのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠を脱いだまま、わたしに手をとられながら、藪の奥へはいって来ました。ところがそこへ来て見ると、男は杉の根に縛られている。——女はそれを一目見るなり、いつのまに懐から出していたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈しい女は、一人も見ただ事がありません。もしその時でも油断していたらば、一突きに脾腹を突かれたでしょう。いや、それは身を躲したところが、無二無三（がむしやら）に斬り立てられる内には、どんな怪我も仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかこうにか太刀も抜かずに、とうとう小刀を打ち落しました。いくら気の勝った女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはどうとう思い通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出来たのです。

男の命は取らずとも、——そうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとする、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのように縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男につれ添いたい、——それも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました。（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなたの方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなたの方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、——わたしの念頭にあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなたの方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、ここは去る

まいと覚悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしると云いました。(杉の根がたに落ちていたのは、その時捨て忘れた縄なのです)。男は血相を変えたまま、太い太刀を引き抜きました。と思うと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。——その太刀打ちがどうなったかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、——どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思っっているのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけです。(快活なる微笑)

わたしは男が倒れると同時に、血に染まった刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女はどこにもいないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残っていません。また耳を澄ませて見ても、聞えるのはただ男の喉に、断末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打ちを始めるが早いか、人の助けでも呼ぶために、藪をくぐって逃げたのかも知れない。——わたしはそう考えると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪ったなり、すぐにまたもとの山路へ出ました。そこにはまだ女の馬が、静かに草を食っています。その後の事は申し上げるだけ、無用の口数に過ぎますまい。ただ、都へはいる前に、太刀だけはもう手放していました。——わたしの白状はこれだけです。どうせ一度は樗の梢に、懸ける首と思っっていますから、どうか極刑に遇わせて下さい。(昂然たる態度)(=自信に満ちて誇らしげなさま)(本文)

多襄丸の自供

さて、「本題」は、ここからであり、それは、いわゆる旅姿の「侍夫婦」(二人)と「名高い盗人」(多襄丸)との間で起こった、まさに「藪の中」での出来事に対する「供述」が、それぞれ一人一人違うところである。その「内容」には、非常に「興味深い」ものがあり、それゆえ、敢えてその「謎解き」を試みたいと思う。——まず、「多襄丸の自供」であるが、その「本文」は、次のようなものである。つまり、「……あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。ではどこへ行ったのか？ それはわたしにもわからないのです。わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会いました。その時風の吹いた拍子に、傘子の垂網が上ったものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、見えたと思う瞬間には、もう見えなくなっただけです。わたしにはあの女の顔が、女菩薩のように見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとい男は殺しても、女は奪おうと決心しました」とある。そして、ここまでの「自供」は、冒頭の「……あの男を殺したのはわたしです」という言葉以外は、すべてほんとうのことになるかと思う。

続けて、多襄丸は、次のようにも語るのである。それは、「……何、男を殺すなぞは、大した事ではありません。わたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きている。——しかしそれでも殺したので

す。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません」という「内容」である。これは、一体、どういう「意味合い」の言葉になるのだろうか？　まず、「……何、男を殺すなどは、大した事ではありません。わたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが」とあり、ここまでは「普通一般的」であるが、普通一般的でないのは、次からの言葉であり、それは、「……あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしの言葉だけでも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きています。——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません」という内容であり、これは、事件とは直接何の関係もない、むしろ「役人」(或いは「世間一般」)を批判している言葉である。ここに「盗人」(多襄丸)という人の「ものの考えた方」が表れていると共に、これは、まさに「作者」(つまり「芥川龍之介」)という人の「もの考え方」が表れているところでもあり、この「盗人」(多襄丸)という人は、自分の太刀で直接「男は殺してはいない」が、しかし、結果として、自分のせいでも、まさに「相手の男を殺すような結果になってしまった」ということである。だからこそ、冒頭で、「……あの男を殺したのはわたしです」と語るが、それは、この「盗人」(多襄丸)という人の、いわば「罪の意識」(或いは「良心の呵責」)からの言葉と言ってもよいのだろう。

さて、「本文」は、次のように続く。「……しかし男を殺さずとも、女を奪う事が出来れば、別に不足はない訳です。その時の心もちでは、出来るだけ男を殺さずに、女を奪おうと決心したのです」。そこで、一計を案じて、それは、藪の中に「宝」が埋まっていると「嘘」をついて、男を「藪の中」へと誘い、そこで男を不意にいきなり組み伏せて、一本の杉の木が根がたへ、括りつけてしまうのである。一方、女は、馬から下りずに待っていたが、「盗人」(多襄丸)は、戻ってきて、男が急病を起こしたと嘘をついて、女を「藪の中」へと連れて来る。「……ところが、そこに来て見ると、男は杉の根に縛られている。女は、それを一目見るなり、いつのまに懐から出していたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あのくらい気性の烈しい女は、一人も見つかりませんでした。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかこうにか太刀を抜かずに、とうとう小刀を打ち落としました。そして、わたしはどうとう思い通り、男の命は取らずとも、その男が見ている前で、女を手に入れる事は出来たのです」と。ここまでに「うそ」はない。

そして、最大の「問題」は、この「次の段階」で起こるのである。それは、多襄丸は、男は殺さずにすみ、また、女は泣き伏している状態であるので、このまま藪の外へと逃げようとする、「……女は突然わたしの腕へ、気違いのように縋りつき、切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云うのです。いや、その内どちらにしろ、生き残った男になつれ添いたい、——そうも喘ぎ喘ぎ云うのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい気になりました」とある。これらの「言葉」は、どこまでが「ほんとう」であり、どこからが「うそ」なのかは、今の段階では判別しがたいが、敢えて結論から言えば、実は「うそ」であり、この「うそ」は、後述の卑怯な「殺し方」はしたくないということから、男の縄を解いて、一対一の「対決」へと展開させるための伏線になるのである。

さて、「……こんな事(相手の男を殺したい)」と申し上げると、きつとわたしはあなた方より残酷な人間に見えるでしょう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないから

です。殊にその一瞬間の、燃えるような瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとい神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい。——わたしの念頭にあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでしょう。男もそうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、じつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、ここは去るまいと覚悟しました」とある。

この「本文」のその中で、「……わたしは、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい。——わたしの念頭にあつたのは、ただこう云う一事だけです。これはあなた方の思うように、卑しい色欲ではありません。もしその時色欲のほかに、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでしょう」とあるが、この「部分」だけは、まさに「ほんとうのこと」であり、その証拠は、夫（侍）の供述の中でも、次のように語っているからである。つまり、「……盗人は妻を手ごめにする、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。（中略）、妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬しさに身悶をした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折れ合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ。（中略）、そして、妻は確かにこう云つた。——「……ではどこへでもつれて行って下さい」とあるからである。

*

*

さて、「本文」では、「盗人」（多襄丸）は、男を殺したいという気持ちに襲われるが、しかし、卑怯な「殺し方」はしたくないということ、男の縄を解いて、一対一の「対決」ということになり、「……わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。わたしは今でもこの事だけは、関心だと思つているのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから」と言う。

この「部分」は、恐らく、「うそ」であると言つてもよいのだろう。なぜなら、後述の「夫」は、この問題には全く触れていないからである。それでは、なぜ、多襄丸は、このような「嘘」をついたのだろうか？ それは、いわば「男の面目」（名誉）のためである。というのも、この「夫」は、目の前の「欲」（つまり「宝」）に目が眩んで、やすやすと多襄丸の罠にはまり、杉の根がたに縛られただけではなく、いわば「愛する妻」を目の前で「手ごめ（辱め）」を受けるのを助けることもできず、ただただ傍観していたということ、武士として余りにも情けない、これ以上の「屈辱的なこと」はないのであり、そこで、多襄丸は、相手の「夫」は、武士として立派に戦つて死んで行つたという、いわば「武士の面目」が立つように、まさに「嘘」をついたということである。それでは、なぜ、そのような「余計なこと」をしたのかと問えば、それは、やはり、結果として、「彼を死へと追いやつたのは、自分に他ならない」という、そういう「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）があつたからであろう。

六、清水寺に来れる女の懺悔

——その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまおうと、縛られた夫を眺めながら、嘲るように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶えをしても、体中にかかった縄目は、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは思わず夫の側へ、転ぶように走り寄りました。いえ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしをそこへ蹴倒しました。ちょうどその途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようなない輝きが、宿っているのを覚りました。何とも云いようなない、——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震いが出ずにはいられません。口さえ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、——ただわたしを蔑んだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、我知らず何か叫んだぎり、とうとう気を失ってしまいました。

その内にやつと気がついて見ると、あの紺の水干の男は、もうどこかへ行っていました。跡にはただ杉の根がたに、夫が縛られているだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、——その時のわたしの心の中は、何と云えば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすって下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません」。

わたしは一生懸命に、これだけの事を云いました。それでも夫は忌わしそうに、わたしを見つめているばかりなのです。わたしは裂けそうな胸を抑えながら、夫の太刀を探しました。が、あの盗人に奪われたのでしよう、太刀は勿論弓矢さえも、藪の中には見当りません。しかし幸い小刀だけは、わたしの足もとに落ちています。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にこう云いました。——「……ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します」。

夫はこの言葉を聞いた時、やつと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまっていますから、声は少しも聞えませんが、わたしはそれを見ると、たちまちその言葉を覚りました。夫はわたしを蔑んだまま、「殺せ」と一言云ったのです。わたしはほとんど、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしはまたこの時も、気を失ってしまったのでしょうか。やつとあたりを見まわした時には、夫はもう縛られたまま、とうに息が絶えていました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交った杉むらの空から、西日が一すじ落ちています。わたしは泣き声を呑みながら、死骸の縄を解き捨てました。そうして、——そうしてわたしがどうなつたか？ それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。とにかくわたしはどうしても、死に切る力がなかったのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにこうしている限り、これも自慢にはなりません。（寂しき微笑）、わたしのように腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盗人の手ごめに遇つたわたしは、

一体どうすれば好いのでしょうか？ 一体わたしは、——わたしは、——（突然烈しき歎歎）とある。（本文）

女（妻）の自供

さて、今度は「清水寺に来れる女の懺悔」というものであり、その「本文」は、次のようなものである。つまり、「……その男は、わたしを手ごめにしてしまうと、縛られた夫を眺めながら、嘲るように笑いました。夫はどんなに無念だったでしょう。が、いくら身悶えをしても、体中にかかった縄目は、一層ひしひしと食い入るだけです。わたしは夫の側へ、走り寄ろうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしをそこへ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云いようもない輝きが、宿っているのを覚りました。——わたしはあの眼を思い出すと、今でも身震いが出ずにはいられません。口さえ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を伝えたのです。しかしそこに閃いていたのは、怒りでもなければ悲しみでもない。——ただわたしを蔑んだ、冷たい光だったではありませんか？ わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたように、とうとう気を失ってしまいました」とある。

つまり、女（の主観）は、夫の「眼の中」に「自分を蔑む心」を見たということである。それは、一体、なぜなのか？ ふつうに考えれば、一つは、手ごめになる前になぜ自害しなかったのか？ 或いは、その後、なぜ自害しようとしなかったのか？ そして、もう一つは、そもそも本気で「拒む気」があったのかという疑いも生じやすい。しかし、それらは、いずれも違う。なぜなら、まず、妻は、気性の激しい女性であり、最初は、懐から小刀を抜き出し果敢に戦ったが、最後は、とうとう小刀を下に打ち落とされてしまう。つまり、この時は本気で戦っているものであり、そのあと、男に手ごめにされてしまうが、その時の「心的状態」は、一体、どのようなものだったかは、何とも推測しがたいが、それを敢えて推測してみると、恐らく、気の強い（自尊心の強い）女性であるので、やはり「屈辱的な思い」は強かったとともに、夫の前であるので、なおさら恥ずかしさや悔しさなどは深かったかと思う。それゆえ、夫は、妻のことを責めることはできないのである。それよりも、むしろ、妻を助けてやれない自分のふがいなさを責めたに違いない。しかも、夫は、「優しい気立の人」であるので、妻が「自害」することなどは、決して望んではいなかったのである。それでは、なぜ、妻は、夫の「眼の中」に「自分を蔑む心」を見たのだろうか？ それは、次のようなことである。つまり、妻が男（盗人）に突然、「……落葉の上へ、蹴倒される」のは、（この場面は、まだ出て来てはいないが）、実は、妻が、「……あの人（夫）を殺して下さい」と何度も叫んでいる時なのである。その時に、妻は、まさに夫の「眼の中」に「自分を蔑む心」を見たということである。

さて、気を失い、再び、目を覚ました時には、男は、もうそこにはいなかった。夫が縛られているだけである。もし、この「言葉」がほんとうであれば、夫と盗人が「真剣で戦った」というようなことは、まさに「大うそ」になる。もちろん、女も「うそ」を言っている可能性もあるので、どちらがどうとは言えない。そして、「……わたしは竹の落葉の上に、やっと体を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと変わりません。やはり、冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せているのです。恥しき、

悲しき、腹立たしき、——その時のわたしの心の中は、何と云えば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。『……あなた。もうこうなつた上は、あなたと御一しよには居られませんか。わたしは一思いに死ぬ覚悟です。しかし、——しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覧になりました。わたしはこのままあなた一人、お残し申す訳には参りません』と、わたしは一生懸命に、これだけのことを云いました」とある。そして、妻は、夫の「太刀」を探すが、どこにもなく、下に落ちていた小刀を手に取って、再び、「……ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します」と言うと、夫は、やつと唇を動かして、もちろん、ものが言えない状態であり、声は少しも聞えてはいないが、その言葉の意味を覚りました。「……夫はわたしを蔑んだまま、『殺せ』と一言云ったのです。わたしは、ほとんど夢うつつの内に、夫の縲の水干の胸へ、づぶりと小刀を刺し通しました」とある。

しかし、これは、やはり「おかしい」のである。なぜなら、なぜ、最初に夫の縄を解き、そして、話が出来るようにしなかつたのか？ ふつうであれば、そうするだろう。その後で、二人で話し合つて、これからどうするかを決めたらよいのである。——ところが、この「女（妻）」は、相手に一言も言わず、また、身動きもできないままに「ひと思いに殺している」ということは、何よりも「夫を殺すことを最優先させている」ということである。それでは、なぜ、夫を殺す理由があつたのかと問えば、それは、まず、この女性は、非常に「気の強い」（自尊心の強い）女性であり、それゆえ、盗人に手ごめにされたこと、しかも、それを夫に見られてしまったことが、何よりも「許せない」のであり、それに加えて、私を蔑むような眼差しも、絶対に許せないということになるのだろう。しかも、夫が生きていれば、必ず、この「手ごめ事件」のことを誰かに話すに違ひなく、たとえ誰にも話さなくても、それを知られていること自体、そもそも「許せない」ということであり、それを完全に封じるには、まさに「夫を殺すしかない」ということであり、すべては、自分の「悪夢」を闇に葬るためである。もちろん、何度も「自殺」を図つたと言つてはいるが、それも本当であるかどうかは分からず、現に今も生きていくということは、「わたしもすぐにお供します」という言葉は、未だ遂行されてはいないことになるだろう。とは言え、むろん、いわゆる「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）に深くさいなまれているのも、また、「事実」（ほんとうのこと）なのである。

七、巫女の口を借りたる死霊の物語

——盗人は妻を手ごめにする、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。体も杉の根に縛られている。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真に受けるな、何を云つても嘘と思え。——おれはそんな意味を伝えたいと思った。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に、聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬しさに身悶をした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似も働いたのだ。——盗人はとうとう大胆にも、そう云う話さえ持ち出した。

では、最後の「巫女の口を借りたる死霊の物語」であり、その「本文」は、次のようなものである。それは、「……盗人は妻を手ごめにすると、そこへ腰を下したまま、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。体も杉の根に縛られている。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云う事を真に受けるな、何を云っても嘘と思え。——おれはそんな意味を伝えたいと思った。しかし妻は悄然と笹の落葉に座つたなり、じつと膝へ目をやっている。それがどうも盗人の言葉に聞き入っているように見えるではないか？ おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めている。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合うまい。そんな夫に連れ添っているより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思えばこそ、大それた真似を働いたのだ。——盗人はとうとう大胆にも、そう云う話さえ持ち出した」。

さて、ここまでの「内容」は、どこまでが「ほんとう」で、また、どこから「うそ」なのかは、何とも判別しがいものであるが、ただ、夫は縛られたままであり、また、口も利けず、妻へ何度も「目くばせ」をしたが、それが「正しく伝わっていた」とも思えず、夫の目（主観）から見れば、二人は、むしろ親しくなっていくような感じであり、しかも、「……では、どこへでもつれて行って下さい」と、妻は、確かにそう云ったというのである。

しかも、妻の罪はそれだけではなく、藪の外に出ようとする時に、杉の根のおれを指さして、「……あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません」と。——妻は気が狂ったように、何度もこう叫び立てた。「あの人を殺して下さい」。一度でもこれくらい憎むべき言葉が、人間の口を出た事があるのか！ その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「あの人を殺して下さい」。——妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋っている。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返答をしない。——と思うか思わない内に、妻は竹の落葉の上へ、ただ一蹴りに蹴倒された。盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやった。「……あの子はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事はただ頷けば好い。殺すか？ ——おれは、この言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい」と思ったとある。

妻は、おれがためらっているうちに、たちまち藪の奥へ走り出した。盗人は咄嗟に飛びかかったが、これは袖さえ捉えきれなかった。盗人は、妻が逃げ去った後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切った。そして、それらを持って藪の外へと姿を消した。その跡は、どこも静かだった。おれは縄を解きながら、じつと耳を澄ましていた。おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落とした、小刀が一つ光っていた。おれはそれを手に取ると、一突きにおれの胸へ刺した。おれはそこに倒れたまま、深い静かさに包まれていた。「……その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまった。……」とある。

つまり、夫は、自ら縄を解き、自ら下に落ちていた小刀で自分の胸を刺したことになる。それでは、なぜ、自ら胸を刺したのかと問えば、それは、やはりこのまま武士として「生き恥」をさらしたくないということになるのだろう。そして、その後、藪の奥に隠れていて、恐らく、様子を伺っていたであろう妻は、忍び足で近づいて来て、夫の胸に刺さ

っている小刀を抜き取ったということである。それは、なぜかと問えば、それは、やはり自分が疑われるような証、抛は残したくなかったとともに、できれば、一連の「悪夢」をすべて闇に葬って、何事もなかったようにしたかったということでもあるのだろう。

ところが、血に塗れた自分の「小刀」を引き抜いた時には、どこか、「……自分が夫の胸を差して、それを引き抜くような感覚」があったのかも知れない。そのような「感覚」から、また、結果として、夫を「自殺へと追いやってしまった」というような、そのような「罪の意識」（或いは「良心の呵責」）などから、女（妻）という人は、やがて、検非違使に問われた時に、「……自分が夫の胸を差しました」というような「自供」になつたのではないかと思う。

八、事件の真相

それでは、この事件の「真の内容」は、一体、どのようなものだったのか？ それを簡単に要約して終わりにしたいと思います。——まず、夫が杉の根に縛られ、その前で「妻」が手ごめにされたところまでは、すべて同じである。それゆえ、大事なものは、その次であり、女（妻）の「手ごめ」の後、盗人（多襄丸）という男は、その女（妻）を何とか巧みに口説き説得すると、やがて、女（妻）は、「……ではどこへでもつれて行って下さい」と言ったという。しかも、それだけではなく、二人で藪の外に出ようとする時に、突然、妻は振り向いて、杉の根の「夫」を指さして、「……あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きていては、あなたと一しよにはいられません」と、妻は気が狂ったように何度もこう叫び立てたという。その言葉を聞いた時は、盗人さえ色を失ってしまった。「……あの人を殺して下さい、妻はそう叫びながら、盗人の腕に縋っている。盗人はじつと妻を見たまま、殺すとも殺さぬとも返答をしなかった」とある。

つまり、盗人は、しばらくどうしようかと迷っていたが、突然、妻を竹の落葉の上へと、ただ一蹴りに蹴倒したのである。それは、なぜかと問えば、それは、「……あの人を殺して下さい」と何度も叫ぶ、その「妻の非情な態度」が許せなかったのであり、それゆえ、夫の方へと眼を向けて、「……あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか、返事はただ領けば好い。殺すか？」ということになるが、夫がためらっているうちに、妻は、たちまち藪の奥へと逃げ出してしまふ。その後、盗人は、妻が逃げ去った後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけ夫の縄を切り、そして、それらを持って藪の外へと姿を消して行く。一方、藪の奥へ逃げ込んだ妻は、恐らく、それらの様子を近くでじつと伺っていたが、やがて、夫は、自ら縄を解き、また、自ら下に落ちていた小刀で自分の胸を刺したのを見て、やがて、忍び足で近づいては、夫の胸に刺さっている小刀を抜き取ったのである。それは、やはり、自分が疑われるような証、抛は残しておきたくはなかったということでもあるのだろう。……

つまり、誰も（それは「妻も盗人」も、いわゆる「夫を直接は殺してはいない」のである。夫は、むしろ「武士らしく、自ら命を絶った」のである。確かに「直接は殺してはいない」が、しかし、間接的には「夫を殺している」のである。つまり、夫をして「自ら命を絶つ」ように仕向けたのは、まさに「妻と盗人」に他ならないからである。それでは、どちらが「罪深い」ことなのか？ ——これは、最初が多襄丸の自供の中でも、彼は、「……

…何、男を殺すなぞは、大した事ではありません。わたしは殺す時に、腰の太刀を使うのですが、あなた方は太刀は使わない、ただ権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしという言葉（それは「相手のためと見せかけて、実は（相手をだまして）自分の利益をはかる」）でも殺すでしょう。なるほど血は流れない、男は立派に生きています。——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考えて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません」という文章があつたことを思い出して欲しい。

つまり、どちらが「罪深い」ことなのか？ それは、例えば、盗人（多襄丸）のように、直接、「人を殺す事なのか？」、それとも、例えば、「政財界」その他の人たちのように、「……太刀は使わないが、権力で殺す、金で殺す、どうかするとお為ごかしの言葉だけでも殺すでしょう」、そのように、間接的に「人を死に追いやることか？」、つまり、「作者」（それは「芥川龍之介」）であるが、彼（芥川龍之介）がここで最も「問いたかった」とことは、まさに「そのこと」だったのである。——つまり、直接、「人を殺す」ことは、もちろん、「罪深い」ことではあるが、しかし、一方、間接的に「人を殺す」ことも、それに劣らないくらい「罪深い」ことであるというのが、まさに「作者」（つまり「芥川龍之介」）の「考え方」であり、それこれは、まさに「最も言いたかったこと」に他ならないのである。

*

*

芥川龍之介の世界
(トロッコ)

目次

芥川龍之介の世界

トロッコ

- 一、 冒頭の文章
- 二、 良平と二人の子供
- 三、 若い二人の土工どこう
- 四、 海の見える所
- 五、 藁屋根わらの茶店
- 六、 二件目の茶店
- 七、 衝撃の一言
- 八、 良平の逆走
- 九、 彼の家うちへ
- 十、 その後の良平

※ 参考文献

ト
ロ
ツ
コ

トロッコ

例えば、芥川龍之介の数多くの作品の中には、短編で有名な『トロッコ』という作品もあるかと思うが、その作品の「冒頭の文章」は、次のようなものである。

一、冒頭の文章

小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行った。工事を——といったところが、唯トロッコで土を運搬する——それが面白さに見に行ったのである。トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでいる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走って来る。煽るように車台が動いたり、土工の袷の裾がひらついたり、細い線路がしなったり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思う事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロッコへ乗りたいと思う事もある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然と其処に止まってしまふ。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いのか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのであった。

(本文)

*

*

まず、主人公の「良平」という子供は、年齢は、八つであり、小学二、三年ぐらいかと思うが、毎日、村外れへ、小田原熱海間の軽便鉄道敷設の工事を、工事と言つても、唯トロッコで土を運搬するのが面白くて見に行っていたのである。そして、そのトロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇み、そのトロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走って来る。そして、そのトロッコは村外れの平地へ来ると、自然と其処に止まると同時に、土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りて、その線路の終点に車の土をぶちまけ、それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始めるのである。

さて、主人公の「良平」という子供は、毎日、工事を見学しているうちに、ただ単に見てるだけではなく、やがて、トロッコに颯爽と乗ったり押ししたりしている土工の姿を見ているうちに、子供心にも、土工になりたいと思つたり、また、せめて一度でも土工と一緒にトロッコに乗ってみたいと思つたり、あるいは、たとえ乗れなくても、せめて押す事さえ出来たらと思うようになっていたのである。——つまり、毎日、工事を見学しているうちに、ただ単に見てるだけでは物足りなくなり、今度は、そのトロッコに「……乗つてみたい、押してみたい」というような思いが自然と生じて来たということである。これは、極めて自然な「思いや感情」であり、一般に、子供の心というのは、他人が乗ったりやったりしているのを見て、やがて自分も乗つたりやったりしてみたくなるものである。三輪車や一輪車あるいは自転車、その他、何であれ、他人が乗つたりやったりしているのを見て、やがて自分も乗つたりやったりしてみたくなるものであり、もちろん、それがわれわれ人間の「好奇心」というものであるとともに、われわれ人間のある方向へと向わせているまさに「原動力」にもなっているものである。そして、主人公の「良平」とい

う子供も、「……たとえ乗れなくても、せめて押す事さえ出来たらと思うようになっていた」のである。そして、主人公の「良平」という子供には、そのような思いがあったからこそ、次のような展開にもなっていくのである。

二、良平と二人の子供

或夕方、——それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んでいる。が、その外は何処を見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロッコを押しした。トロッコは三人の力が揃うと、突然ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、——トロッコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行った。

その内にかれこれ十間程（一間は一、八段で約十八段程）来ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押ししても動かなくなつた。どうかすれば車と一しよに、押し戻されそうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたから、年下の二人に合図をした。「さあ、乗ろう！」と。彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗つた。トロッコは最初徐ろに、それから見る見る勢いよく、一息に線路を下り出した。その途端につき当りの風景は、忽ち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動揺、——良平は殆ど有頂天になつた。しかしトロッコは二三分の後、もうもとの終点に止まっていた。（本文）

*

*

さて、主人公の「良平」という子供は、「或夕方」にやって来る。これは極めて大事なところであり、「昼間」ではだめなのである。それでは、なぜ「昼間」だといつたい何がどうだめなのかと問えば、それは、「昼間」では多くの人たちが働いていて、トロッコに近づくことすらできないからである。そこで「夕方」（五時前後）ともなれば、恐らく、多くの土工たちも仕事を終えて家に帰ることになるだろう。その「チャンス」を狙つて、わざわざ「夕方」に、しかも、一人ではなく、二つ年下の弟と同じ年の隣りの子供三人でやって来ているのである。それには、はつきりとした「意図」（企て）があるからであり、それは、たとえ一人では「トロッコ」を動かすことはできなくても、恐らく、三人ならば何とか動かせるのではないかというはつきりとした「思惑」があるのである。そのための「三人」（八歳の自分と六歳の弟と同じ年の隣りの子供）ということである。

さて、夕方、泥だらけのトロッコが薄明るい中に並んでいるだけで、その外には何処を見ても、土工たちの姿は見えなかったとある。そこで、三人の子供たちは、恐る恐る、一番端にあるトロッコを押ししてみるのである。すると、三人の力が揃うと、突然ごろりと車輪はまわり、良平はその音にひやりとしたとある。これは、その音で土工が誰かに気づかれるかと恐れたのと、もう一つは、もしかしたら動かないかも知れないという不安のなかで突然動いたので、ハツとしたのであり、二度目からはもう驚くことはなく、それは、動き出せば、ごろり、ごろりと、三人の手に押されながら、線路を登って行くからである。そして、十間程（約十八段程）来たところで、線路の勾配が急になり出し、いくら押して

も動かなくなった。そこで、主人公の「良平」は、年下の二人に「さあ、乗ろう！」と合図をして、彼等は一度に手を離し、トロッコの上へ飛び乗るのである。すると、最初は徐ろに、それから見る見る勢いよく、一息に線路を下り出し、顔に当る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動揺、主人公の「良平」は、ほとんど有頂天になっていた。それは、まさに彼の「思ったり考えていた通り」の結果になったからであろう。つまり、ここまでは、まだ八歳の子供であった主人公「良平」の「思惑通り」になったということである。しかし、トロッコは、二、三分でもとの終点に止まってしまい、そこで、「さあ、もう一度押しじゃあ」と、元気よく年下の二人に声をかけて、また、トロッコを押し上げにかかったのである。

*

*

さて、ここまでは「子供たちだけの世界」であり、子供たちだけで楽しく遊んでいるという情景である。これは、例えば、公園や学校などの「すべり台」などでも、子供たちが一歩一歩階段を登っては、そのすべり台の上から一気にすべり下り、また、一歩一歩階段を登っては、そのすべり台の上から一気にすべり下りるというようなことを、何度も繰り返しながら子供たちが楽しく遊んでいるというような情景に似たところがあるかと思う。それは、まず、子供たちの「体力でできる範囲」で遊んでいるということであり、それゆえ、精神的にも肉体的にも余裕を持って遊んでいるために、これという「不安や恐怖」などをそれほど感じることもないからこそ、心から楽しめているということにもなるのである。つまり、精神的にも肉体的にも子供たちの「許容範囲内」で遊んでいる限りは、登るのも楽しい、すべるのも楽しいと、心から楽しめている状態であり、あれこれ「不安や恐怖」などを感じることも少ないということである。ただ、あまりにも簡単にできてしまうと今度はつまらないということでも、もつと難しいことに挑戦したくなるのも「人間の特徴」であるとともに、子供たちの精神的・肉体的「許容範囲」というものも、年齢とともにどんどん変化し拡大していくものである。

一方、例えば、小さな子供たちの精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えた「ジェットコースター」などであれば、その小さな子供たちは怖くて怖くてとても乗れないということにもなるのだろう。——つまり、何であれ、自分の精神的・肉体的「許容範囲内」であれば、それほど「不安や恐怖」などを感じることもなく楽しめるかと思うが、自分の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまえば、今度は「不安と恐怖」などに強く襲われることにもなるのだろう。それゆえ、いちばんよいのは、自分の精神的・肉体的「許容範囲」の極めて近いところか、それを少し超えるような「挑戦や冒険心」などもくすぐられるようなものこそ、まさにわくわくドキドキするものであり、今、土工の姿の見えない夕方、三人の子供たちは、彼らの「許容範囲」に極めて近いところでトロッコを押ししたり乗ったりして楽しく遊んでいる真つ只中にあるということである。

*

*

ところが、「さあ、もう一度押しじゃあ」と、良平は年下の二人と一緒に、又トロッコを押し上げにかかったが、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に変わった。

「この野郎！ 誰に断ってトロに触った？」と、其処には古い印裨天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土工が佇んでいた。——そう云う姿が目にはいった時、良

平は年下の二人と一緒に、もう五六間逃げ出していた。——それぎり良平は使いの帰りに、
人気がない工場のトロッコを見ても、二度と乗って見ようと思った事はない。唯その時
の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はつきりとした記憶を残している。薄明りの
中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、——しかしその記憶さえも、年毎に色彩は薄れるら
しい。(本文)

*

*

さて、主人公の「良平」と二人の子供たちは、まさに「有頂天になっていた」その時
に、突然、彼等の後には誰かの足音が聞え出し、聞え出したと思うと、「この野郎！誰
に断つてトロに触った？」と、古い印禪天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土工
の恐ろしい「怒鳴り声」が聞こえて来たということである。これは、まさに背後からいき
なり「冷水」を浴びせかけられたように、三人の子供たちは、恐らく、腰が抜けるほど驚
いたとともに、ものすごい恐怖心に襲われたに違ひなく、三人の子供たちは、もう五六間
も逃げ出していたとある。そして、この「事件」以降、主人公の「良平」という子供は、
何かの「使い」の帰りに、たとえ「……：人気がない工場のトロッコを見ても、二度と乗
って見ようと思った事はない」という「心理状態」に変わってしまう。それは、トロッコ
に乗りたいたいという気持ちは、潜在的には持ち続けているながらも、それよりも、あの古い
印禪天に、季節外れの麦藁帽をかぶった、あの背の高い土工の、あの恐ろしい「怒鳴り
声」の方が勝つてしまい、とてもその気にはなれなかったということである。それは、一
体、なぜなのかと問えば、それは、いわば「トラウマ」に近いものであり、一度でも、心
の底から怖いとか恐ろしいとか或いはいやだというような経験をすると、そのことがいつ
までもその人の「頭の中」(或いは「心の中」)に潜在的に残つてしまい、そのために、
そのことをすることが出来にくくなってしまふということである。

例えば、海で溺れそうになった経験を持つ人は、そのために、海で泳ぐことが怖くなつ
たり、また、何かを食べて食中毒になった人は、そのために、その食べ物を食べることで
できなくなったり、或いは、大火や大地震あるいは大津波、その他、何であれ、一度でも、
心の底から怖いというようなことを経験すると、そのことがその人の「頭の中」(或いは
「心の中」)に潜在的に残つてしまい、そのために、そのことに対しては異常なほど「不
安や恐怖心」などを抱くようになってしまふのである。そして、まだ八歳であった主人公
の「良平」という子供の「頭の中」(或いは「心の中」)に潜在的に残つてしまったもの
は、まさに「……：あの時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はつきりとした記憶
を残している。薄明りの中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、——しかし、その記憶さえ
も、年毎に色彩は薄れるらしい」とある。つまり、主人公の「良平」という子供の場合
には、どちらかと言えば、むしろ一過性のもものに近く、それゆえ、深刻な「トラウマ」に
なるほどではなかったということである。だからこそ、次のような展開へと向かっていく
ことにもなるのである。

三、若い二人の土工

それは、その後十日余りたつてから、良平は又たった一人、午過ぎの工場で佇みなが
ら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだ

トロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登って来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いような気がした。「この人たちならば叱られない」——彼はそう思いながら、トロッコの側へ駆けて行った。「おじさん。押してやろうか？」と云うと、その中の一人、——縞のシャツを着ている男は、俯向きにトロッコを押したまま、思った通り快い返事をした。「おお、押してくよう」と。……良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。「われは中中力があるな」と、他の一人、——耳に巻煙草を挟んだ男も、こう良平を褒めてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくとも好い」——良平は今にも云われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したがり、黙々と車を押し続けていた。良平はどうとうこらえ切れずに、怯ず怯ずこんな事を尋ねて見た。「……何時までも押していて好い？」と聞くと、「好いとも」と、二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。そして、五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其処には両側の蜜柑畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。「……登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから」——良平はそんな事を考えながら、全身でトロッコを押すようにした。(本文)

*

*

まず、ここまでの「本文」を見てみると、主人公の「良平」という子供は、あの「事件」から十日余り経ってから、今度は、「……良平は又たった一人、午過ぎの工事に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた」とある。これは、あの「事件」があった時とは全く違って、まず、子供三人ではなく、主人公たった「一人」であること。しかも、「夕方」ではなく、まさに「……午過ぎの工事に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた」とある。これは、事件があった時とは、その「目的」がはっきりと違っているということである。つまり、一人だけで見学に来たということは、自分一人だけでトロッコに乗ろうという気持ちは全くないのである。しかも、「……午過ぎの工事に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた」ということは、すなわち、「トロッコ」を押す手伝いができるような「トロッコ」はないかと、ずっと捜していたということである。

すると、「……土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登って来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いような気がした」。そして、「この人たちならば叱られない」と、彼はそう思ったとある。つまり、主人公の「良平」という子供は、何よりも「叱られる」ことを恐れていたのであり、それゆえ、叱られずに、「トロッコ」を押す手伝いができるような「トロッコ」はないかと、ずっと捜していたということである。「……すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登って来た」ということである。

*

*

さて、この場面で最も大事な言葉は、「……枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登って来た」という言葉であり、なぜ、これが最も大事な言葉になるのかと言えば、それは、まさに「本線」であるので、当然のことながら、いちばん「長く続く路線」になっているということである。それが結果として、主人公の「良平」という子供を、遙か遠くまで連れて行ってしまいう直接の要因の一つになっているのである。

むろん、主人公の「良平」は、この段階では、又、彼の年齢（八歳）では、そんなことは知るよしもなく、主人公の「良平」は、トロッコの側へ駆けて行き、「おじさん。押しやろうか？」と言うと、その中の一人、——縞のシャツを着ている男は、「おお、押ししてくれ」と、思った通り快い返事をしてくれ、良平は二人の間に入り、力一杯押し始めると、「われは中力があるな」と、他の一人、——耳に巻煙草を挟んだ男も、こう良平を褒めてくれたとある。これは、まさに主人公の「思惑通り」になったということであり、そして、「……登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから」と思うのも、主人公の「良平」という子供は、このまま「ずっと少しでも長くトロッコを何時までも押し続けていたい」と、そう心から願ったということであり、まさかトロッコに乗せてもらえるなどとは、この時点ではまだ考えてはいなかったからであり、それゆえ、できるだけ長くトロッコを押し続けていたいという思いで一杯になっていたのである。

そして、蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直に飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひたひたに線路を走り出した。「……押すよりも乗る方がずっと好い」——良平は羽織に風を孕ませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」——そうもまた考えたりした。（本文）

さて、ここまでは、主人公の「良平」という子供の精神的・肉体的「許容範囲内」で遊んでいるために、押すのも楽しい、乗るのも楽しいと、心の底から楽しんでる状態であり、それゆえ、これという「不安や恐怖」などを感じることもほとんどなかったということである。だからこそ、「……行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」などと、できるだけ長くまた楽しく遊んでいたという「考え方」になっているのである。ところが、次の段階からは、そのような、まさに「……押すのも楽しい、乗るのも楽しい」と、心の底から楽しんでる状態から、やがて、一抹の「不安や恐怖」などが生じて来るようになるが、それは、次のような場面からである。

四、海の見える所

それは、竹藪のある所へ来ると、トロッコは静かに走るのを止めた。三人は又前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。爪先上りの所所には、赤の線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあった。その路をやつと登り切ったら、今度は高い崖の向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乗った。車は海を右にしなから、雑木の枝の下を走って行った。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかった。「……もう帰ってくれば好い」——彼はそれも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も帰れない事は、勿論彼にもわかり切っていた。（本文）

さて、主人公の「良平」という子供は、軽便鉄道敷設の工事を何度も見学しているう

ちに、ただ単に見てるだけでなく、やがて、トロッコに颯爽と乗ったり押ししたりしている土工の姿を見ているうちに、子供心にも、土工になりたいと思ったり、また、せめて一度でも土工と一緒にトロッコに乗ってみたいと思ったり、あるいは、たとえ乗れなくても、せめて押す事さえ出来たらと思うようになっていたのである。そして、今やその「夢」は叶って現実となり、まさに土工と一緒にトロッコを押したり乗ったりして心から楽しんでる「心的状態」にあるということである。

それは、最初、三人でトロッコを押し続けている、蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになったので、一人が良平に「やい、乗れ」と云って、三人は、トロッコに同時に乗って、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひた迂りに線路を走り出し、竹藪のある所へと来ると、今度は、トロッコは静かに走るのを止めたので、三人はまた前のように重いトロッコを押し始め、そして、その竹藪は何時しか雑木林になったとある。ここまでは、蜜柑畑をはじめ、竹藪や雑木林などの生い茂っているところを通っていたので、自分が今どの辺にいるのかもよく分からない状況であったが、やがて、その雑木林の落ち葉の積もる線路をやつと登り切ったら、今度は高い崖の向うに、広広と薄ら寒い海が開け、それと同時に、良平の頭には、余りに遠く来過ぎたことが、急にはつきりと感じられたとある。

これは、視界が大きく開けたので、初めて自分が今どの辺に居るのかがはつきりと認識できたとともに、自分が余りに遠く来過ぎたことが急にはつきりと感じられたということである。この時、初めて、主人公「良平」の「頭の中」(或いは「心の中」)では、はつきりと「不安の思い」が生じて来たということである。それは、主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」を少しでも超えてしまったという認識であり、しかも、三人はまたトロッコへ乗って、車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走って行ったとある。これでは、家からますます遠く離れていくばかりであり、主人公の「良平」の「頭の中」(或いは「心の中」)では、もうとても今までのように「面白い気持ち」になることはできず、それどころか、むしろ「……もう帰ってくれば好い」のにと念じるほどになっていたのである。これは、誰にもその人なりの精神的・肉体的「許容範囲」というものがあり、その精神的・肉体的「許容範囲」を超える割合が大きくなればなるほど、それだけ「不安や恐怖心」などもますます増していくことになる。——そして、まだ八歳であった主人公「良平」の場合も、その精神的・肉体的「許容範囲」を超える割合が大きくなればなるほど、それだけ「不安や恐怖心」などもますます増していくことになり、しかも、トロッコは、行く所まで行き着かなければ、トロッコも彼等も帰れないことは、勿論彼にもわかり切っていたのであり、だからこそ、余計に「不安や恐怖心」などを増していたのである。ただ、この時に、若しも「家に帰りたい」と泣き叫んでいたら、あるいは、この時点で家に帰れたかも知れない。しかし、一方では、自ら望んでトロッコを押したり乗ったりしていたのだから、もう「家に帰りたい」と泣き叫ぶような行為は、いくら子供でも子供なりの自尊心(プライド)があったのかも知れない。あるいは、ただ(大人に対して)言い出せずにいただけなのか、それとも、大人の方から言い出してくれることを待っていたのか、この辺のところは、なんとも判別しがいいところである。

五、藁屋根の茶店

さて、その次に車の止まったのは、切崩した山を背負っている、藁屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へはいると、乳呑児をおぶった上さんを相手に、悠悠と茶など飲み始めた。良平は独りいらしながら、トロッコのまわりをまわって見た。トロッコには頑丈な車台の板に、跳ねかえった泥が乾いていた。

少時の後茶店を出て来しなに、巻煙草を耳に挟んだ男は、(その時はもう挟んでいなかったが)、トロッコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「難有う」と云った。が、直に冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂いがしみついていた。(本文)

*

*

さて、この場面は、まだ若い二人の大人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」と、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」との「決定的な違い」であり、まず、まだ若い二人の大人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」というのは、休日を除けば、毎日、朝から夕方まで、トロッコを押ししたり、乗ったりすることは、まさに「日常の作業」であり、それゆえ、たとえそれが過酷な「肉体労働」であつたとしても、まだ若い二人の大人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」で十分に行なわれているものであり、それゆえ、トロッコを押ししたり、乗ったりすることは、余裕を持ってできているのであり、従つて、これという「不安や恐怖心」などはそれほど感じないで済んでいるのである。もちろん、若い二人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまえば、それは、さすがに「過酷過ぎる」ということで、きつくはなるだろうが、ここでは、そのような「労働設定」にはなっていないのである。

そして、次に車の止まった場所は、背後に切崩した山のある、藁屋根の茶店の前であり、若い二人の土工は、(恐らく、いつものことのように)、その茶店へ入ると、乳呑児をおぶった上さんを相手に、悠悠とお茶などを飲み始めたのである。これは、そのまま若い二人の精神的・肉体的「余裕を表している」ものであり、一方、まだ八歳の主人公「良平」と言えば、独りいらしながら、トロッコのまわりをまわって見ている。これは、逆に、主人公「良平」の精神的・肉体的「余裕のなさの表れ」であり、少時の後、茶店から出てきた、巻煙草を耳に挟んだ男、(その時はもう挟んでいなかったが)、その人から新聞紙に包んだ駄菓子をもらつても、心に余裕がないために少しも嬉しくなく、だからこそ、良平は冷淡に「難有う」と言うのであるが、しかし、わざわざ買ってくれた善意の行為に対して、直に冷淡に対応するのは相手にすまないと思ひ直して、主人公の「良平」は、その冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れたとなるのである。

これは、一つの「対応」(パフォーマンス)であり、例えば、誰かから何らかの「手土産」などをもらった時には、後で、(ひまの時にも)、開けて見ますではなく、できるなら、その場で開けて、物であれば、素敵な「お土産ありがとう」とお礼を言い、また、食べ物などであれば、実際に食べてみて、これは「実に美味しい」とお礼を言うのが、ふつう一般的な「対応」(パフォーマンス)の一つになっているということである。

ところで、若い二人の土工は、なぜ、どうして、まだ八歳の主人公「良平」という子供を「トロッコ」に乗せるようなことをしたのだろうか？ 本来であれば、極めて危険な「工事現場」に八歳の子供などを入れるなどは、絶対にあつてはならない「禁止事項」に

なっていたはずであり、それが、まさに最初に大きな声で怒鳴る土工の行為であったと思うが、それは、次のようなことではなかったかと思う。——まず、最初に考えられることは、誰かに押ししてもらえれば、それだけ楽になることは当然のことであるが、しかし、まだ八歳に過ぎない子供の「力」などはたかが知れたものであり、かえって作業の邪魔になるばかりである。だとすれば、それ以外の、何かほかの理由も考えて見なければならぬ。それは、次のようなことではなかったかと思う。

まず、まだ八歳の主人公の「良平」という子供は、毎日のように、その工事を見に来ていたとある。だとすれば、当然のことながら、若い二人の土工たちをはじめ、そこで働く多くの人たちも、恐らく、主人公の存在は知っていたかも知れない、そして、今日もあの子が来ているよと、噂になるようなこともあったかも知れない。それでは、なぜ、毎日、見に来るのだろうかと考えた時に、それは、やはり子供心にも「トロッコ」に一度でも乗ってみたいのではないかと、すぐにも思いつくことではないかと思う。そして、若い二人の土工たちも、自分が子供の頃には、やっぱりトロッコに乗ってみたいと思っていたものだと話すようなことがあっても、なにも不思議なことはいないだろう。つまり、子供の頃には、多くの子供たちが、一度はトロッコに乗ってみたいような気持ちに襲われるものであり、それゆえ、八歳の主人公「良平」という子供に「トロッコ」を押してもらったので、いわばそのお礼のつもりでトロッコに乗せてやろうと思ったのかも知れない。それは、主人公の「良平」に新聞紙に包んだ駄菓子などをくれたのと同じような心理ではないかと思う。それに加えて、良平の「……何時までも押していて好い？」というような言葉も聞いていたので、恐らく、この子は、トロッコに乗ってみたいんだらうなあと推測したということである。……

六、二件目の茶店

さて、茶店を出て、再び、三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心は外の事を考えていた。そして、その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があった。土工たちがその中へはいった後、良平はトロッコに腰をかけたが、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花の咲いた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」——彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいらなかった。トロッコの車輪を蹴って見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に気もちを紛らせていた。(本文)

*

*

さて、この場面は、再び、三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心は外の事を考えていたとある。この時の主人公「良平」の「心の状態」というのは、当然のことながら、自分は早く家に帰りたいと思っていながらも、実際にやっていることは、それとは全く真逆の、自分の家からますます遠く離れていくようなことの手伝いを自ら行なっているという、この何とも言えない矛盾を感じながらどうしたらよいかと考えていたということである。そして、その坂を向うへ下り切ると、又同じような茶店があり、土工たちは、(当然のことのように)、その中へと入っていった。これは、若い二人の土工たちにとっては、実にごく当たり前の極めて「日常の行

動パターン」に過ぎないのに対して、一方の、まだ八歳の主人公「良平」にとっては、今までの人生の中で未だ一度も経験したこともないような実に驚くべき「非日常的な場面」に直面している」のであり、それゆえ、どうしよう、どうしようと、帰る事ばかり気にしていたのである。しかも、茶店の前に咲く梅の花への西日の光が消えかかっている。ああ、「もう日が暮れる」——そう考えると、主人公の「良平」は、もうぼんやり腰などかけてもいられず、トロツコの車輪を蹴って見たり、一人では動かないのを承知でうんうんそれを押して見たり、——そんなことで気持ちを紛らせていたのである。

六、衝撃の一言

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にこう云った。「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」、「あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するぞら」と。良平は一瞬間呆気にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならぬ事、——そう云う事が一時にわかったのである。良平は殆ど泣きそうになった。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いている場合ではないと思つた。彼は若い二人の土工に、取って附けたような御時宜をすると、どんだん線路伝いに走り出したとある。(本文)

*

*

さて、この場面こそは、まさに最大の「クライマックス場面」の一つであり、それは、次のようなことである。つまり、まだ八歳に過ぎない主人公の「良平」という子供の「頭の中」(或いは「心の中」)では、実に色々な「思いや考え」などがあれこれ現われたり消えたりしているなかで、どうしよう、どうしようと、帰る事ばかり気にしていたが、その「どうしよう、どうしよう」という最大の「難問」が、一瞬にして、急転直下、次の言葉で問答無用で「最終決着」してしまったということである。それは、「……われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」、「……あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するぞら」と、無造作に言い放たれて、良平は一瞬間呆気にとられたとある。この「呆気にとられた」というのは、一つは、もう少し大人らしい「思いやり」のある優しい決着方法もあるのではないかという思いと、もう一つは、まだ八歳に過ぎない主人公の「良平」にとつては、まさに「一人だけ突然無造作に放り出されたような、或いは、いきなり突然見捨てられたような孤独感」に強く襲われたということである。

そして、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」という子供の「頭の中」(或いは「心の中」)では、次のような「思い」が一瞬のうちに駆けめぐったということである。それは、もうすぐ暗くなるということ、去年の暮れに母親と一緒に岩村に来たが、今日の道のりは、それよりも三倍も四倍もあるということ、そして、もう一つは、これからたった一人で、歩いて帰らなければならぬということが、一時にわかったということである。良平は殆ど泣きそうになった。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いている場合ではないとも思つた。これは、実に素晴らしい認識であり、なぜなら、現状を冷静に判断する能力と感情に流されない強い精神を持っているからである。そして、主人公の「良平」は、若い二人の土工に、取って附けたような御時宜をすると、これは、若い二人の土工への依存心(助

けて貰いたい) 気持ちを断ち切つて、どンドン線路伝いに走り出したということである。

* *
ところで、この若い二人の土工の、「……われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」、「……あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するぞら」という言葉は、まだ八歳に過ぎない子供に対して、もうすぐ暗くなるというのに、かなりの距離を、しかも、これからたった一人で、暗い夜道を帰らせようとするのは、少し酷な言葉ではないかと思われるかと思うが、しかし、それは、次のようなことなのである。——つまり、若い二人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」と、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」との「決定的な違い」から生じて来る問題であり、それは、若い二人の土工の精神的・肉体的「許容範囲」から見れば、もうすぐ暗くなることやここまでの距離感あるいはその暗い夜道を一人で帰えるというようなことは、若い二人の土工にとっては、ほとんど何でもないように感じられるようなものであるのに対して、一方の、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」という子供にとっては、もうすぐ暗くなるということ、また、かなりの距離をたった一人で暗い夜道を帰らなければならないということは、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」から言えば、それは、もう死ぬほどつらく怖いことになるという、そういう精神的・肉体的「許容範囲」の「決定的な違い」から生じて来る問題になるということである。

例えば、暗い夜道を一人で帰えるというようなことは、大人の人たちにとっては、それほどもうどうということではなくても、まだ八歳に過ぎない子供たちにとっては、それは、まさに死ぬほど怖いということになるのである。また、距離感にしても、大人の人たちが持っている「距離感」と、まだ八歳に過ぎない子供たちが持っている「距離感」とでは、全く全然違うものであり、大人の人たちにとっては、たとえ何でもないような距離でも、まだ八歳に過ぎない子供たちにとっては、それは、死ぬほど長い距離に感じられるというようなことは、いくらでもあるのである。それは、すべてのことについて言えることであり、つまり、それは、何であれ、その人の精神的・肉体的「許容範囲」であれば、それほど「不安や恐怖」などを感じることなく楽しめるかと思うが、一方、その人の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまえば、今度は「不安と恐怖感」などに強く襲われることにもなってしまうのである。それゆえ、いちばんよいのは、自分の精神的・肉体的「許容範囲」の極めて近いところか、それを少し超えるような「挑戦や冒険心」などもすぐられるようなところこそ、まさにわくわくドキドキするところであり、それゆえ、その人にとっては最も「楽しめる領域」になるのである。

八、良平の逆走

さて、良平は少時無我夢中に線路の側を走り続けた。その内に「懐」の菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側へ抛り出す次手に、板草履も其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙かに軽くなった。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駆け登った。時時涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪んで来る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。竹藪の側を駆け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかっていた。良平は、愈

気が気でなかった。往きと返りと変るせいか、景色の違うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡れ通ったのが気になったから、やはり必死に駆け続けたなり、羽織を路側へ脱いで捨てた。……

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助かれば——」、良平はそう思いながら、這つてもつまずいても走つて行つた。やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事が見えた時、良平は一思いに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駆け続けた。——彼の村へはいつて見ると、もう両側の家には、電燈の光がさし合つていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでいる女衆や、畑から帰つて来る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。(本文)

*

*

さて、まだ八歳の主人公「良平」は、しばらく無我夢中で線路の側を走り続けたとある。そして、その内に「懐の菓子包みが、(走るのに)邪魔になることに気がついたから、それを路側へ抛り出す次手に、板草履も其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙かに軽くなつたとある。——これは、家に帰ることを何よりも最優先させて、それを妨げるもの、あるいは邪魔になるものは、すべて排除したということである。そして、今まで来た線路の側を逆走するような形で、主人公の「良平」は、左に海を感じながら、急な坂路を駆け登つた。時々涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪んで来る。——それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴つたとある。この時々涙がこみ上げて来るのは、むろん、幾つかの理由があるかと思うが、この場合は、やはり「不安や恐怖感」などから自然と涙が出てきて、その涙は鼻の方へと流れ込んで、鼻だけは絶えずくうくう鳴つていたということになるのだろう。

そして、竹藪の側を駆け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかつていた。良平は、愈気が気でなかった。往きと返りと変るせいか、景色の違うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡れ通つたのが気になつたから、やはり必死に駆け続けたなり、羽織を路側へ脱いで捨てたとある。——まず、このトロッコ路線の全行程であるが、それは、最初、「……村外れの工事も蜜柑畑↓竹藪↓雑木林↓海が見える所↓藁屋根の茶店↓二件目の茶店」までであり、その茶店から、今度は、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」という子供は、ほとんど無我夢中で線路の側を走り続けるのである。それは、まさに逆走であり、「……二件目の茶店↓藁屋根の茶店↓海が見える所↓雑木林↓竹藪↓蜜柑畑↓村外れの工事も彼の村↓彼の家」へと帰つて来るのである。

それは、本文では、蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。「命さえ助かれば——」、良平はそう思いながら、這つてもつまずいても走つて行つた。やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事が見えた時、良平は一思いに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駆け続けた。——彼の村へはいつて見ると、もう両側の家には、電燈の光がさし合つていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでいる女衆や、畑から帰つて来る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

例えば、村外れの工場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなつた。しかしその時
もベそはかいたが、とうとう泣かずに駆け続けたとある。これは、一体、どのようなこと
かと敢えて問えば、それは、恐らく、一思いに泣いてしまうと、そこまでずっと張り詰
めた「思いや緊張感」などが一気に解放されてしまうとともに、全身の力も萎えてしま
うものだからである。それでは、かえって、走ることが出来なくなったり、或いは、走
ることに支障をきたすことにもなってしまうからだろう。そして、「命さえ助かれば——」、
良平はそう思いながら、泣いてもつまずいても走つて行つたとある。これは、つまり、ま
だ八歳に過ぎない主人公「良平」という子供にとっては、死ぬか生きるか、ほとんど「命
がけの逆走劇」であつたということである。それは、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」
の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまつたということである。だからこそ、
次のような現象が起こることにもなるのである。

九、彼の家へ

それは、彼の家の門口へ駆けこんだ時、良平はとうとう大声に、わつと泣き出さずには
いられなかつた。その泣き声は彼の周囲へ、一時に父や母を集まらせた。殊に母は何とか
云いながら、良平の体を抱えるようにした。が、良平は手足をもがきながら、啜り上げ啜
り上げ泣き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ
集つて来た。父母は勿論その人たちは、口に彼の泣く訣を尋ねた。しかし彼は何と云わ
れても泣き立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を駆け通して来た、今までの心細
さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、(本文)

さて、まだ八歳に過ぎない主人公「良平」という子供は、彼の家の門口へ駆けこんだ
時、良平はとうとう大声に、わつと泣き出さずにはいられなかつたとある。これは、一
体、どのような「心的状態」かと敢えて問えば、それは、何か恐ろしいほどの「不安や緊張感」
その他などから真に解放されたような時には、われわれ人間というのは、まさにその「安
堵感」から、一気にわつと泣き出さずにはいられないほどの強い情動に襲われるとともに、
その強い情動の「涙」というのは、自分でも止めようにも止められないほどのものになつ
ていくのである。ましてや、まだ八歳に過ぎない子供であれば、なおさらのことである。
そして、父母は勿論その他の人たちも、口に彼の泣く訣を尋ねた。しかし彼は何と云わ
れても泣き立てるより外に仕方がなかつたとある。それは、他人に説明でき得るような単
純な種類の情動などではなく、それは、もっと人間の「根源的な情動」であり、まだ八歳
に過ぎない主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまつたこと
ろの、その何とも言いようのない「不安や恐怖感」その他からの解放から生じて来るとこ
ろの「情動」であり、それは、あの遠い路を駆け通して来た、今までの心細さをふり返る
と、「……いくら大声に泣き続けても、足りない気持ちに迫られながら……」ということ
になるのである。

十、その後の良平

さて、最後の「本文」であるが、それは、「……良平は二十六の年、妻子と一しよに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？——塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。(本文・完)

*

*

まず、主人公の「良平」は、二十六歳の時、妻子と一緒に東京へ出て来たのである。だとすれば、二十五歳までは、彼の村にいて、高校卒か、大学卒かは分からないが、そこで就職をし、結婚をして、子供もいたということである。そして、二十六歳の時、妻子と一緒に東京へ出て来ては、今は、或る雑誌社の二階で、校正の朱筆を握っているとある。つまり、彼の子供の頃の一つの夢であった颯爽とトロツコに乗ったり押したりする「土工」になりたいというような想いは、恐らく、あの「事件」(逆走)以来、それがいわば「トラウマ」のようになっていて、今では、或る雑誌社の二階で、校正の朱筆を握るような職業に就いているということである。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないのに？ それは、一体、どのようなことかと敢えて問えば、それは、次のようなことである。

つまり、まだ八歳に過ぎなかった主人公「良平」という子供は、ほとんど無我夢中で線路の側を走り続けたのである。それは、まさに逆走であり、「……二件目の茶店↓藁屋根の茶店↓海が見える所↓雑木林↓竹藪↓蜜柑畑↓村外れの工事場↓彼の村↓彼の家」へと、「命さえ助かれれば——」と、そう思いながら、泣いてもつまずいても走り続けたのである。それは、つまり、まだ八歳に過ぎなかった主人公「良平」という子供にとっては、まさに死ぬか生きるか、ほとんど「命がけの逆走劇」であったとともに、まだ八歳に過ぎなかった主人公「良平」の精神的・肉体的「許容範囲」を遙かに超えてしまった出来事であったがために、その後、何かの折にふと思ひ出されることがあり、それは、一種の「トラウマ」に近いものになっていて、ふだん、あれこれのことがうまく行っているような時には、彼の「無意識の世界」に深く眠っているような状態であるが、しかし、何か「不安や恐怖感或いは困難」などに襲われたような時には、また、そうではないような時にも、ふとあの時のことが思ひ出されることがあるということである。……

そして、塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。——これは、塵勞(例えば「仕事や生活その他」)などに疲れた彼の前には、今でもやはりあの時のような「薄暗い藪や坂のある路」(それは「不安や恐怖感或いは困難」)などが、細細と一すじ断続(時々途切れながら続いている)ということである。——この最後の「断続」という言葉は、全く途切れることなく続いているのではなく、時々途切れながら続いているということであり、それゆえ、あれこれのことがうまく行っているような時には、薄暗い藪や坂のある路(それは「不安や恐怖感或いは困難」)などは、彼の「無意識の世界」に深く眠っているような状態であるが、しかし、何か「塵勞」(例えば「仕事や生活その他」)などに疲れたような時には、今でもあの時のような「薄暗い藪や坂のある路」(それは「不安や恐怖感或いは困難」)などを感じるようなことがあるとともに、これから先も(時々途切れながらも)続いていくことになる

の
だ
ろ
う
と
い
う
こ
と
で
あ
る
。

*

*

「参考文献」

- ※底本「羅生門」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「杜子春」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「蜘蛛の糸」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「藪の中」芥川龍之介著（「青空文庫」）
- ※底本「トロッコ」芥川龍之介著（「青空文庫」）